

長岡京市文化財調査報告書

第 24 冊

1990

長岡京市教育委員会

序 文

90年代を迎え、いよいよ21世紀に向けたまちづくりが本格的に始動しました。本市においては、今年度も“ふれあい都市 長岡京”をめざし、「緑豊かな自然と心ふれあう長岡京市」をつくりだすため、様々な取組が進められてきております。

歴史とロマンを秘めた勝竜寺城跡を近隣公園として整備・再興する工事が本格的に開始され、堀跡や土塁跡が復元整備されています。また市内の道路には市民の方々により「ガラシヤ通り」「丹波街道」などの愛称がつけられ親しみやすいものになりました。

一方、新総合計画第2期基本計画の策定に向け、町づくりへの市民提案やアンケート調査が行われました。アンケートでは、「長岡京市に今後とも住みたい」と83%の方が答え、交通網など生活基盤の整備とともに自然や水の保護対策を求める意見が高率となっています。また、市民提案ではふるさと賞に輝いた「長岡京とガラシヤ祭り」をはじめ、歴史資料館建設など文化遺産を守りながら、地域の活性化を図っていく提案が数多く寄せられました。

このように、緑豊かな自然や水、そして誇りうる文化遺産を守りながら、心ふれあうまちづくりを求める多くの声や施策は、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」を求める社会へと大きく変貌していることを象徴するものではないでしょうか。また、日頃から文化遺産の保護を使命とする私どもにとっては、従来の「開発の中での保護」ではなく、「自然環境や歴史的環境を生かした中の開発を」と発想の転換を計るとともに、まちづくりにもそうした視点から大胆な施策を提言していく必要性を痛感する次第であります。

ここに刊行いたします報告書は、平成元年度中に教育委員会が国庫補助事業として実施しました調査成果をまとめたものであります。その内容といいたしましては、長法寺南原古墳、長岡京跡、祭ノ神遺跡・長法寺などに関するものであります。

これらの成果が本市の歴史を解明する上で貴重な資料となるとともに市民の歴史学習資料として広く活用していただけることを期待しています。

最後になりましたが、調査に当たり数々のご指導をいただいた諸先生方並びに関係行政機関、また発掘調査にご理解とご協力を賜りました土地所有者の方々に、紙上を借りまして厚くお礼申し上げる次第でございます。

平成2年3月

長岡京市教育委員会

教育長 中 小 路 健

凡　　例

1. 本冊は、平成元年度に長岡市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほかの発掘調査の概要報告である。
2. 上記の調査地は付表-1のとおりである。その位置は第1図に示した。
3. 長岡京跡の調査の次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報（1977）』昭和52年）による小字名をもとにした地区割に従った。
4. 長岡京内の条坊名は、山中章他「第126図長岡京条坊図」（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 1982年）による呼称に従った。
5. 各調査報告の執筆者は、各章のはじめに記した。
6. 本書の編集は長岡市教育委員会管理課文化財係中尾秀正が担当した。
7. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々の御協力を得た。

また、図面のトレースには、財団法人長岡市埋蔵文化財センター白川成明氏の御協力を得た。

〔技術補佐員〕 松木武彦・北條芳隆

〔調査作業員〕 麻田安太郎・井本千代治・岩岸三郎・佐藤昭三・田頭道登・高瀬嘉一郎
高瀬親年・中村正雄・平木秋夫・宮田泰司

〔調査補助員・整理員〕 池庄司淳・小田賢・大庭重信・坂根瞬・鈴木一有
鈴木敬二・杉井健・清家章・月本一武・橋田邦夫・平田洋司
藤原隆・松井久宣・山田雄久・吉岡勝則・渡辺明英・岩川絢子
占部真里・奥田泰江・川島睦子・小畠絢子・白井美友紀・鈴木美美子
田中佐知子・田中智紀・高橋順子・藤井真樹・前田明美・吉沢美香

付表-1 本書報告調査一覧表

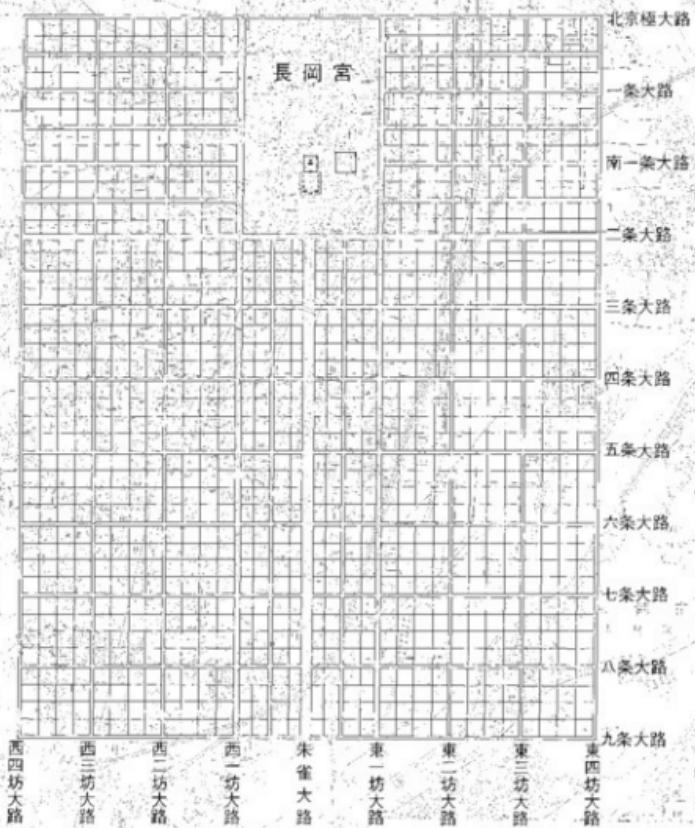
調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間 (現地)	調査面積	備考
長法寺南原古墳 第6次調査		長岡市長法寺 南原9番地	森内治作	1989. 7.14~8.19	90m ²	前方部中央部で 小堅穴石室確認
弁天芝丘陵の 試掘調査		長岡市栗生弁 天芝27番地ほか	高橋淳夫 高橋久	1989. 7.14~8.19	60m ²	
長岡京跡 右京第330次調査	TANIEHR-4	長岡市今里三 丁目114-1ほか	正木喜久子	1989. 6.12~8.11	313m ²	今里遺跡 乙訓寺跡
祭ノ神遺跡第2次 ・長法寺調査	TCTJTD-2	長岡市長法寺 谷田	宗教法人長法寺 代表役員川西敏裕	1989. 7.26~9.28	198m ²	長法寺関係

第1図 本書報告調査地位位置図



長岡京条坊復原図

平城京型復原による



本 文 目 次

序 文.....	i
凡 例.....	ii
第 1 章 長法寺南原古墳第 6 次調査概要.....	1
1 調査経過 2 検出遺構 3 出土遺物 4 総 拙	
第 2 章 弁天芝丘陵の試掘調査概要.....	15
1 調査経過 2 調査の結果 3 弁天芝丘陵付近採集の石棺・石室石材	
第 3 章 長岡京跡右京第 330 次調査概要.....	27
1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物	
5 まとめ	
第 4 章 祭ノ神遺跡第 2 次・長法寺調査概要.....	41
1 はじめに 2 地理的環境 3 長法寺の歴史 4 調査経過	
5 検出遺構 6 出土遺物 7 長法寺の建築と建築遺構	
8 まとめ	
付 載 長岡京市埋蔵文化財発掘調査に伴う基準点測量.....	65

図 版 目 次

長法寺南原古墳第6次調査

- | | | |
|------|--------------------------|------------------------|
| 図版 1 | (1) 調査区全景(北から) | (2) 調査区全景(北から) |
| 図版 2 | (1) 小堅穴式石室全景(西から) | (2) 小堅穴式石室全景(北から) |
| 図版 3 | (1) 小堅穴式石室全景(東から) | |
| | (2) 小堅穴式石室攢乱土除去後の状況(東から) | |
| 図版 4 | (1) 小堅穴式石室西側小口部 | (2) 小堅穴式石室西側小口部(床面の状況) |
| 図版 5 | (1) 円筒埴輪(1) | (2) 円筒埴輪(2) |
| 図版 6 | (1) 円筒埴輪(3) | (2) 円筒埴輪ヒレ部 |

弁天芝丘陵の試掘調査

- | | | |
|------|--------------------|-----------------|
| 図版 7 | (1) 調査区中央部の状況(西から) | (2) 調査区中央部の堆積状況 |
| 図版 8 | (1) 丘陵南側崖面の落ち込み | (2) 落ち込みの断ち割り |

長岡京跡右京第330次(7 A N I H R - 4 地区)調査

- | | | |
|-------|--|-------------------------|
| 図版 9 | (1) 調査地全景(東から) | (2) 調査地全景(拡張後 西から) |
| 図版 10 | (1) 調査地全景(拡張後 南から) | (2) 土器溜まり S K33004(南から) |
| 図版 11 | (1) 井戸 S E33008(西から) | (2) S E33008遺物出土状況 |
| | (3) S E33008断面(東から) | (4) P 49遺物出土状況 |
| | (5) S X33009検出状況 | |
| 図版 12 | (1) P97・P88 (2) P94 (3) P93 (4) P101 (5) P110
(6) P118・P119 (7) P117 (8) P108・P121 | |
| 図版 13 | (1) P37・P39 (2) P98 (3) P77・P64 (4) P68 (5) P83
(6) P19A・P19B (7) S E33011とP92 (8) S E33015 | |
| 図版 14 | (1) 土器溜まり S K33004 出土遺物 (2) 井戸 S E33008出土遺物 | |
| 図版 15 | (1) 円盤 (2) その他の出土遺物 | |

祭ノ神遺跡第2次・長法寺(7CTJTD-2地区)調査

- 図版 16 (1) 調査地全景(上層遺構面-北東から)
 (2) 調査地全景(中層遺構面-北東から)
- 図版 17 (1) 調査地全景(下層遺構面-北東から)
 (2) 碓石建物S B02-A・Bと基壇(南から)
- 図版 18 瓦器塊II・III
- 図版 19 瓦器塊I、須恵器坏・鉢、染付鉢、瓦器鉢
- 図版 20 (1) 土師器皿、白色土器三足盤 (2) 土師器盤
 (3) 金箔製品断片と土師器皿に付着した金箔
 (4) 線刻・有孔土師器、赤色顔料付着土師器、墨書き土器、ロクロ成形土師器
- 図版 21 基壇:石列裏込め出土 軒瓦、墨書き土器、石鍋
- 図版 22 (1) 基壇・基壇裾出土 墨 (2)貨幣裏面 (3) 基石と磨製石器
 (4) 石製品 (5) 基壇出土 鉄釘・横櫛 (6) 基壇出土 貨幣
- 図版 23 (1) 基壇・基壇裾出土 陶磁器
 (2) 基壇・基壇裾出土 平安時代瓦・近世瓦質鉢
 (3) 基壇出土 弥生土器 (4) 基壇出土 須恵器・灰釉陶器

挿 図 目 次

第1図 本書報告調査地位置図 vi

長法寺南原古墳第6次調査

第2図	長法寺南原古墳の位置	1
第3図	調査風景	2
第4図	小竪穴式石室擾乱土中の礫石	2
第5図	発掘区配置図	3
第6図	小竪穴式石室上面平面図・埋土断面図	4
第7図	小竪穴式石室平面図・立面図・断ち割り断面図	5
第8図	調査区平面図	8
第9図	盛土断ち割り断面図	9
第10図	円筒埴輪実測図(1)	11
第11図	円筒埴輪実測図(2)	12
第12図	円筒埴輪実測図(3)	12

弁天芝丘陵の試掘調査

第13図	調査位置図	15
第14図	小丘陵最高部の現状	17
第15図	調査風景	17
第16図	地形測量図	18
第17図	調査区設定図	19
第18図	調査区平面図・断面図	20
第19図	調査区西側	21
第20図	調査区中央部	21
第21図	調査区西側の堆積状況	21
第22図	集石の状況	22
第23図	集石実測図	22
第24図	丘陵南側崖面断面図・断ち割り断面図	23

第25図	石棺・石室石材実測図	25
------	------------	----

長岡京跡右京第330次（7 A N I H R - 4 地区）調査

第26図	発掘調査地位置図	27
第27図	調査前風景	28
第28図	検出遺構図	31
第29図	土壤 S K33004実測図	33
第30図	井戸 S E33008出土遺物実測図	35
第31図	土器溜まり S K33004出土遺物実測図	36
第32図	出土遺物実測図	37
第33図	出土遺物実測図	38
第34図	円盤実測図	39

祭ノ神遺跡第2次・長法寺（7 C T J T D - 2 地区）調査

第35図	発掘調査地位置図	41
第36図	明治28年の長法寺	42
第37図	乙訓の代表的寺院分布図	43
第38図	基壇上層 検出遺構図	44
第39図	上層遺構 基壇西辺石列 S X01南半部 平・側面図	45
第40図	上層遺構 基壇北辺石列 S X02 平・側面図	45
第41図	上層遺構 基壇西辺石列 S X01北部 平・側面図	46
第42図	礎石建物 S B01 P-73染付上絵鉢出土状況	47
第43図	埋鉢 S X10出土状況	47
第44図	中層検出遺構図	48
第45図	下層検出遺構図	48
第46図	中・下層検出礎石建物 S B02-A・B	49
第47図	調査地断面図	50
第48図	瓦器・皿実測図	53
第49図	土師器・白色土器実測図	54
第50図	土師器・須恵器・瓦実測図	55
第51図	磨製石器	56

第52図	土師器皿法量分布図	56
第53図	瓦器焼・皿法量分布図	56
第54図	長法寺本堂前景	57
第55図	解体建物平面図	57
第56図	想定復原外形図	59
第57図	絵巻物に描かれた庵室の想定される平面図	60
第58図	中層遺構の復原図・練若台庵室指図	61

付 載 長岡京市基準点測量成果

第59図	基準点網図	66
第60図	設置基準点仕様図	68
第61図	基準点設置状況	68

付 表 目 次

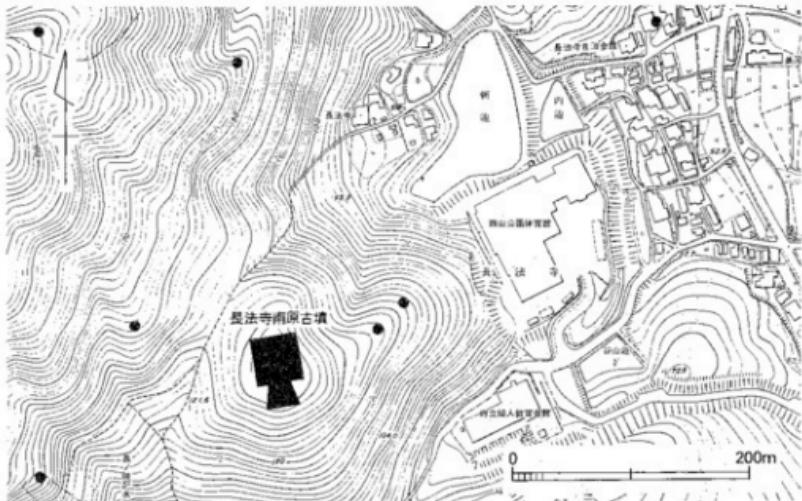
付表-1	本書報告調査一覧表	ii
付表-2	円盤の計測値	39
付表-3	瓦器小焼の形態・調整統計表	56
付表-4	瓦器大焼の形態・調整統計表	56
付表-5	平安～中世土器器形別出土量統計表	56
付表-6	その他の遺物出土量統計表	56
付表-7	基準点成果表	66

第1章 長法寺南原古墳第6次調査概要

1 調査経過

調査の目的 長法寺南原古墳は京都府長岡京市長法寺南原9番地に存在し、現況は当地名産の筍栽培用の竹藪となっている。この古墳は1934年、梅原末治氏を担当者として京都府によって発掘調査（第1次調査）が行われ、竪穴式石室の出土遺物からみてわが国最古の前方後円墳の一つとして注目されてきた。長岡京市教育委員会は当古墳の保存整備のための基礎資料を得るために1981年より4次にわたって調査を行い、墳形は前方後円墳ではなく前方後方墳であること、出土した円筒埴輪からみて時期は古墳時代前期後半にくだることなど従来の通説に変更を迫る重要な点が明らかになった。1984年の第5次調査では前方部頂に設定した発掘区の南端において土壌の一部が検出され、内部に角礫を持っていることが確認された。この遺構は墳丘中軸線上に位置し、使用されている礫石が後方部の竪穴式石室や排水溝のものと類似することから、前方部に設けられた埋葬施設である可能性が考えられた。⁽¹⁾

その後、竹藪の地方回復のために調査は中断していたが、今回土地所有者の了解を得て、この前方部頂の集石土壌の性格を解明することを目的として第6次の発掘調査を実施した。調査は国庫補助事業として国および京都府の補助を受けて行い、大阪大学文学部教授都出比呂志、



第2図 長法寺南原古墳の位置 (1/5000)

2 調査経過・検出遺構

同助手福永伸哉が担当した。調査期間は1989年7月14日から8月19日までの1ヶ月である。

調査参加者 発掘調査には大阪大学文学部考古学研究室、大阪大学考古学研究会、その他有志学生が参加した。調査団の合宿生活に関する作業協力者も含めて、その参加者名を以下に記す。

松木武彦、北條芳隆、禹在柄、杉井健、吉沢美香（大学院文学研究科）、大庭重信、白井美友紀、鈴木敬二、清家章、平田洋司、松井久宜（文学部4回生）、朝見弘志、川島聰子、鈴木節男、野村充和、福田政彦、渡辺明英（文学部3回生）、佐々木憲一（ハーバード大学大学院）、陳連旭（文学部研究生）、山田雄久、小路泰弘、米谷昭範、高橋順子、辻美紀、柳田陽子、横谷隆代、堅田竜生、木村淳、鈴木一有、藤井真樹、藤原葉子、柳沢栄一（大阪大学考古学研究会）、藤原隆（文学部2回生）、大庭健一（人間科学部）。

出土遺物の整理、報告書作成作業は、1989年11月から1990年2月にかけて行った。本報告の執筆は都出の監修を受けて、福永、松木、杉井が行った。写真の撮影は福永が担当した。

謝辞 調査にあたって土地所有者の戸内治作氏は調査の趣旨を理解され、所有地内の発掘調査を快諾されただけでなく、作業の円滑化に関してさまざまな援助を惜しまれなかった。また、周辺の遺跡についても有益な教示を与えられた。子守勝手神社総代会は調査団の宿舎のため快適な社務所を貸与された。また、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏には石室石材の岩石学的調査に関して援助をいただいた。このほかにも調査作業と調査団の合宿生活の円滑化に関して地元をはじめ多くの方々から多大な援助を得た。記して感謝の意を表したい。

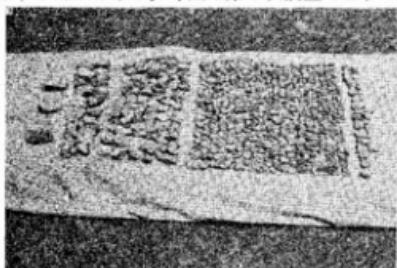
2 検出遺構

(1) 発掘区の設定

前方部に埋葬施設の存在が予測されることと、前回の第5次調査の報告で指摘しておいた。すなわち、前回の発掘区の南端において砾を充填した土壤の掘方の一部を検出し、これがほぼ墳丘中軸線上にあって盛土中に掘り込まれていることなどから、竪穴式石室あるいは粘土層などを収容する墓壙となる可能性が強いとの判断を下したのである。今回の第6次調査では、こ



第3図 調査風景



第4図 小竪穴式石室複数土中の砾石

の土壌の性格を解明することを主眼とし、加えてこれ以外の埋葬施設の有無の確認も含めて前方部の構造を明らかにするべく、第5図のように発掘区を設定した。前回の発掘区のすぐ南側にあたる東西10m、南北9mの範囲である。なお、前回および今回の調査によって、前方部墳頂の精査はほぼ完了したことになる。

掘り下げに当たっては、厚さ1.5mに達する苟栽培のための客土を重機で除去し、苟栽培開始以前の旧地表とみられる黒色腐植土上面を検出したあと、墳丘中軸線を基準にして2m方眼のグリッドを設けた。

(2) 小堅穴式石室

上面の状況（第6図） 発掘区

北端部の黒色腐植土直下において、礫の集積を検出した。角礫を主体とし、大きさは長径20cm前後のものから拳大以下の小形のものまである。これらの礫は、長軸2.3m、短軸1mの不整椭円形の土壌の中に入っている。前回の調査ではその北側の掘方の一部を検出していたことが明らかになった。掘方内側の土はしまりの悪い灰黄色砂質土で、淡黄色で堅くしまった周囲の墳丘盛土とは明確に識別できる。この土壌は後に小堅穴式石室の墓壙であることが判明した。さらにこの西端から約20cmの幅で、約1.4m以上にわたって掘方が帶状に延びて角礫が入っていた。これは後に排水溝であることがわかった。

埋土の状況 土層観察用の畦を残して掘り下げていくと、排水溝が取り付く側、すなわち西端に近い部分の埋土はほとんど礫を含まず、深さ15cm付近でほぼ水平な淡灰色細砂層の上面を検出した。この土の上面には直径5cm前後の、粒の揃った小礫が均等に含まれており、人為的に置かれた土であることがうかがわれた（第6図、第6層）。同時に排水溝の取り付く部分に位置する大形の石、およびこれを両側から「コ」字状にはさむように置かれた大形の石がそれぞれ二段に積まれていることが判明し、この段階で遺構が小形の堅穴式石室であることが確認されたとともに、かなりの削平を受けていることもわかった。

石室床面の置き土とみなされる小礫を含んだ淡灰色細砂層のひろがりを追うと、西側の小口



第5図 発掘区配置図

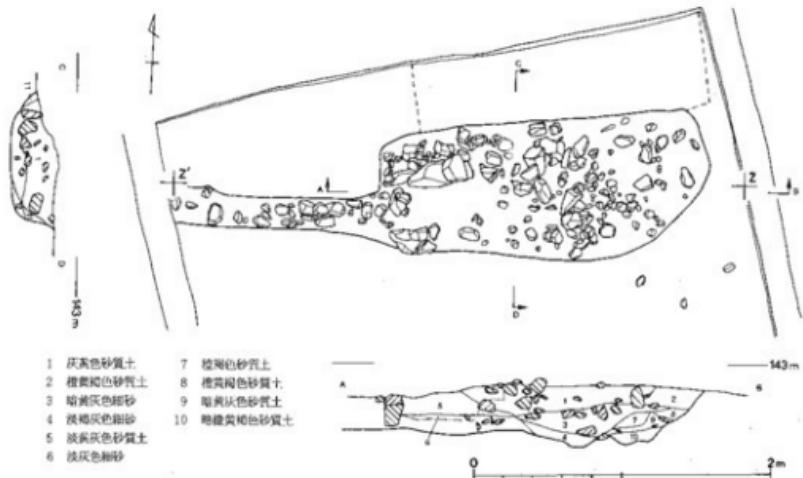
4 検出遺構

から約70cmのところでとぎれていた。これより東側では、埋土の上層から下層にかけて、石室の壁体や裏込めを形成していたとみられる角礫多数が浮いた状態で含まれており（第4図）、墓壙の底も深く抉られている（第6図、第1～4、7～10層）。この点から、石室の東半分は墓壙底にまで及ぶ攪乱を受け、原形をとどめていることが明らかになった。ただ、墓壙の東端近くの、ちょうど西側小口と相対する位置に深さ5cm程度の掘り込みがあり、東側小口石を設置するために墓壙底を凹めた痕跡がかろうじて残っているとも推定される。

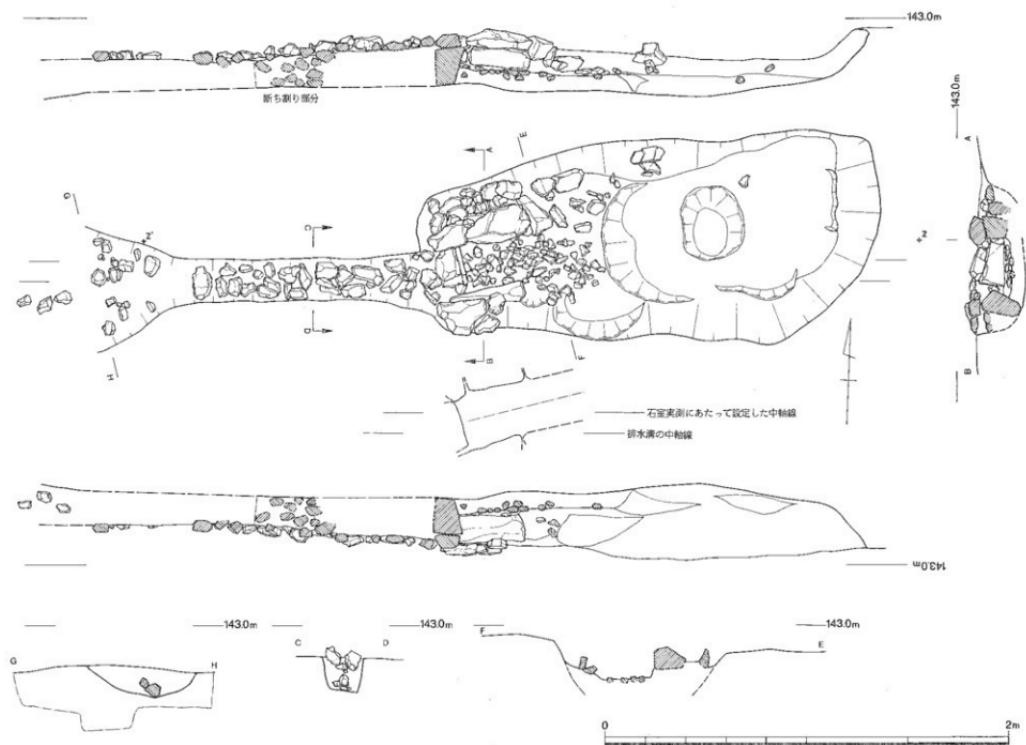
慎重に掘り下げたにもかかわらず、遺物や遺骸の残片などは一点も検出されなかった。ただ埋土の中に少量の赤色顔料の粒子が含まれている事実から、埋葬にあたって赤色顔料を使用したと考えられる。しかしその量がごくわずかなものであったことは疑いない。現存する西側小口付近の壁体や床面には赤色顔料の痕跡がまったくみられず、すでに破壊された中央より東の部分に赤色顔料は存在していたと思われる。この点および排水溝が取り付く方向からみて、埋葬頭位は東と推測されよう。

構造と規模（第7図） 石室の壁体石は、西側小口を中心とする一部において二段分だけ現存しているに過ぎない。すなわち基底石は西側小口に一つと、これを両側から「コ」字状にはさむ形で北の側壁に二つ、南の側壁に一つの計四つが残っており、それぞれの基底石の上に二段目の壁体石が積まれている。

石室の断ち割り作業により、その構造の一部が明らかになった。まず墳丘盛土中に掘りくぼめた墓壙の底面に、石室壁体の基底石が置き並べられる。基底石には直方体状またはこれに近い大形のものを立てて用いるが、その立て方は長辺側を上下に、短辺側を左右に置くのを原則



第6図 小竪穴式石室上面平面図・埋土断面図



第7図 小笠穴式石室平面図・立面図・断ち割り断面図

とする。基底石の設置後、淡灰色の精良な細砂を厚さ10cm前後に敷き、さらにその上面には直径5cm前後の粒の揃った小角礫を均等に混じながら床面を形づくる。二段目以上の壁体の積み上げはおそらく床面の形成以後に行われたと推定されよう。基底石が立てるよう置かれるのに対して、二段目の石は平積みにされている。三段目以上は現存しないが、同じように平積みであった可能性が高い。壁体石の背後と墓壇壁の間には、やや小形の角礫を詰めて控え積みとしている。

排水溝は、石室の西側小口石の背後から幅20cm、長さ1.7mにわたって西方へ延びる。底の平たい溝の中に長径10cmほどの角礫を充填させた構造である。削平のため、現状では深さにして15~20cmを残すに過ぎない。石室への取り付き部から西へ約1.2mの付近で急激に幅を増すと同時に角礫の充填が疎となり、礫の径も小さくなる。墳丘復原図および検出した盛土面の等高線の検討によれば、ちょうどこの付近が前方部第二段の斜面に当たることから、末広がり状にした末端部を墳丘斜面に開いて水の流出を図ったものと推測されよう。

さて、石室の正確な規模は、削平と攪乱のために明らかにすることが難しい。墓壇東端近くの掘り込みを東側小口石の痕跡とする先の推定が正しいとすれば、石室内法の長さは1.7m前后との想定が成り立つ。石室内法の幅は、現存する西側小口部分の床面で30cmを測る。高さについては、蓋石や壁体石の多くがすでに持ち去られているので確定なことは不明であるが、おそらく基底石も含めて四~五段の石積みをもっていたと推定される。また、石室を収める墓壇は、現状では長さ2.3m、最大幅1mであるが、東半部の輪郭は攪乱時に掘り広げられたものである可能性が強く、攪乱の及んでいない西側小口部分での幅は70cmを測る。ただし、削平前には現状よりも大きかったであろうことは疑いない。

年代 この石室の年代を示す遺物はまったく発見されなかった。しかし、この石室の主軸方向が後方部石室のそれに対して91°とほぼ直交の関係にあり、加えてこの石室の使用石材が緑色岩やチャートなど、後方部石室の排水溝と同じものであることは、間接的ながらその構築年代を推測する材料となろう。すなわち、今回発見された小堅穴式石室は、後方部石室との密接な関連のもとに営まれたもので、被葬者同士の生前ににおける結びつきもまた強いものであったと想定される。したがって、両石室の年代差も大きいものとは考えられず、後方部石室がつくられたとされる4世紀後半からさほど下らない時期に、小堅穴式石室の推定年代を置くことができよう。

(3) 前方部の構造

墳丘（第8図） 筍栽培開始以前の旧地表を示す黒色腐植土が発掘区全体を覆っており、少なくとも筍栽培に伴う変化は免れていることがわかった。発掘区南半部では黒色土直下で盛土面を検出したが、北半部では墳丘中軸線に沿った発掘区中央部分を除いて、その東西両斜面に墳丘出土の堆積が認められた。出土の堆積は斜面の下方に向かうほど厚く、最も厚い部分

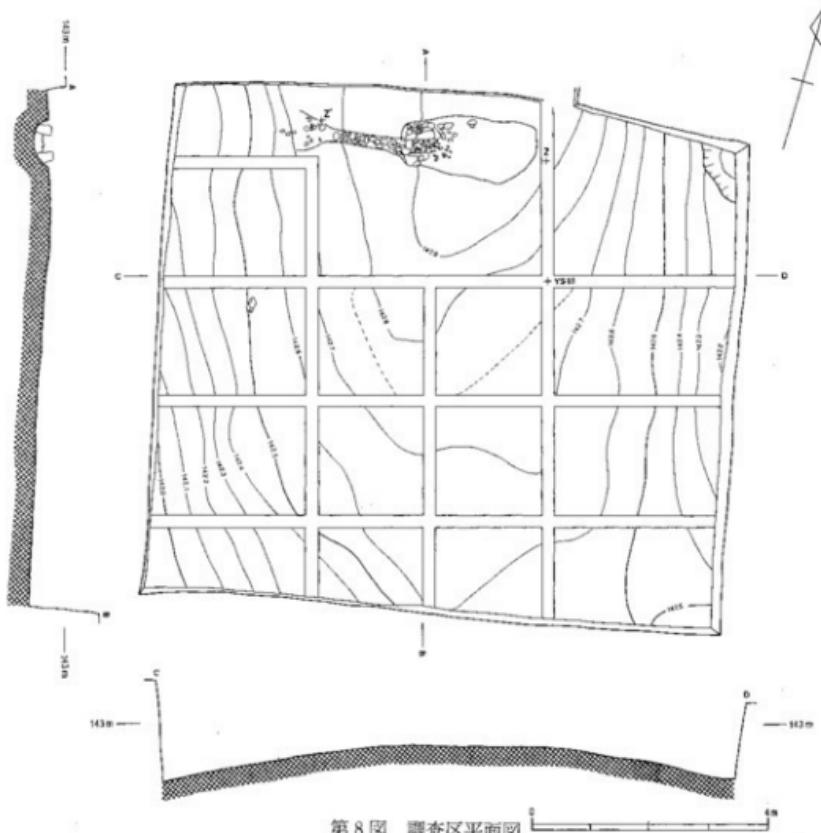
8 検出遺構

では50cmに及んでいる。上下二層に分かれ、下層には多量の埴輪片を含むが、原位置で検出されたものはない。

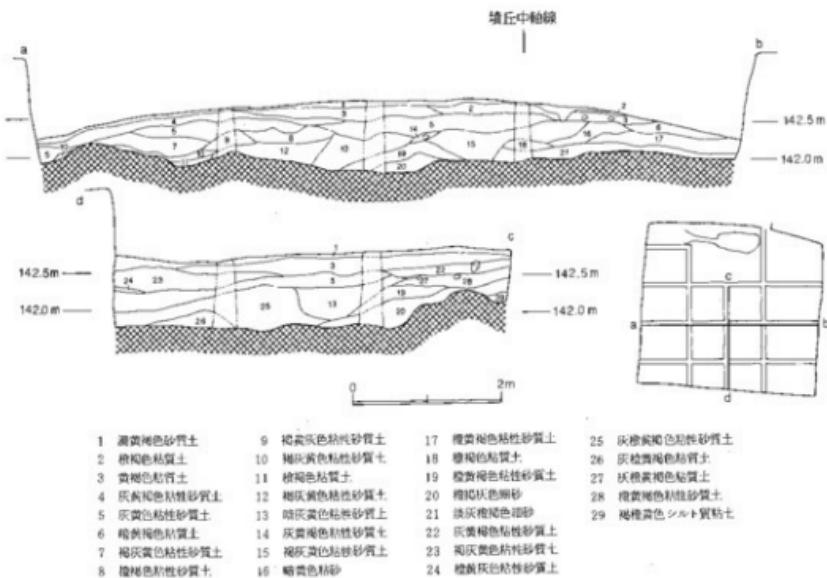
盛土面は発掘区の東西両壁に向かって斜面をなすと同時に、南方へも緩やかに下る。東西両面の等高線は墳丘中軸線にほぼ平行しており、前方部第二段目の斜面を反映しているものと考えられる。このうち西侧斜面の等高線が発掘区南端付近でやや中軸に向かって入り込む傾向をみせるのはこの付近がすでに前方部墳頂の前端に近いことを示唆するものであろう。

盛土状況 東西方向、南北方向に各々1本ずつの断ち割りトレンチを設定して地山面まで掘り下げ、地山の起伏と盛土の断面を観察した（第9図）。

地山面は、南北方向の断ち割りトレンチでは発掘区の北端から約5m付近で急激に50cmほど落ち込み、あとは発掘区南端まではほぼ水平に続く。水平部分の標高は141.8mである。第5



第8図 調査区平面図



第9図 盛土断ち割り断面図

次調査区南端部、すなわち今回の発掘区の北端付近では地山の標高は142.8m前後であり、発掘区の南約1mにある崖面（1982年の第3次調査における「Dセクション」）では142.1mを測る。これらの数値から地山面の南北方向の傾斜を検討すると、発掘区北端から南へ約5mほどの間で地山面は1m近く落ち込み、あとはほぼ水平を保つことが知られる。次に東西方向のトレチでは、最大30cm前後の起伏はみられるが地山面は142m前後でほぼ水平である。発掘区南方の第3次調査におけるDセクションでもほぼ同じ高さを水平に走るが、深さ50cmにも及ぶ落ち込みが随所にみられ、起伏の度合いはより激しい。

注目すべきは、地山面と盛土との間に埴丘築成前の地表を示す黒色土層が認められない点である。東西方向の地山の傾斜が、急峻な丘陵頂部にしては不自然なほど水平である点を考え合わせると、盛土の築成に先立って地表面の整地が行われた可能性が高いと判断されよう。その場合、地山面の各所にみられる落ち込みは、整地後の豪雨などに伴う水流の跡かとも推測される。

さて、現状では盛土の厚さは、最も厚い部分で1m前後である。断ち割り断面の観察によると、ほぼ標高142.5m付近を境界として下半部では土壌状または土手状に盛られたと考えられる層（第9図、第9層、第13層、第16層、第19・20層、第25・26層）が数箇所認められるのに対して、これより上はほぼ水平に盛られた層からなるという状況を見てとることができる。ま

10 検出遺構・出土遺物

た、盛土中のところどころに拳大程度の礫が混じるのが認められた。人為的に混入されたものと思われるが、その意図はよくわからない。

なお、前述した石室のすぐ南側の盛土面のレベルが周囲より高く、土質も周囲に比べて緻密で堅くしまっていることから、下部に別の埋葬施設がある可能性を想定して一部断ち割りを試みたが、遺構は発見されなかった。その他の部分にも埋葬施設はなく、前述の石室が前方部で唯一の埋葬施設である可能性がきわめて高いと判断される。

3 出 土 遺 物 (第10~12図、図版5~6)

遺物の概要 調査で出土した遺物は円筒埴輪のみである。出土埴輪片は約500点余りであり、接合後も全容を明らかにし得るものはなかった。

今回の記述は、これまで示されなかつた新知見を中心に行うこととする。なお、図示した埴輪の実測図番号は第5次調査概要報告の番号に統くものである。⁽²⁾

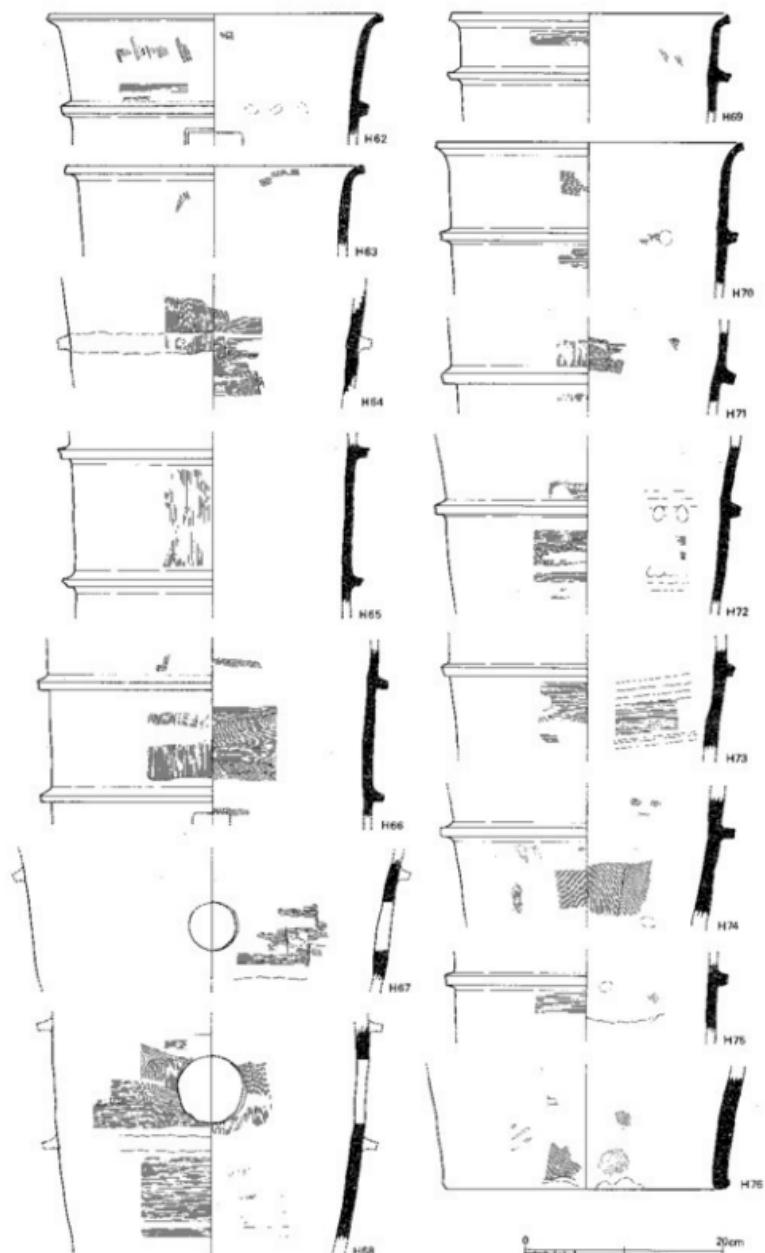
形態的特徴 脊部の径は27~30cmが多い。しかしそれを超えるものや小さいものもみられ、個体差を指摘することができる。口径にも同様の傾向が窺えるが、これらはすべて小破片からの復元径であり、若干の誤差を含んでいる可能性を考慮せねばならない。

口縁部は、ほぼ直立する脣部から外方へ鋭く屈曲する。口縁端部は強くヨコナデし、下方または上下方に肥厚するものがみられる(H63・H69・H70)。H79は他の口縁部と異なり、屈曲部が短く、屈曲度も小さい。またヨコナデも他のものに比べて強く行わず、指頭圧痕が残る。口縁端部とその直下のタガの間隔は、約6cm(H69)と約9cm(H62・H70)の2通りがある。前者のタガは、強いヨコナデにより中位が薄く端部が厚くなった、細身でやや下向きのものであるのに対し、後者のタガは、端面がヨコナデにより内弯する、厚手のものであるという違いが存在する。

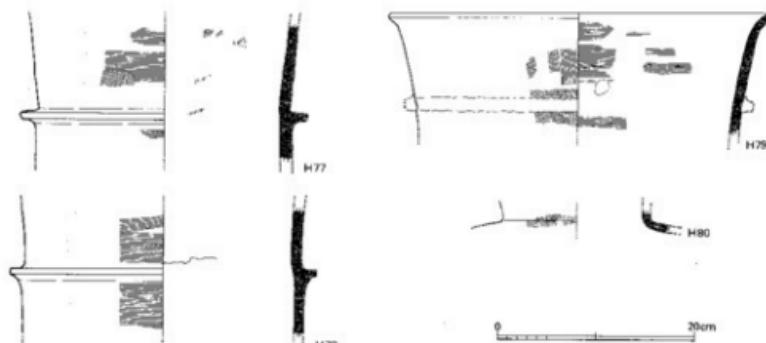
今回の資料のなかで明確に判別できる透孔の形態は、円形(H67・H68)のみである。三角形か長方形か判別し難いもの(H62・H66)が数例ある。

タガに関しては先述した二者が主流をなす。ところが明らかにそれとは形態の異なるもの(H77・H78)が存在する。タガを境にして上下の脣部が直線的につながらず、それが生じるのである。両者の割れ口を観察すると、タガ以下の脣部とタガが一連のものであることを見て取ることができる。つまり、円筒部成形の際、いったんこのタガ部まで完成させ、上端を少し外方へ折り上げておき、その後、さらに上部へ脣部を作り付けて行くという工程が窺えるのである。タガは、外方への屈曲部を利用するかたちで、その上に重ねて貼り付けられる。この工程の結果として、タガ上下における脣部のずれが生じてくると考えられる。

朝顔形円筒埴輪 一片のみ、朝顔形円筒埴輪の頸部と思われるものがある(H80)。直立する頸部が脣部から立ち上がるるものである。脣部と頸部の境はタテハケを施すのみで、突帯は



第10図 円筒埴輪実測図(1)



第11図 円筒埴輪実測図(2)

付かない。

ヒレ 今回確認したヒレは10数点に過ぎない。明確に幅を判定できるものは3点しかないが、それらは8~10cmに収まり、かつて報告された「狭いタイプ」と「大きいもの」の中間的な大きさである。⁽³⁾

ヒレの取り付け位置に関しては、ヒレ上端が口縁端部に達するもののみである(H82・H83)。H63のヒレ剥離痕も口縁端部にまで達している。

ヒレの貼り付け際し、円筒埴輪胴部にヘラで2~3条の沈線を刻むものが認められる(H81)。これは、貼り付け位置を示し、接着を良くするための処置であろう。



第12図 円筒埴輪実測図(3)

ヒレの貼り付けは、円筒埴輪がすべて完成した後のことである。H81のヒレ剥離部分には2次調整のヨコハケ目が確認され、H84・H85ではタガの痕跡が明瞭である。ここで注目されるのは、H84ではヒレに凹みとして残されるはずのタガの跡がほとんどみられないに対し、H85ではタガの跡が顕著であることである。かつての調査で出土したヒレも含めて観察すると、タガ部へのヒレの貼り付けには、①ヒレ貼り付け位置のタガをヘラで切り取る、②タガを押し潰すようにしてヒレを貼り付ける、③タガの形状をそのまま残してヒレを貼り付けるという少なくとも3パターンが見受けられる。このうち

②と③は、ヒレ貼り付け時におけるタガの乾燥度合いが大きく関係していると思われる。H84は①、H85は③の場合であるとすることができる。また、H81の沈線がタガ接合部に及んでいないことは注意を要する。これは②か③の場合である可能性が高い。

以上のことは、ヒレの貼り付け時期、工程を知るだけでなく、製作者の相違を想定しうるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

4 総 括

今回の第6次調査は前方部における埋葬施設の有無を確認することがおおきな目的であった。すでに1984年の第5次調査において前方部頂に角礫を含む土壌の存在することが明らかになっていたが、調査の結果これは前方部中央部に構築された小竪穴式石室であることが判明した。第2節で述べたように、後方部石室と近い時期に築かれた前方部埋葬と考えて相違なかろう。

残存状況はよくなかったが、この小石室が検出されたことの持つ意味は重要である。畿内の前期古墳においては石材を使った小規模な埋葬施設が築かれることはきわめて稀である。管見に触れたところでは神戸市処女塚古墳前方部斜面の箱式石棺⁽¹⁾、茨木市將軍山古墳据部の箱式石棺⁽²⁾、柏原市松岳山古墳クビレ部テラスの小竪穴式石室と箱式石棺などがあげられる程度である。墳丘全体を調査した例がなお少ない状況を考慮しても、その稀少さは特徴的であるといえよう。これは、古墳近辺で適切な石材の入手が困難であったという事情によるものではなく、長大な竪穴式石室は別として、石材を使った小規模な埋葬施設をつくる習慣がなかったためと考えられる。では、そうした地域にあえて存在している小竪穴式石室などはいかなる意味を持つものであろうか。これを考える際に注目されるのは、上に例示した諸古墳が、畿内以外の地域とのつながりをうかがわせる要素を持っている点である。処女塚古墳から出土した山陰系の土器、將軍山古墳の竪穴式石室に使用された結晶片岩、一部に鷺の山石を使用した松岳山古墳の石棺などがそれにあたる。こうした要素はそれぞれ山陰地方、紀伊・阿波地方、讃岐地方などの関連を推測させるが、これらの地域に小竪穴式石室や箱式石棺が認められることは示唆的である。畿内で稀な小竪穴式石室や箱式石棺に葬られたのは、他地域の出身者あるいはその子供ではないかと推定できる。この場合、被葬者の出身地域、出身集団がこうした埋葬施設を用いる習慣を持っていたと考えれば、このような状況を理解しやすいであろう。⁽³⁾すなわち長法寺南原古墳の前方部に埋葬された者はその埋葬施設構造からみて、畿内以外の出身者であった可能性が高いのである。

このように考えると、この小石室の主軸方位が東西方向であることが興味深い事実として指摘できよう。都出比呂志氏によってすでに明らかにされているように、畿内の前期古墳における埋葬頭位には北優位の原則が存在する。当古墳も後方部石室はこの原則にかなっているが、今回調査した前方部小石室は墳丘主軸に直交させて東西を向けている。前方部頂部の広さから

14 総 括

いうと、むしろ主軸に平行させた方が埋葬施設を造りやすかったとも考えられることから、わざわざ直交させたのは東頭位を確保するためであった可能性がある。地域によっては、埋葬頭位として北以外を指向する例もみられ、今後この点についての地域性の研究が深められてゆけば小石室の被葬者像に迫ることもできよう。

畿内には例外的な東西主軸の小竪穴式石室の存在は、当古墳の後方部石室被葬者の性格、首長層の地域間交流のありかたを明らかにする上で重要な意味をもっていると考えられる。今後正報告刊行へ向けての作業の中で、改めて検討することとしたい。

注

(1) 都出比呂志、橋本清一「長法寺南原古墳第3次調査概要」（中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第11冊 長岡京市教育委員会、1983年）。

都出比呂志、福永伸哉「長法寺南原古墳第4次調査概要」（中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第13冊 長岡京市教育委員会、1984年）。

都出比呂志「長法寺南原古墳第5次調査概要」（中尾秀正編『長岡京市文化財調査報告書』第15冊 長岡京市教育委員会、1985年）。

(2) 注1都出1985文献。

(3) 同上

(4) 「史跡処女塚古墳」神戸市教育委員会、1985年。

(5) 堅田直「將軍山古墳調査概報」（『大阪市立博物館報』No.4 大阪市立博物館、1965年）。

(6) 桑野一宰「松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報」1986年度 柏原市教育委員会、1987年。

(7) 福永伸哉「共同墓地」（都出比呂志編『古代史復元』6巻 古墳時代の王と民衆 講談社、1989年）。

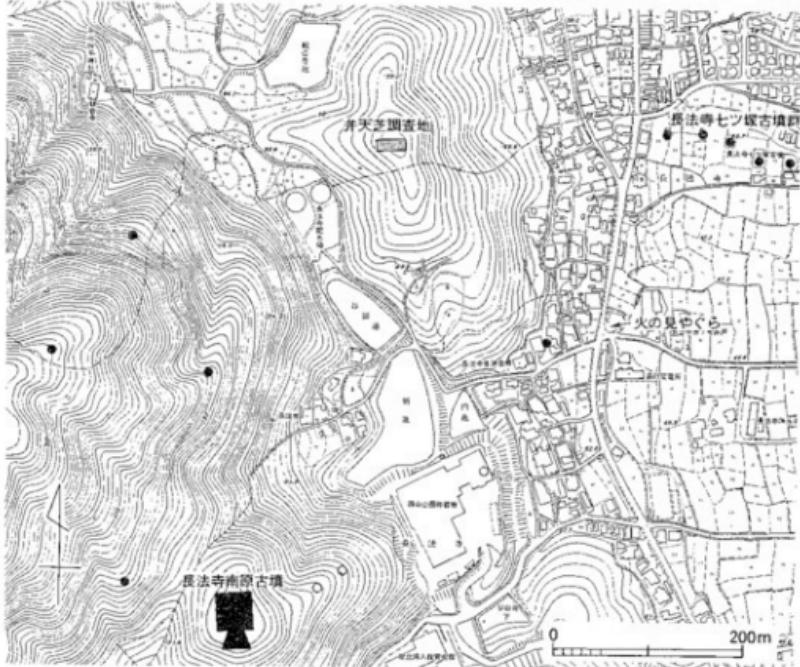
(8) 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」（『考古学研究』26巻3号、1979年）。

第2章 弁天芝丘陵の試掘調査概要

1 調査経過

調査の目的 弁天芝の小丘陵は長岡京市粟生に所在する。この小丘陵は西山山塊の東側の山裾に接し、西山との間に南北に刻む浅い谷を挟むため視覚的には独立の低丘陵となっている。東側に広がる平地に向かって特に眺望が開けており、古墳の立地には格好の条件を備える。ところが、丘陵の東側にのびる尾根筋の先端には七ツ塚古墳群が存在するものの、それ以外に古墳の存在は確認されていない。西山に点在する南原古墳群と七ツ塚古墳群との中間にあって、丘陵の中心部分における古墳の分布は現在のところ空白状態である。

この丘陵の最高部は南北に伸びる尾根上に位置し、南北幅20m、東西幅35m、高さ6mほどの小丘を形成しており、まったくの自然丘陵とみなすにはやや不自然な形状を呈する。1988年冬、地権者の高橋淳夫氏が筍栽培の土入れにあたって小丘の中央部付近を削土した際に、露出



第13図 調査位置図

16 調査経過

した崖面から高さ1m、幅2.5mほどの落ち込みが現れた。この報に接し、現地を観察する機会をもったが、落ち込みの内部には多くの角礫が詰まっており、遺構の可能性があると判断された。丘陵周辺の基盤は砂層、粘土層であり、角礫が自然の作用で混入する条件ではない。他にも同じような状態の、礫が詰まった溝状の落ち込みは付近の各所で認められる。諸状況は、この場所に比較的規模の大きな古墳などの遺構が存在する可能性を示唆するものであり、新たな古墳の確認につながるのではないかと期待された。この点を解明すべく試掘調査を実施することになった。調査地は長岡京市粟生弁天芝27番地外で、調査期間は1989年7月14日から8月19日までの1ヶ月間である。

調査参加者と役割分担　調査は大阪大学文学部教授都出比呂志と同助手福永伸哉を担当者とした。また技術補佐員として大阪大学文学部の大学院生が、また調査補助員・整理員として大阪大学文学部の学生、および大阪大学考古学研究会の学生があつた。調査団の合宿生活に関する作業協力者も含めて、参加者名は以下のとおりである。

松木武彦、北條芳隆、禹在柄、杉井健、吉沢美香（以上大学院文学研究科）、大庭重信、清家章、鈴木敬二、平田洋司、松井久宣（以上文学部4回生）、朝見弘志、川島睦子、白井美友紀、鈴木節男、野村充和、福田政彦、渡辺明美（以上文学部3回生）、佐々木憲一（ハーバード大学大学院）、山田雄久、小路泰弘、米谷昭範、堅田竜生、高橋順子、辻美紀、柳田陽子、横谷隆代、木村淳、鈴木一有、藤井真樹、藤原葉子、柳沢栄一（大阪大学考古学研究会）、藤原隆（文学部2回生）、大庭健一（人間科学部2回生）。

本章の執筆は北條と杉井が担当した。

謝辞　調査に際しては、土地の所有者である高橋久・淳夫氏から発掘調査の快諾をいただいた。また、隣接地の所有者である上野勝彦氏、春田康晴氏、藤下輝夫氏、白井勇氏からは調査や地形測量にあたっての立入りの承諾をいただいた。高橋氏には調査中もさまざまな御援助を賜っている。子守勝手神社総代会には宿泊のための社務所を快く貸与していただいた。また橋本清一氏には調査において出土した石材の鑑別を依頼した。これらの方々の御厚意と御援助に深く感謝する。

調査経過　調査は、まず小丘陵全体の形状を把握すべく地形測量を実施した。なお、これに先立って小丘陵の最高所を中心に電気探査を行っている（電探は奈良国立文化財研究所、西村康氏に依頼し、調査は7月15日に実施した）。測量調査と並行して、丘陵各所に露出している崖面の断面観察を行い、写真撮影のち実測作業を開始した。一方、小丘陵の中心部は重機によって竹の根を掘りおこした後、東西方向の尾根筋に平行するトレンチを設定した。さらに最高地点ではこれに直交するトレンチを加えた。7月31日には東西トレンチ内で集石が検出されたため一部を拡張し、写真撮影と実測作業を行った。丘陵南側の崖面に露出した落ち込みについては最終的に断ち割りを行い、構造を追及した。地形測量は8月6日に、また記録作業は

9日をもって終わり、埋め戻しを行って調査を完了した。なお記録作業に前後して、丘陵下の火の見やぐら下に集積されている石棺石材や石室石材の実測作業を行った。

2 調査の結果

地形測量　調査地周辺の地形について測量調査を実施した。東西方向に墳丘主軸をもつ前方後円墳を想定し、それが地形に反映されてくるかをみることを目的とした。その結果えられた所見を以下に記述する。

まず、調査位置図（第13図）と地形測量図（第16図）を参考にして、周囲の地形を併せてみてみると、弁天芝丘陵はひとつの独立した丘陵であることがわかる。南原古墳の位置する西山山塊とは一筋の谷地形によって切り離されるのである。調査地はこの丘陵の最高所に位置し、最高地点の標高は102.26mである。丘陵は南北方向の尾根がその中軸をなし、中央付近の最高所からは西に向かって尾根が分岐する。一方、東側はかなり急な斜面となり、明確な尾根筋は見受けられない。

次に第16図から調査地周辺の地形を概観してみよう。

トレーナーを設定した最高所付近は東西に長い楕円丘状を呈する高まりである。ここと、そこから南へ下る斜面部分は、少なくとも苟栽培に伴う土取りによる改変を受けておらず、それ以前の旧地形を良好に保存している。楕円丘状の高まりの東側は頂上付近にまで後世の掘削が及んでおり、その崖面には地山とそれを掘り込んだ形の角礫が観察された（第24図のS1-S2セクション部）。ここより東側は竹が密生する急斜面となっている。反対の西側に目を移すと、そこも大きな改変を受けていることがわかる。等高線が楕円丘部分から西へ屈曲するあたりに、土取りの跡が残っている。これによってできた西面する崖面にも地山直上に角礫の集積が見られたが、その位置のちょうど真上に現在の地境の溝が存在するため、角礫はその溝の掘削時に投入されたものであると考えられる。この土取り部の西側にある小さな残丘は土取りで削り残された部分であり、旧地形を遺存していると思われる。トレーナーを設けた楕円丘の北側は、南

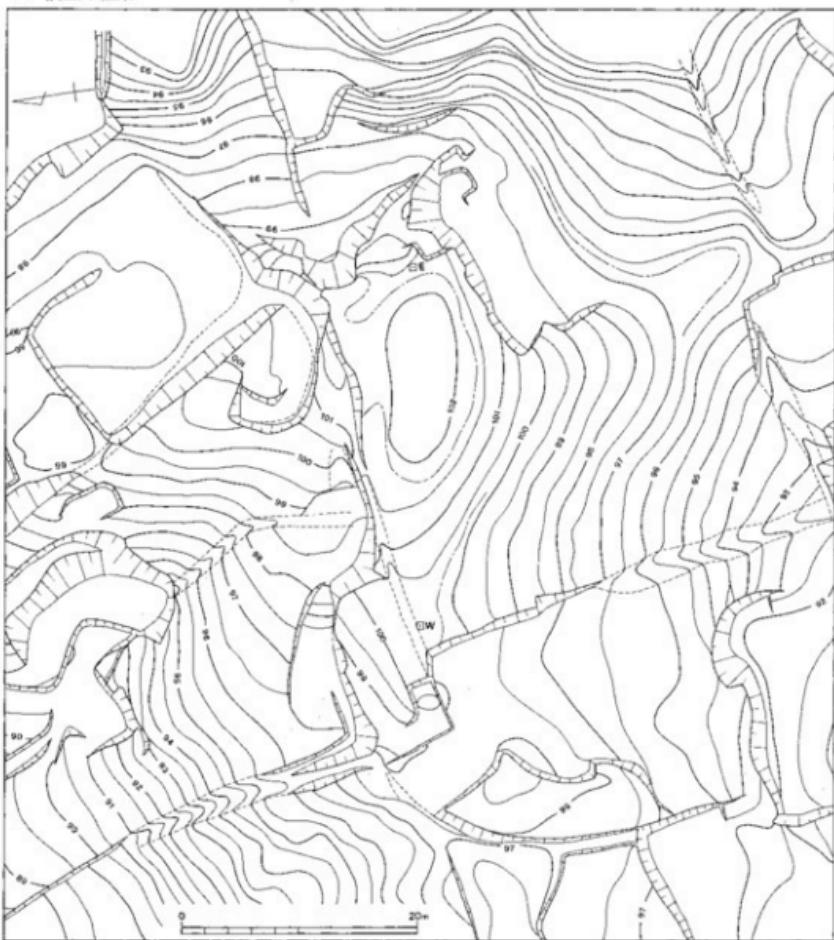


第14図 小丘陵最高部の現状



第15図 調査風景

18 調査の結果



第16図 地形測量図

北方向の等高線が明瞭で、北への尾根であることがわかる。しかしここにも土取りが及び、以前のまま保たれていると思われるは、100.50mの等高線がまわる高まりから北西へ下る斜面のみで、それより南側への等高線は後世の改変によるものであろう。北尾根から西尾根へ続く様子は、96.00m以下の等高線がよく示している。そのすぐ東側は水平面が造り出され、階段状に東へと続いている。ここも先述した通りの急斜面であったため、水平面の造成はそれを緩和し、苟栽培をより安全にかつ能率良くするための工夫なのであろう。

では、一体ここにどのような古墳を想定することができるであろうか。

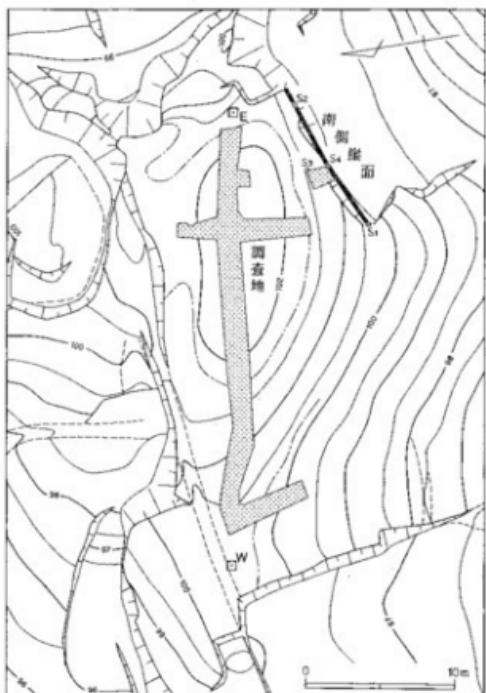
注目したいのは、残りのよい南斜面と西側の小残丘における 99.00 m 以上の等高線である。ここを見ると、小残丘上に前方部端をもち、後円部を橢円丘側に置く前方後円状の等高線の高まりに気付くであろう。これを古墳とするならば、主軸は当初予想したもの（E-W ライン）より幾分北へずれたものとなる。そして古墳の東側・北側は後世にほとんど破壊されて原形をとどめず、辛うじて南側とクビレ部から前方部にかけてが残ったとみなすことができる。また後述される角礫群は、古墳の葺石、あるいは石室に使用されたものとすることが可能となる。

残念ながら地形測量から言えることはこの程度であり、古墳であるという確証を得ることができなかった。

しかし、良好な眺望をもつ丘陵の最高所である当地は、古墳の立地としては申し分なく、これに等高線の様子なども加味すると、かつて古墳が存在したと考えることは不可能ではないであろう。

調査区の設定 小丘陵には地形の状況から判断して、最高所を後円部とし西側の残丘を前方部とする東西主軸の前方後円墳が存在すると想定した。そのため丘陵の東側から西側へかけて、予想される主軸線上に長さ 27m、幅 1.5m のトレンチを設定した。また、その西端の部分から南側一帯の斜面は、前方後円墳を想定する場合、クビレ部にあたる可能性が考えられたため、この位置でトレンチを南側へ屈折させている。その長さは 5.7m、幅は 1.5m である。最高所には別に墓壙等の有無を確認するため先のトレンチと直交する長さ 9m、幅 1m のトレンチを設けた（第17図）。

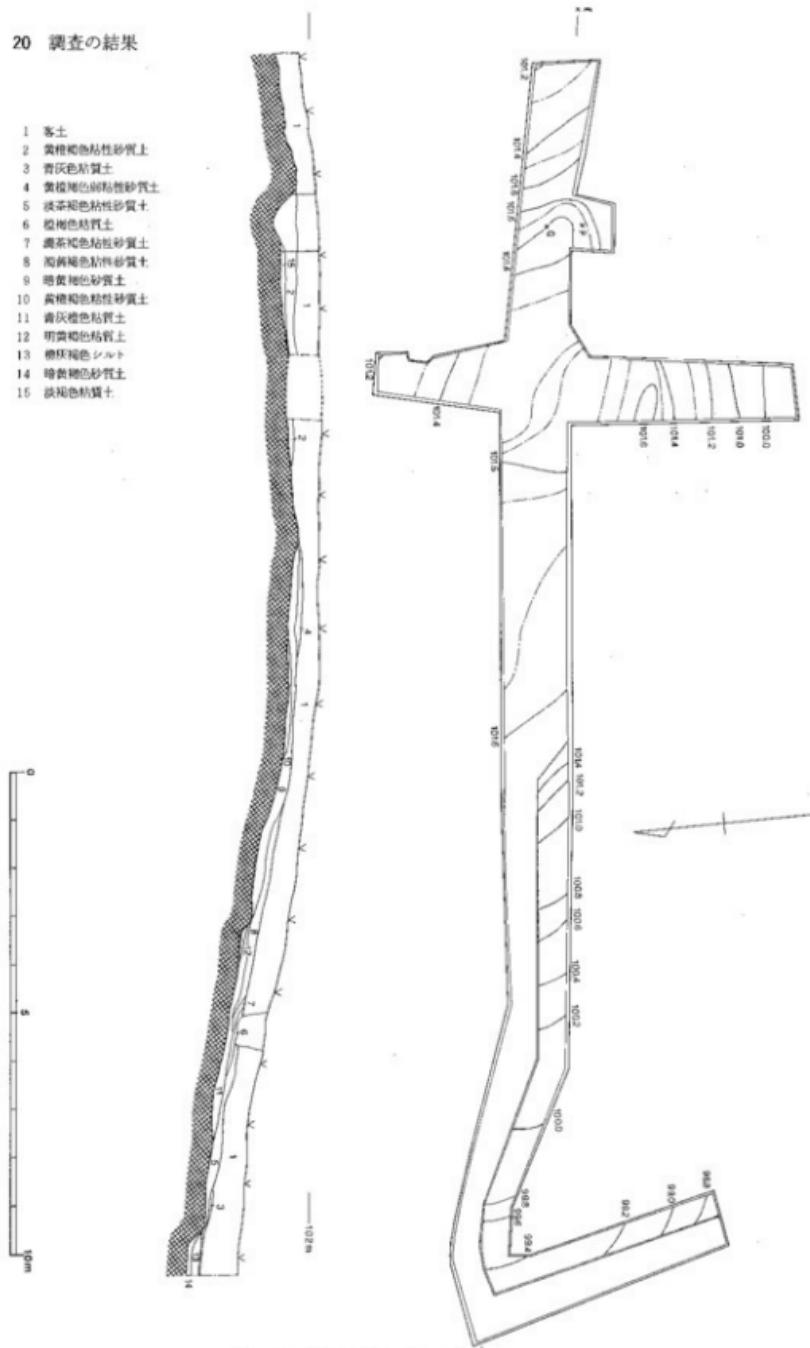
丘陵上の堆積層 堆積層は苟栽培に伴う客土と、竹林造成以前の堆積層からなる。客土は調査区全体にはほぼ均等な厚さで堆積しており、平均的な厚さ 55cm をはかる。調査区東側のほとんどの部分は客土の直下が地山であり、竹林の造成時に大規模な削平が行われていることをうかがわせる。客土中から拳大の角礫が散見された。



第17図 調査区設定図

20 調査の結果

1. 客土
2. 黄褐色粘性砂質土
3. 青灰色粘質土
4. 黄褐色粘性砂質土
5. 淡茶褐色粘性砂質土
6. 暗褐色粘質土
7. 深茶褐色粘性砂質土
8. 深褐色粘性砂質土
9. 黄褐色粘性砂質土
10. 青灰色粘質土
11. 明黄褐色粘質土
12. 橙褐色シルト
13. 暗褐色砂質土
14. 深褐色粘質土



第18図 調査区平面図・断面図

一方、緩慢な傾斜面をなし徐々に下降している調査区西側の部分では、わずかながらも客土下に堆積層が認められた。その厚さはもつとも厚いところで35cmをはかる。堆積土中には拳大の角礫がまばらに含まれていたが、遺物は検出されなかった。この堆積層の直下は地山であって、各所に小さな凹凸が認められるが、人為的な加工が及んだ形跡はない。

掘下げを終了した時点で調査区内の地山の地形を測量した。そこから判断するかぎり、西半部分の斜面に関しては傾斜が現状より多少きつかったようであるが、現地形と大幅に異なる状況は認められなかった。

遺構の有無 調査区内では当初予想されたような、墓壙等の遺構は検出されなかった。次に報告する集石1基と付近から石の並びを見出したのみである。

調査区東端から西へ3.4mの地点で、客土直下に小児頭大から拳大までの角礫による集石を検出したため、部分的に調査区を拡大し構造の確認を行った(第23図)。礫は浅い掘り込み中に詰められており、その平面形態は不整形な馬蹄形を呈する。規模は南北幅、東西幅ともにもっとも広いところで70cmをはかる。礫は掘り込みの上方ほど大きなものが用いられ、下方にはやや小さめの礫が配されているが、礫間には隙間がみられる。掘り込みは北側がもっとも深く15cmをはかり、そこから南側へ徐々に浅くなっている。また、この集石の東側約2.5mのところで集石と同じく客土の直下から、南北にはしる礫の並びが見出された。小児頭大の礫数個からなるが、並びは散漫で敵密に列をなすような状態ではなく



第19図 調査区西側



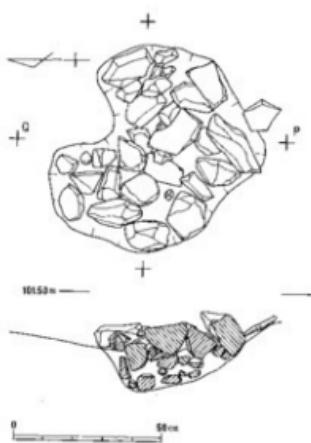
第20図 調査区中央部



第21図 調査区西側の堆積状況



第22図 集石の状況

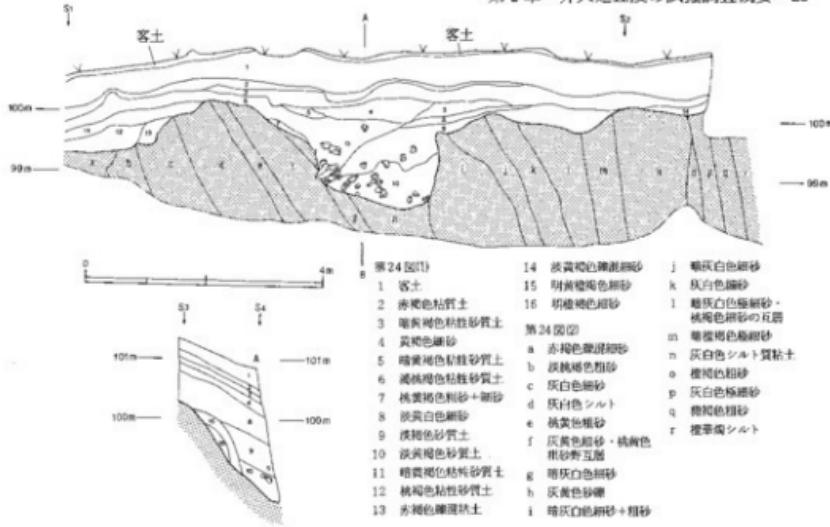


第23図 集石実測図

なかった。

これらの構造物は性格や年代が不明であるが、竹林の造成以前の過去のある時点に、この場所に構築されていた建造物の一部をなしたか、あるいは竹林の造成時に不用な礫を集積したものであるかのいずれかであろうと判断され、調査目的とする時代とは直接関係しないとみなされる。

崖面の調査 落込みが露出した丘陵南側の崖面では、全体の清掃ののちに断面の実測作業と断ち割り調査を行った(第24図)。落込みは地山の直上に形成されたもので、埋土の下方には角礫が多量に含まれる。発見当初は、これが古墳の石室や排水溝の一部ではないかとの予想を立てたが、調査の結果、そのような遺構ではないことが判明した。落込みは露出した部分で幅2.2m、深さ1.3mをはかるが、奥行きはほとんどなく急激に立上がる。断ち割り部分で確認された地山の傾斜や周囲の地形から判断すると、この落込みは丘陵の傾斜面に沿って南北方向にはしり、南側へ相当の角度で流れ出す谷状ないし溝状の窪みであった可能性が高く、その上端が遺存していたと推定される。当初露出していた崖面は、全体に北から南へと下降する傾斜面をほぼ直角に削り出したため、窪みの両脇の地山は見かけ上水平となり、露呈した窪みは奥行きをもつ遺構のように見えたのである。窪み内の埋土は上方および両脇から流入した状態を示しており、礫はその比較的初期の段階に混入したものと思われる。こうした埋土の状態は人為的なものであった可能性が高いことを示している。埋土によって窪みが完全に覆われたのちに客土の土入れが開始されているが、埋土の上半部では客土との区別が困難な部分もあり、連続的な堆積状態である。したがって、窪みを埋める行為は竹林開墾に伴って実施された可能性



第24図 丘陵南側崖面断面図・断ち割り断面図

が高い。埋土中の礫は開墾の際に不用なものとして投入されたのであろうか。埋土や客土中から遺物は検出されなかった。

なお、この崖面では地山たる基盤層の状態を詳細に観察することができた。基盤層は大阪層群に含まれる一連の水成層であり、調査地点ではすべてシルト質粘土層と極細砂層、およびこれら層中に帶状に堆積する粗砂層で構成され、礫層は認められない。基盤層全体は隆起作用に伴う褶曲のため約70°に傾斜しており、各所に小規模な断層を形成している。

北西部およびその他の崖面 丘陵の北西部にも高さ2.4m、長さ26mの崖面が存在しており、崖の上方には角礫の詰められた溝が露出していた。この崖面についても断面観察と実測作業を行っている。ここでは客土の土入れ以前の堆積層を確認したが、自然堆積層であり、人為的な作用はおよんではないことが判明した。礫が混入する溝は竹林の境界を画す施設である。この場所でも遺物は出土していない。他にも2~3箇所、崖面が存在しているため、各所で断面観察を行ったが、いずれの地点でも遺構の痕跡や遺物の包含層は認められなかった。

まとめ 以上の調査を行った結果、対象とした小丘陵には遺構の痕跡が認められなかった。竹林の開墾による原地形の大幅な改変を考慮すれば、遺構がすでに消滅してしまった可能性もある。しかし、遺物を検出しなかった事実を重視するならば、調査地に古墳などの遺構が存在したとみなす積極的な根拠はないのである。ただし、丘陵の各所には報告のとおり大量の角礫が散在している。調査で確認された分だけでも人頭大から拳大まで総量にして509個あり、基盤層の状況から判断すると、これらの角礫が自然の作用でもたらされたとは考え難い。過去の

24 調査の結果・弁天芝丘陵付近採集の石棺・石室石材

いずれかの時点に、他の丘陵から人為的に持ち込まれた可能性は高いのである。この角礫に関する調査を橋本清一氏に依頼したところ、次のような所見をえた。

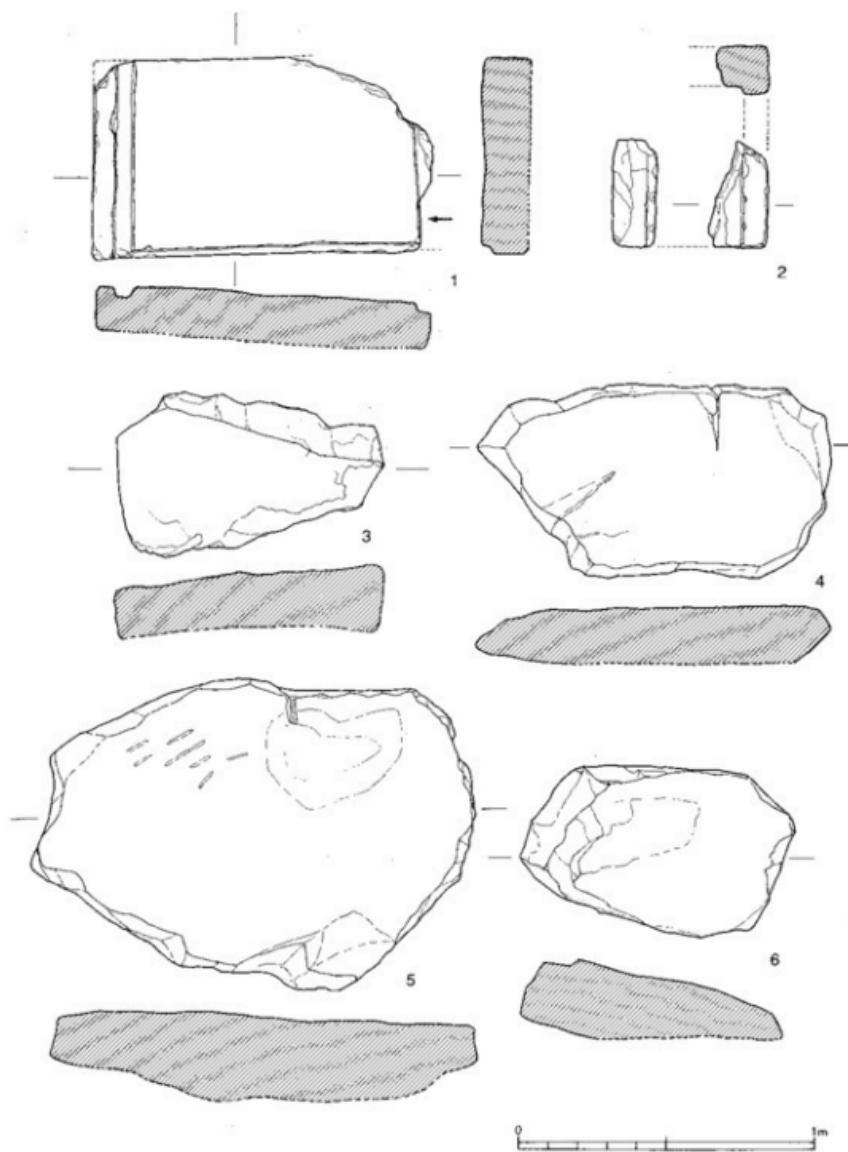
橋本氏によれば、これらの角礫は円磨度をみると0.1から0.2までの完全な角礫の部類に属し、岩石分類を行えば粗粒玄武岩と凝灰質の緑色岩類が圧倒的多数を占め、砂岩が少數認められるほか、頁岩～粘板岩がわずかに存在するという。また風化度は新鮮から中風化までの範囲に収まるが、弱風化程度のものが大半を占める。これらの角礫が産出するのは丹波帯であり、付近では弁天芝丘陵の西方および南西約100mほどの西山丘陵中に露頭がみられる。丘陵の基盤層と地形的な状況から判断する限り、角礫は露頭から直接採取されたものではなく、露頭からの転石を持ち込んだ可能性が高いとのことである。

このように角礫は隣の西山丘陵から持ち込まれた蓋然性が高いのであるが、それが竹林の開墾時であるのか、さらに以前であるのかを推定する材料はない。ただ注意すべき点は弁天芝という地名であり、過去に信仰の対象となった事実をうかがわせることである。この地にかつて神社等の小建築物の存在を想定するならば、角礫はそうした建物の建設にともなって丘陵内に持ち込まれた可能性もある。もとより、本丘陵は先に述べたように古墳の立地としては絶好の条件下にある。したがって、今回は特定しえなかつた未確認の墳丘が丘陵内のどこかに存在した可能性は依然残されており、こうした大量の礫の問題を含め、なお検討されるべき余地がある。今後の調査に委ねたい。

3 弁天芝丘陵付近採集の石棺・石室石材

現在長法寺地区集会所前の広場には、古墳の石棺や、石室石材かと思われる数個の石が集積されている。関連調査として、これらの実測作業を行うことになった。なお石の材質については橋本清一氏に肉眼鑑別を依頼した。材質に関する報告はその所見にもとづいている。

第25図は実測を行った主要なものである。1と2は石棺の破片であり、ともに材質は流紋岩質凝灰岩で、溶結作用の有無は不明であるが、いわゆる龍山石に属する。1は組合せ式家形石棺の底部とみられ、現状での長辺幅112.5cm、短辺幅65cm、厚さ17cmをはかる。両短辺と長辺の片側には上面縁部に沿って棺材接合用の溝が刻まれているが、両短辺では溝が縁部のやや内側に設けられているのに対し、長辺では縁部の上面を段状に削り出している。このことから溝のある方の長辺側が小口部であったとみなされる。もとの石棺底部はこの1枚を一方の小口とし、溝のない側の長辺に別の石材が取付いて都合3枚で構成されたものであろう。2は1と同様、組合せ式家形石棺の破片とみられる。二側面と上下両面に生きた面を残し、棺材の角の部分であることがわかる。縁部の内側に一条の溝が刻まれているが、厚さや溝の状況をみると、あるいは1から剥離した部分の破片かもしれない。図中矢印の部分で接合する可能性がある。



第25図 石棺・石室石材実測図

26 弁天芝丘陵付近採集の石棺・石室石材

3・4・5・6は石室石材かと思われる。いずれも偏平な板状の石材で、もっとも大きな5で長辺幅143cm、短辺幅100cm、厚さ25cmをはかり、もっとも小さな3は長辺幅90cm、短辺幅55cm、厚さ23cmである。いずれの石材も厚さがほぼ一定しており、長辺の側面は直線的である。

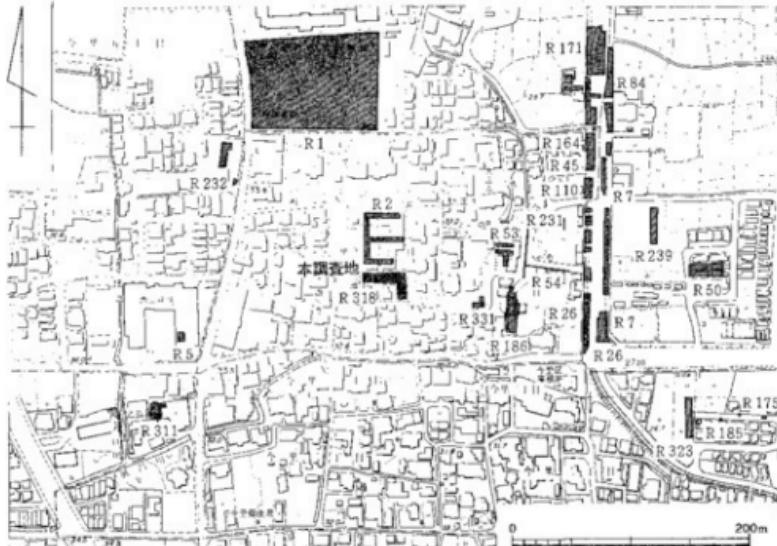
3は砂岩であり、4・5・6は石灰岩である。5と6には表面の一部に工具による削痕が認められるが、3と4の表面は自然面である。この工具痕が古墳時代のものか後世のものであるかは不明である。これらの石材は、その大きさや形状から判断すれば竪穴式石室の蓋石に適当な用材だといえるが、横穴式石室の壁体の一部を構成した可能性も残している。

これらの石棺や石材がいずれの古墳から持ち運ばれてきたのかは不明であり、判明していることは現在の場所に集められる以前に、いくつかが旧長法寺自治会館前的小川に渡す橋の用材に利用されていた点だけである。ただし、橋の石材には弁天芝の丘陵から取り出された石材が含まれているとの伝聞も存在するので、石棺や石材のうちの一部には弁天芝丘陵のどこかに所在した古墳の用材が含まれる可能性を捨てきれないである。今回の試掘調査では確認できなかつたが、丘陵全体を再度綿密に調査する必要があろう。

第3章 長岡京跡右京第330次（7 ANIHR-4 地区）調査概要 —右京三条三坊六町・乙訓寺跡・今里遺跡—

1. はじめに

1. 本報告は、1989年6月12日～8月11日まで、長岡京市今里三丁目114-1・2において実施した長岡京跡右京三条三坊六町推定地、今里遺跡、および乙訓寺跡の発掘調査に関するものである。
2. 本調査は、昨年度に引き続き乙訓寺の主要伽藍を取り囲む回廊の南側部分が検出される可能性が高いため、その確認を行うことを目的とした。また、同時に付近での開発計画に対して適切な文化財保護、指導が出来るように資料の作成を行うことを目的に国庫補助事業として実施した。
3. 調査は長岡京市教育委員会が主体となり、調査員は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、原秀樹が現地を担当した。
4. 調査実施にあたり、土地所有者である正木喜久子氏には種々のご協力を得た。また、現地調査および本報告の作成にあたっては、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏より種々のご指導を得た。遺物写真は楠本真紀子氏（泉北考古資料館嘱託）にご協力を得た。^①
5. 調査後の遺物実測や図面整理は、おもに原、田中智紀が行った。^②
6. 本報告の執筆ならびに編集は、原が行った。



第26図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

本調査地は、昨年度乙訓寺南門の東約20m地点で行った右京第318次調査の成果に基づき、さらに関連する遺構・遺物の確認を行うことを目的として実施したものである。既に周辺では多くの調査が行われているが、乙訓寺については右京第1次調査で講堂と推定される礎石建物や掘立柱建物が検出された以外、これまでに主要伽藍および関連する明確な遺構は検出されていない。



第27図 調査前風景

隣接する右京第318次調査では、いずれも二次堆積であるが表土と溝S D31801から弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、長岡京期、平安時代、鎌倉時代、室町時代、桃山時代の遺物が出土している。その中でも前期古墳の副葬品として用いられる石製腕輪類のうち車輪石が出土したことと、また室町時代の土師器皿が大量に出土したことは注目される点である。また、この溝S D31801についてはさらに東西両方向に延びており、同じく右京第2次調査で検出された東西溝も「現存する南門のはば東延長上」にあたることから、これらの遺構の追及は乙訓寺の伽藍配置を考えるうえで欠くことの出来ない地点の一つと考えられる。

本調査地では既に住宅建設に伴う整地により、昨年度実施した右京第318次調査地より約0.5m低くなっていることから遺構、遺物の残り具合が懸念された。また調査に際しては前回と同様土置き場の確保等の事情から2回に分けて行い、西側から先に調査を行った後、反転して東側の調査を行った。

3 検出遺構

本調査地では中世および近世の溝、柱穴、土壤、井戸などを検出している。遺構はすべて地表面で検出しておらず、標高約32.6mをはかる。また調査区の西端は昨年度に実施した右京第318次調査地と接しており、溝S D31801を中心に一部再検出を行った。また柱穴には根石を据えたものが多く見られたが、建物の構造については十分な検討ができなかった。この点については今後周辺地の調査とあわせて検討することとし、主なものについてのみ述べる。

溝S D31801 昨年度に検出した溝の東延長部分を確認した。前回の調査では、溝の中程から北側部分に集中して小さな石が密集して検出されており、これはさらに東へと続いていた。また溝は西壁部分で幅2.9mをはかるが、東側では溝幅が北に拡張され約4mとなっていた。溝の深さについても溝幅が広くなるあたりから起伏がみられ、わずかに上がりぎみであること

などが確認されている。今回の調査地でも幅は同じく約4mで検出されており、溝底も途中から徐々に上がって南側は完結しているが、北側は溝幅約0.7mと細くなりさらに東へ伸びている。おそらく搅乱されているものの、井戸S E 33008につながるものと考えられる。遺物は前回と異なりわずかに小片が出土したのみである。

溝 S D 33001 幅0.6~1m、深さ約0.2mをはかる南北溝で、一部S字状に曲折している。遺物は染付、瓦などが出土している。

土壙 S K 33002 北側の一辺が削平されているが一辺約2mをはかる方形掘形を呈する。本造構の四隅には切り合い関係がある柱穴がみられることから上屋が想定されるが、柱間は南東隅の柱穴がわずかに不揃いである。遺物は土師器の小片が出土したのみである。

土壙 S K 33003 円形の素掘りで直径1m、深さ約0.7mをはかる。造構の形態からみて井戸の可能性も考えられる。遺物は出土していない。

土器溜まり S K 33004 長辺0.9m、短辺0.7mの長円形で、深さ0.35mをはかる。当所では掘形を検出する以前から大量の土師器皿が密集して出土しており、掘形はこの土器を取り上げた地山面で検出している。従って土師器皿は土壙から盛り上がるような状態であったと考えられる。土師器皿の他には石と焼土塊が見られたが、ここで火を受けたものではなく遺物と一緒に投げ込まれたものと考えられる。このような土器の出土状況は隣接する右京第318次調査地の表土、表土Ⅱと類似している。遺物は土師器皿以外は出土していない。

土壙 S K 33007 長辺1.3m、短辺0.9mの長円形を呈し、深さは約0.4mをはかる。素掘りで何の痕跡も確認されなかった。遺物は出土していない。

井戸 S E 33008 直径2.5m、深さ2.4mをはかる素掘り井戸。掘形は東側のみ舌状に張り出している。この部分は肩口から緩やかに傾斜しており、中程から直に井戸底へ下がる。井戸は埋土の状況からみて一気に埋めもどしたものと考えられる。底からはわずかに湧水が見られた。このように井戸掘形が舌状に張り出す類例としては右京第287次調査の井戸S E 28705があげられる。この井戸も掘形は東側に張り出しているが、これより下では石組を検出している。本造構では底に長さ0.15~0.3mくらいの石が6個並んで検出されたが、各々が組まれた状態ではなかった。遺物は備前焼の花生や鉄製の釜、瓦器火鉢、土師器皿、磁石などがこれらの石の周辺からまとめて出土している。

集石造構 S X 33009 長さ0.2m未満の小さな石が密集しており、この間から土器や瓦の小片が出土している。検出当初は掘形が不明瞭であったが、除去後に長辺約1.6mの長円形掘形が確認された。

土壙 S K 33010 直径1.3m、深さ約0.3m。土壙からは棟瓦が大量に出土しており、他に少量ながら染付碗と軒平瓦（乙訓寺OH-4型式）が出土している。棟瓦の中には「乙訓寺」、「奥海寺院儀兵衛」などの刻印をもつものがある。

30 検出遺構

水溜め S E 33011 直径0.9m、深さ0.5m。底と壁は、黄褐色系の粗い砂と石灰、粘土を加えて練った漆喰で固められていることから水などを溜めたものと推定している。遺物は、炮烙、染付の碗と蓋、土鉢などが出土している。

井戸 S E 33012 直径1.6m、深さ0.5mをはかる素掘り井戸。水溜め遺構S E 33011に切られており、本遺構の方が古い。遺物は出土していない。

井戸 S E 33013 井戸の周囲を一段下げるから直径1.4mの井戸本体を掘っている。深さ約0.6m。井戸の掘形は調査地東へと続いているが、その形は多角形に掘られているようである。遺物は染付、瓦などの小片が出土している。

井戸 S E 33014 直径1.4mと推定される素掘り井戸。深さは約1.5mまで掘り下げたが底は確認されなかった。遺物は陶器、染付などの小片が出土している。

水溜め S E 33015 S E 33011と同じく黄褐色系の粗い砂と石灰、粘土を加えて練った漆喰で固められている。形は東壁が直線に対して西側はU字形になっており、底は直径0.6mの小さなへこみが見られる。掘形はこの漆喰の西側が一段低くなっているが、東側は調査地外へ延びているため不明である。遺物は棊瓦や染付などが出土している。

井戸 S E 33016・S E 33017 大きな土壤状の掘形から2基の井戸が検出された。ともに素掘りである。S E 33016は東側が調査地外へ続いているが直径約2m、深さ約0.8mをはかる。S E 33017は直径1.7m、深さ約0.9m。遺物は各々の井戸と全体の掘形から土師器、染付、棊瓦などが出土している。

柱穴 P 50 一辺0.6mの方形掘形が南北に等間に並んでおり、その中の中間にあたる。深さはいずれも0.3mをはかり、柱痕跡については検出されなかった。P 50からは土師器と須恵器が出土している。

柱穴 P 83 直径0.5m。この柱穴の埋土には焼土が入っており、根石にも火を受けた跡が見られた。

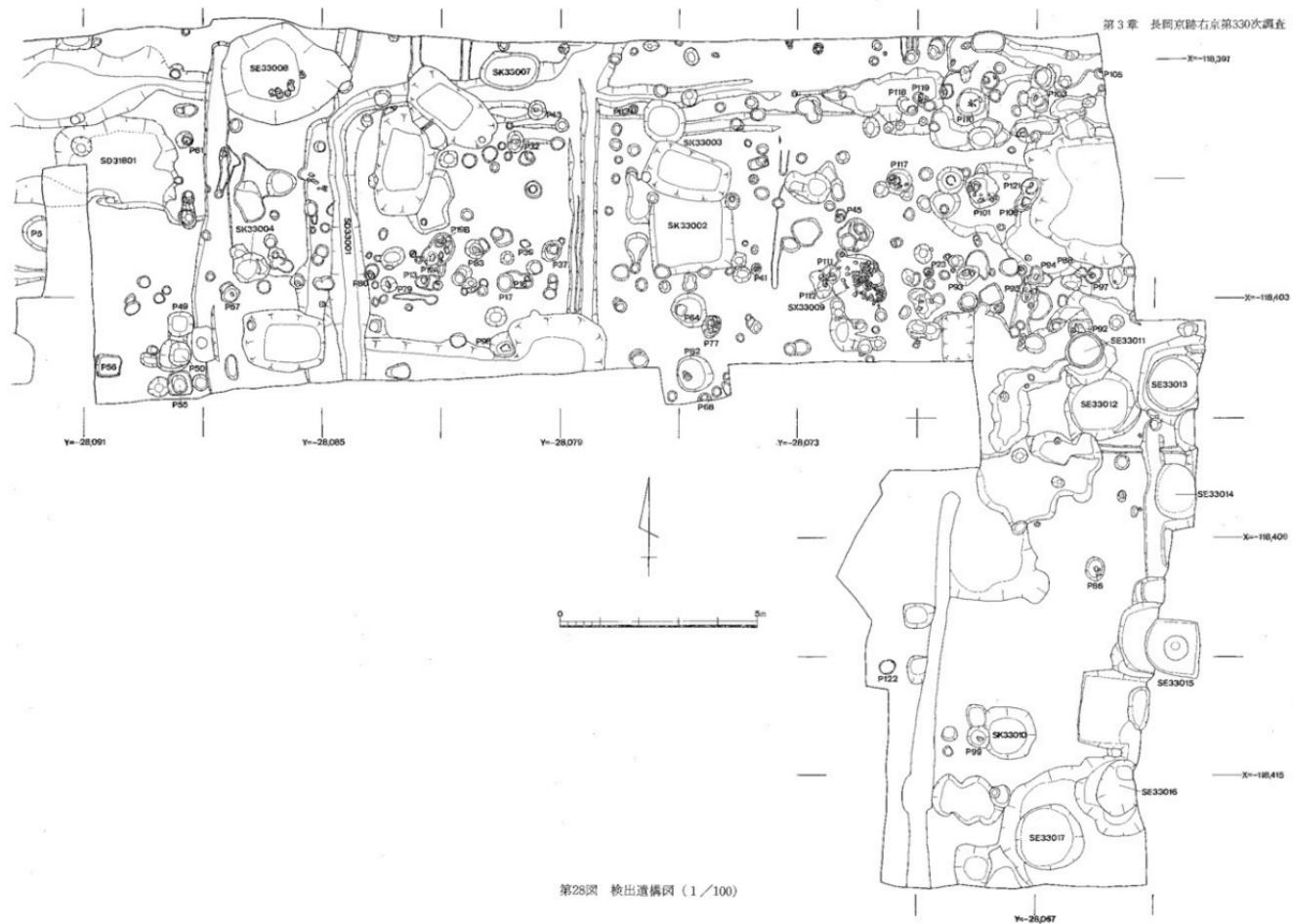
柱穴 P 39 掘形は検出されず根石のみ検出された。

柱穴 P 110 直径0.7m。深さ0.4m。根石は検出されなかったが、底には先を削った長さ約0.1mの木を放射状に並べている。遺物は出土しなかった。

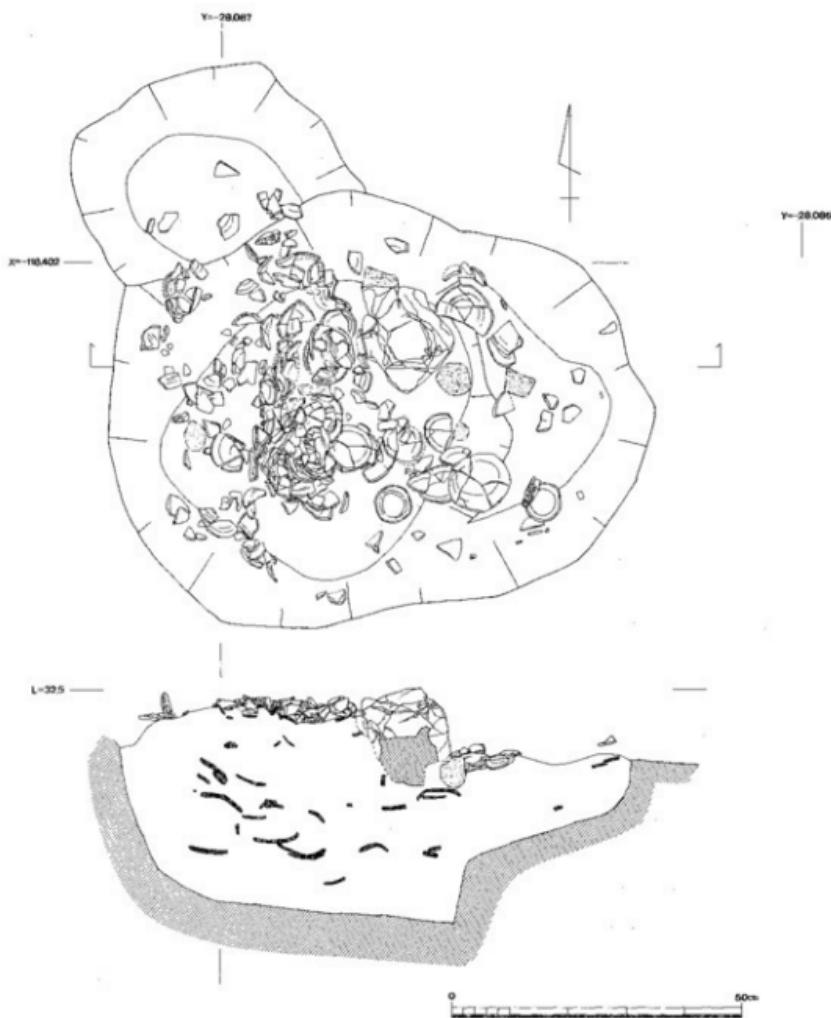
柱穴 P 117 直径0.65m、深さ約0.4m。底石の上には東側を除いて柱に添うように三方に石が立てられている。遺物は出土しなかった。

柱穴 P 64 直径0.9m、深さ約0.8m。柱穴の大きさは南側の柱穴P 82と並ぶ規模であり、関連するものと考えられる。

これらの柱穴は井戸S E 33008の東側に集中して検出されている。



第28図 検出構造図 (1/100)



第29図 土壙 S K33004実測図（1／10）

4 出 土 遺 物

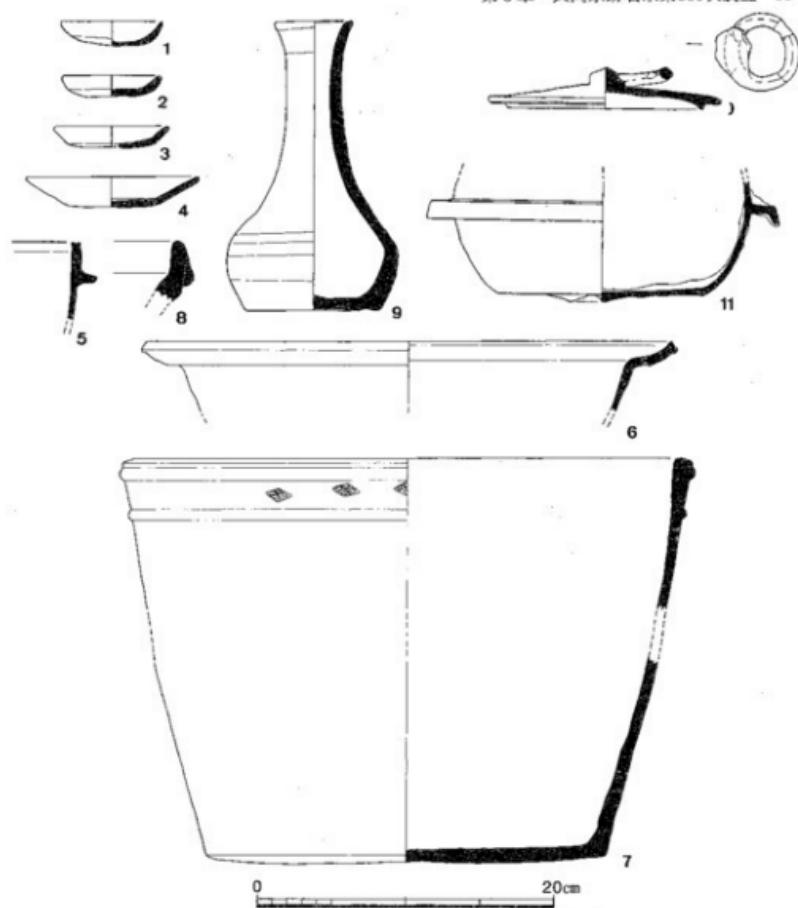
今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦、土製品、鉄製品、石製品などであり、全遺物量は整理コンテナに30箱余りである。しかし量的には江戸時代以降の新しいものが最も多く、これは隣接する昨年の調査地とは異なる点である。同じく昨年度多くの遺物と石を出土した溝S D31801も本調査地ではわずかに小片が出土したのみである。本調査地では主に井戸や土壌から室町時代後半から桃山時代および江戸時代中期以降の遺物が多く出土しており、これ以前のものについては非常に少ない。また今回数多く検出された柱穴にはほとんど遺物が入っていないかった。

以下、遺構出土の主な遺物について述べる。

井戸 S E 33008出土遺物（第30図、図版14） 土師器の皿（1～4）と鍋（6）、瓦器の羽釜（5）と火鉢（7）、備前焼の花生（9）とすり鉢（8）、鉄製の釜（11）とその蓋（10）、砥石が出土している。この他小片のため図示しえなかったものに須恵器、瓦などがあり、整理コンテナに約1箱出土している。

土師器皿は、1～3が口径6.6～7.7cmをはかる、4は口径11.4cmをはかる。いずれも器表はやや磨滅している。口縁部はナデの強弱により外反気味にひらくもの（3）と、丸くおさめるもの（1・2）が見られる。4は平坦な底部と直線的に伸びる口縁部をもつ。見込みには圓線が巡る。5は口径が復原できない小片である。直立する体部に鍋が付く。鍋の外面には煤が付着している。6は口径35cmに復原される。外面は全面に煤が付いている。7は口径38.5cmに復原される。底部は残存しており底径27.0cmをはかる。口縁部外面には突帯を上下2本張り付けその間に菱形の刻印を施す。調整は体部下半に指圧痕が残る程度であり、内外面ともに磨滅している。8は口径が復原できない小片である。口縁部には片口がつくりだされており、口縁部外面にのみ自然釉が付着する。9は口径5.2cm、器高19.3cmの完形品。大きく膨らんだ下半部はヘラ削りを行い、細く伸びた頸部はロクロナデを行う。自然釉は口縁部と頸部から下方にかけている。また底部には剥離した痕跡が見られる。10・11は井戸底から一緒に出土している。10についてはほぼ半分程度残っており口径は13.6cmをはかる。天井部には直径約5cmの環状つまみが付く。11は逆L字状の鍋が付く。口縁部は出土していないが、緩やかに内湾しながら立ち上がり蓋に合うものと考えられる。底部径は13.6cmである。これは破片を含めてほぼ完形に復原される。砥石は砂岩で、擦られた面が上下2箇所に見られる。

土器溜まり S K 33004出土遺物（第31図、図版14） 土師器皿が掘形を検出する前から集中して大量に出土しており、掘形は地山面まで下げた時点で検出した。このような土器の出土状況は隣接する右京第318次調査地の表土、表土IIと同じ出土状況である。この土壌からは土師器皿以外は出土しておらず、土壌上面で石と焼土が検出された程度である。

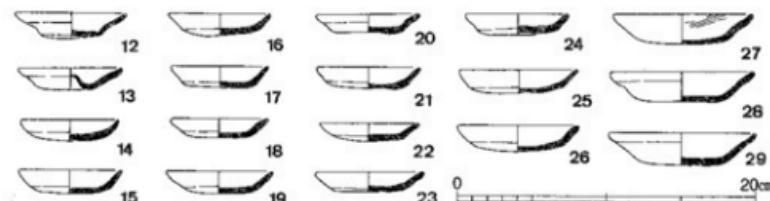


第30図 井戸S E 33008出土遺物実測図 (1/4)

土師器皿は法量と形態から分類される。形態的な特徴からみて概ね5タイプに分かれるものと考えられるが、またその中でも若干法量による差が見られるものも存在するようである。

しかし本遺構では全体の傾向はつかめたものの、各々の数量的な分析については十分な検討ができなかった。遺物はそれぞれ主なものについてのみ図示した。

皿は概ね口径7cm、器高1.5cm前後のものと、口径10cm、器高2cm前後のものに分けられる。皿の形態は内面に圓線をもつものの(12)と、底部を押し上げるもの(13)があり、ナデの強弱により底部から口縁部にかけて丸くおさめるもの(14・15)と、口縁部が外反し底部との境に稜が見られるもの(16~26)がある。(27~29)は口縁部が直線的にのびるものなどがある。

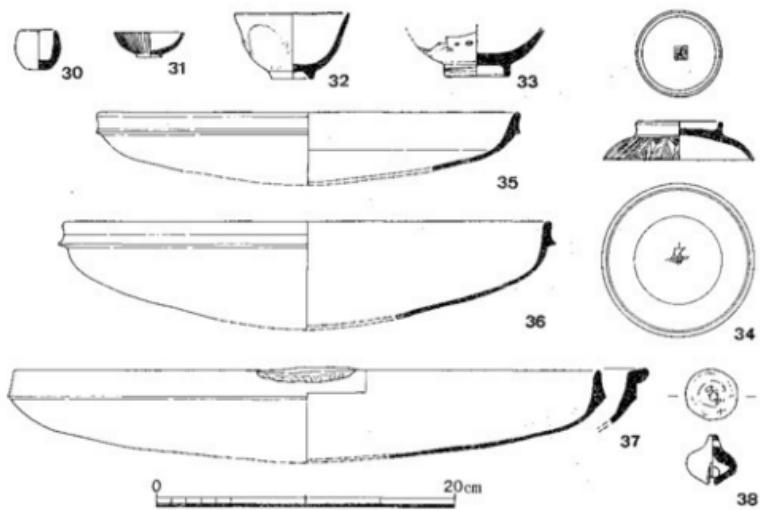


第31図 土器溜まり S K 33004出土遺物実測図 (1/4)

この他に小片であるが、口縁部に鋸歯状の小さなきざみがつく皿が出土している。

12は口径7.6cm、器高1.7cmをはかる。口縁部下半は指圧により屈曲する。口縁部のナデは端部と内面に見られ、ナデの方向は時計回りである。このタイプのものは1点しか確認されていない。色調は灰白色系である。13は、いわゆるヘソ皿である。底部には押し上げた爪形の痕跡が残っている。口縁部と内面にナデを行う。このタイプも他に小片が出土しているのみである。色調は灰白色系である。16~26に代表されるタイプは最も数多く出土しているものである。これまでに表土、表土IIや溝S D 31801から出土した土師器皿も大部分がこのタイプである。口径は6.5~7.2cm、器高1.5cm前後のものにわざかに口径8.1cm、器高1.6~1.8cmのもの(25・26)がみられる。いずれも調整は口縁部と内面にナデを行っており、わずかに内面にハケメ痕跡をとどめるものが若干出土している。底部は指おさえによる手すくね成形のため歪みがみられる。色調は灰白色から赤褐色のものがある。14・15については、口径と器高は16~26に代表されるタイプと同様である。これは口縁部のナデ調整の強弱により識別したものであるが、法量的にはやや小さいものに多いようであり数量的にも多くのない。この皿については他の出土例と比較したうえでさらに検討したい。27~29についても昨年度に多く出土している皿である。口径9~10cm、器高2cm前後をはかる。ナデ調整は口縁端部と内面に行っており、口縁部下半は指圧によりやや屈曲する。口縁端部のナデが強いものは上方に伸びるものもみられる。内面にはハケメを残すものがある。色調は赤褐色系である。

水溜め S E 33011 (第32・33図、図版15) 磁器皿(31)、染付碗(32)、蓋(34)、炮烙(35~37)、土鈴(38)、棟瓦の軒先瓦(39)が出土している。31は口径4.8cm、器高1.7cm。口縁端部から内面に釉がかかっている。歪みがみられる。32は口径7.8cm、器高4.3cm。大きく弧を描く唐草文を施す。色調は濁った白色である。歪んでいる。34は口径10cm、器高2.6cm。広東碗の蓋。外面に綾杉文を施し、見込みには帆掛け船を描いている。底裏銘は二重の方形枠内に変形字が書かれている。35~37は断面三角形の小さな鉗が付く。口径は35が28.3cm、36が32.4cm、37が39.4cmをはかる。37には把手がつく。38は最大径3.6cmをはかる。中空の内部には土球が入っており完形品。

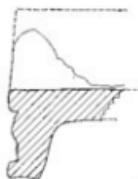


30-P 68 33-SK 33010 31・32・34～38-SE 33011

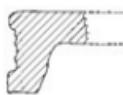
第32図 出土遺物実測図 (1/4)

土壤SK 33010 (第33図、図版15) 橋瓦の軒先瓦 (40・41)、平瓦 (42・43)、軒丸瓦 (44) が出土している。土壤からは平瓦を中心に整理コンテナに約10箱分の瓦が出土している。この他にはわずかに外区に線鋸歯文線が巡る均整唐草文軒平瓦 (OH-4型式) や平瓦、染付碗 (33) などが出土している程度である。40は瓦当と凹面の色調は灰白色で、凸面は銀灰色を呈する。41は瓦当の脇に「奥海寺院儀兵衛」の刻印がみられる。この銘については瓦の生産地を考える上で重要なものであるが、既に儀兵衛と称する屋号については本市奥海印寺において江戸時代から瓦生産を営んでいた家の屋号であることがわかっており、この瓦についてもここで生産されたものと判断できる。刻印の寸法は縦2.8cm、横1.3cmである。また凹面にはいぶされずに白く残るところがみられる。その形は隅を四角に切り欠いていることから橋瓦を重ねたものであろう。42は平瓦の端面に「乙訓寺」の刻印がみられる。刻印は文字の上下を横棒で貫しており、寸法は縦3.2cm、横1.3cmをはかる。色調は全面に銀灰色である。この刻印をもつものは1点のみ確認されている。43は平瓦の端面に41と同じく「奥海寺院儀兵衛」の刻印が2か所に割り印のように押されている。全面に銀灰色。44は左巻き三ツ巴文。直径は約16cmに復原される。銀灰色。

円盤 (第34図、付表-2、図版15) これは土器や陶磁器、瓦などを利用して、その周縁を打ち欠き、磨るなどして円形に仕上げたものである。同様の遺物はこれまでにもわずかに出



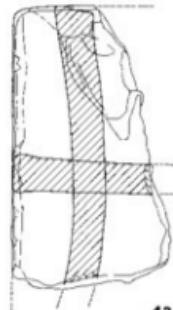
39



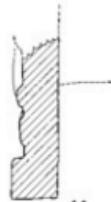
40



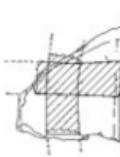
41



42



44



43

39-SE33011 40-43-SK33010

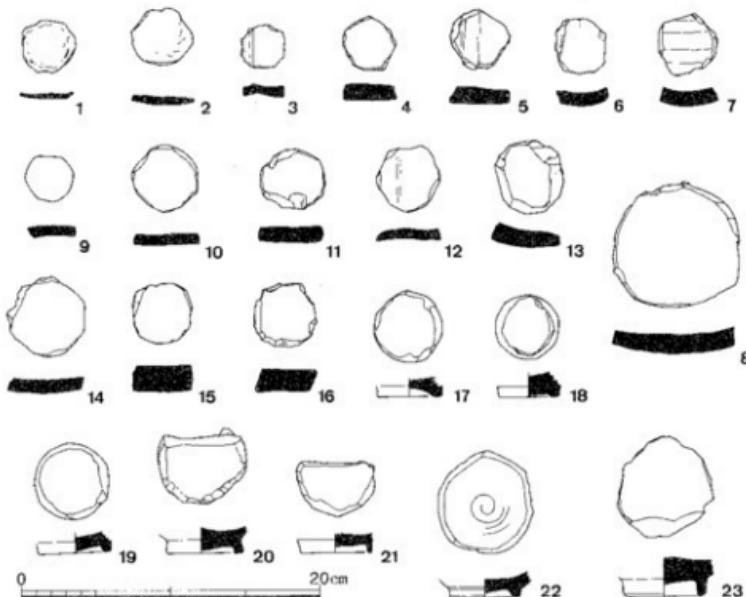
第33図 出土遺物実測図 (1/6)

土していたが、本調査地では昨年度の調査と合わせて少なくとも23個以上は出土しており、このようにまとまって出土したのは初めてである。その大部分は昨年度の溝S D31801や表土、表土IIから出土したものであり、今回は井戸S D33014から出土したもの（7・22）の他に8・18・20・23が搅乱や上げ土から出土した程度である。材質や法量については付表-2に見られるように様々であり、底部を利用しているもの（17～23）と口縁部を用いるもの（2）もあるが、大部分は土器や陶磁器の体部片を用いたものである。各々の周縁はほとんどが打ち欠いたままであり、磨られた痕跡が明らかなものは15だけである。また本来の器表面について内外面とともに何らの調整も加えることなくそのままである。遺物の年代については大部分が室町時代後半および江戸時代中期以降に属するものが多い。しかしこの中には、須恵器壺Mと考えられるもの（20）や、竜泉窯系青磁碗（23）も出土している。また、この名称についても様々であるが、用途についても未だ判然としないところが多い遺物である。

付表-2 円盤の計測値

番号	長径	短径	厚さ	重量	材質	番号	長径	短径	厚さ	重量	材質
1	3.6	3.4	0.4	6.3	土師器	13	4.9	4.7	1.2	36.7	須恵器
2	4.2	3.6	0.5	7.6	"	14	5.3	5.2	0.9	35.3	"
3	3.1	2.9	0.7	7.0	陶器	15	4.0	3.9	1.7	37.1	瓦
4	3.7	3.4	1.1	18.7	"	16	4.1	4.1	1.4	31.8	"
5	4.0	4.0	1.1	21.6	"	17	4.7	4.7	1.2	30.4	陶器
6	3.7	3.4	0.8	17.9	"	18	4.3	4.3	1.6	30.2	"
7	4.0	3.7	0.9	22.0	"	19	5.1	5.0	1.3	28.1	"
8	8.4	8.1	1.3	120.1	"	20	6.0	4.4	1.7	45.7	須恵器
9	3.2	3.0	0.7	8.7	瓦 器	21	5.2	3.6	1.3	23.2	磁 器
10	4.5	4.4	0.7	15.0	"	22	6.8	6.4	1.7	60.7	陶器
11	4.4	4.0	1.0	21.9	"	23	6.7	6.5	2.5	95.7	磁 器
12	4.4	4.0	1.0	19.3	"						

単位は長径、短径、厚さ (cm)、重量 (g)



第34図 円盤実測図 (1/4)

40 まとめ

5 まとめ

今回の調査は、昨年度の調査で現存する南門の南側で検出された東西方向の溝S D31801がどのような性格の溝であるのか、また右京第2次調査で検出された東西方向の溝との関係はどうなのかという問題が未解決であることから、この点を明らかにすることを目的に調査を実施したものである。昨年度の調査は小面積のため遺構の広がりが十分に確認しえなかったが、今回は対象地のほぼ全域を調査することができた。その主な成果について列記すると、溝S D31801については井戸S E33008に接続して終わっており、これより東では総数約120におよぶ柱穴が検出され、うち30余りの柱穴に根石が据えられていた。これは掘立柱建物以外にいわゆる礎石建物が存在したことを示している。また土壙S K33004からは大量の土師器皿が出土しており、土器の一括性もさることながら溝S D31801や包含層の出土状況とも関連して特異なものと判断された。また遺物には中国製の天目茶碗や、備前焼の花生、鉄製の釜が出土しており、これは居住者の階層を考える上で重要な遺物といえる。さらに調査地の東端から南側にかけては江戸時代の井戸が多数検出された。

以上のことから、当地では室町時代後半から桃山時代に比定される遺構が確認され、当初考えられた乙訓寺の主要伽藍を取り囲む回廊の南側部分については、少なくとも本調査地では検出されておらず、またこれ以前の遺構についても検出されなかつた。このように本調査地では昨年の調査地を含めて溝や土壙、包含層から各時期の遺物が大量に混在して出土していること、またこれらの遺物は一時に埋められたと考えられることなどから、これらの遺構が廃絶した際に周辺が整地されたのではないかと推測される。この時期はいわゆる戦国時代とも呼ばれる頃であり、乙訓における歴史の動向が注目される。またこれに関連して南西200m地点で行った右京第311次調査で検出された溝S D31101と溝S D31106の出土遺物は、本調査地とほぼ同時期と考えられるものであり、遺構の性格と併せてその関連性が注目される。

なお、遺物の検討については平安京調査会小森俊寛氏に助言を賜った。

注1 この他にも、船戸裕子、前田明美の御協力をいただいた。

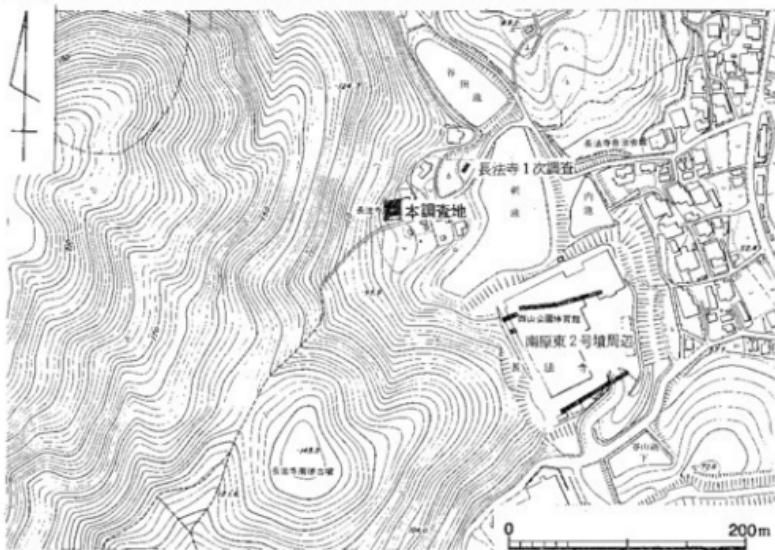
2 原 秀樹「右京第318次調査概要」長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第22冊
1989年

3 小田桐淳「右京第311次調査概要」長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第22冊
1989年

第4章 祭ノ神遺跡第2次・長法寺（7CTJTD-2地区）調査概要

1 はじめに

1. 本報告は、1989年7月26日から9月28日まで、長岡京市長法寺谷田において実施した長法寺本堂改築工事にともなう発掘調査に関するものである。調査面積は198m²である。
2. 当調査の目的は、本調査地が平安時代建立の寺伝をもつ現長法寺本堂既存位置であると共に、弥生時代から鎌倉時代までの遺物が散布する祭ノ神遺跡の範囲に当たるため、これらの遺構・遺物の有無や性格・散布状況などを確認し、保存に必要な資料を作成することにある。
3. 本調査は、長岡京市教育委員会が主体となって実施し、現地調査を財団法人長岡京市埋蔵文化財センター調査員の岩崎誠が担当した。
4. 現地調査及び報告書作成にあたり、中山修一（京都文教短期大学名誉教授）・都出比呂志（大阪大学教授）の両氏に調査指導を依頼し御快諾戴いた。また、永井規男氏（関西大学教授）には建築史の立場から有益な御助言・御指示を賜った上に、当報告書に御寄稿戴いた。遺物写真は、楠本真紀子氏（泉北考古資料館嘱託）にご協力を得た。このほか、現地調査と整理作業及び報告書作成にあたり、多くの方々にお世話を戴いた。
5. 本報告の執筆は、岩崎と永井が分担し、文末に名を記した。編集は岩崎が担当した。



第35図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 地理的環境

当寺地は西に山を背負った谷間にある。寺の東には丹波街道沿いに形成される長法寺の集落があるが、集落の西に南北に延びる低い丘陵によって、寺地と集落とは隔離されている。この丘陵があるために集落とはわずか200~300mしか隔たっていないというのに、寺地は世間から孤絶した別天地という印象をあたえる。寺地の前には谷田池、新池、内池の名をもつ溜め池が南北に段状に並んでいて、明るく開けた秘境といった雰囲気を作り出している。寺地の南側を通じる山道をたどって行くと長法寺と奥海印寺の産土神である走田神社の脇に出ることができる。この山道の峠の頂上の東側、長法寺の寺からみるとやや南西の方角にあたる丘陵頂部には三角縁神獸鏡などを出土した前方後方墳である南原古墳^⑨が、また西方の標高230mの野山山頂には八基の古墳が散在する南原古墳群がある。

寺地は山を切り崩し谷を埋めて造成されたようで、庫裏を兼ねる本堂は東面し、背後には山がせまっている。本堂に至る正面参道入り口には、左側に地蔵堂がたち、右側には千觀供養塔とつたえる鎌倉時代の三重石塔と室町時代の宝鏡印塔が並びたつ。本堂の北には小さな池が掘られ、石橋を渡し、室町時代末頃の小さな十一重石塔を建てている。さらにその北方の壇上には白山権現社の流れ造りの小社殿がある。社前の石燈籠には天保12(1841)年の刻名がある。本堂の東北の一隅低くなったところには比較的近年に建てられた住まいがあり、わたり廊下で本堂とつないでいた。なお、明治28年の古社寺調査書の添図(第36図)は、池の様子は同じであるが、本堂前左右二つの地蔵堂と観音堂(いざれも一方一間の小さなもの)を、また白山権現社のところに弁天堂と毘沙門堂の二基の小社殿を、その東方に三重石塔を描いている。明治中頃と現在でもかなり変わっているのが解る。

長法寺の周辺をすこし広く見渡してみよう。そこには似たような立地、発祥をもつ寺院がお互いに結び付けられるように散在している(第37図)。まず、北には約500mはなれて、西山派浄土宗の總本山光明寺がある。ここは『法然上人絵伝』によると法然の弟子蓮生が茅屋を営んだところとされ、また法然その人も承安5(1175)年にこの



第36図 明治28年の長法寺(乙訓郡役所文書5)

京都府立総合資料館所蔵

近くの広谷というところに庵室を構えたとされる。『山州名跡志』は広谷の場所を法然廟所の申（西南）の方角約四町のところと推定している。それは前記の野山の付近にある。おそらく子守勝手神社の北の谷を遡った辺りにあったものであろう。この子守勝手神社の境内には天台宗観音寺があり、十一面千手観音を本尊としている。光明寺の西の山道をつたって行くと小塙の十輪寺や善峰寺、三鉢寺に至ることができ、さらに善峰寺からは尾根ぞいに金蔵寺にいたる。これらの寺は天台系の遁世僧の建立による別所としての起源をもつ。また、南方に転じて丹波街道から西国街道に出て下って行けば、大山崎の宝積寺や観音寺もそれほど遠くはない。また、奥海印寺を抜けて南に山中にはいると、柳谷観音の名で知られた楊谷寺や淨土谷の乗願寺も近い。摂津の國の金竜寺（高槻市成合、天台宗）は、長法寺の開基と伝えられる千觀が再興した寺であるが、そこへは西国街道からはもちろん、この乗願寺を経る山道を利用して行けるのである。このように乙訓の西岡の丘陵地域には中世以前の起源をもつ天台系の山寺が多い。こうした地理的な環境からみると、長法寺もこうした寺々と同じような起源、性格をもつた寺ではなかったかと推測されるのである。（永井）

3 長法寺の歴史

長法寺は、山号を法巖山という。十一面觀音を本尊とし、天台宗に属している。古文書・古記録がなく、その歴史はほとんど明らかでない。しかし、千觀上人を開基すると伝え、平安時代の作とされる国宝絹本着色釈迦金棺出現図を伝蔵したことや、境内に鎌倉時代の三重石塔があることなどからすれば、かなり古い歴史をもった寺院であることは推察できる。近世の記録としては、まず天明3(1783)年の「寺社改」は、当寺と比叡山延暦寺正覺院の末寺で、西山法流に属し、応和2(962)年の開創としている。ただし開基の名をあげていない。7間半に4間半の建物があり、白山權現社と牛王善神社の二宇の小社があるとする。宝暦9(1759)年の「天台宗本末帳」は、乙訓郡長法寺村の長法寺と本明寺を正覺院の兼帶末とし、「異本本末帳」では宝蓋院末としている。おそらく宝蓋院が



第37図 乙訓の代表的寺院分布図

44 長法寺の歴史・調査経過

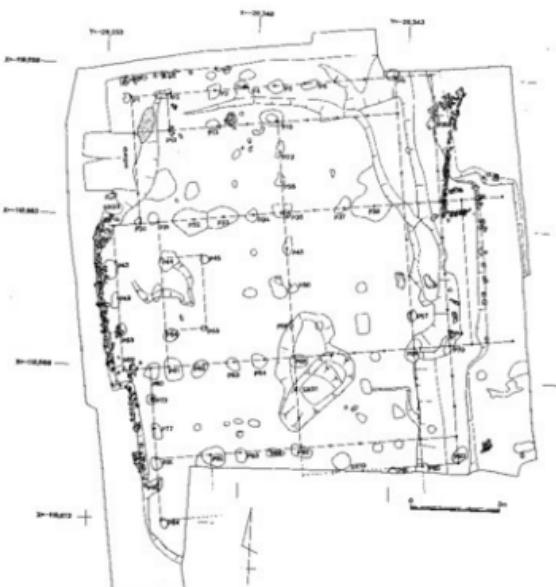
正覚院の兼帶末寺となる前は、長法寺は宝菩提院の末寺だったのであろう。なお本明寺は宝暦9年の時点ですでに廃寺になっており、その所在は不明である。千觀については、本朝高僧伝は、橘敏貞を父として生まれ、幼年から圓城寺において修業した淨業僧で、応和2年に勅命により箕面山に雨乞祈禱を修した。のち圓城寺を出て攝津安満の山中に金龍寺を開いたとする。しかしながら、今昔物語では、橘氏出身の千觀内供と言う人を比叡山の僧として描いている。千觀の長法寺開基のことを記した資料はなく、伝承としてつたえられるだけであるが、同じ市内にある勝竜寺も、千觀を中興としており、もとは青竜寺といったのを千觀の祈雨の効験によつて勝竜寺と改名したと伝えている。その人物像はこうした説話的な伝記からでは明確にしがたい。おそらく、比叡山系の遁世僧でこの地方の諸別所に住みつつ、この地方での水利開発と一面観音信仰の普及に大きな役割を果たした人のようである。(永井)

4 調査経過

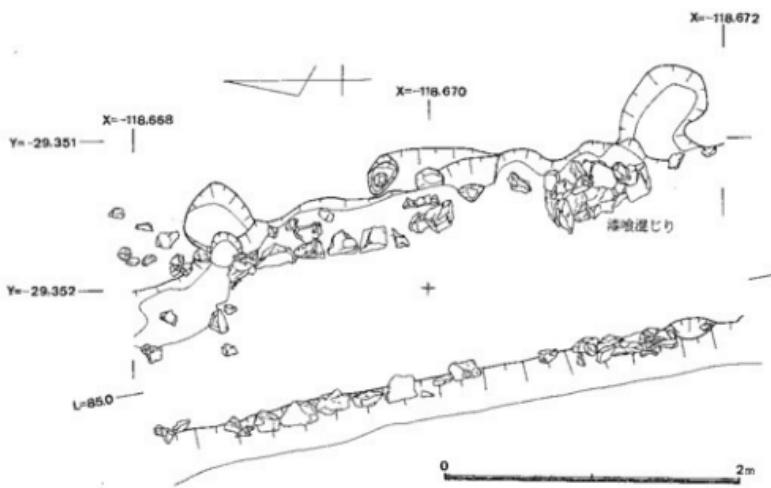
当調査地の周辺では、祭ノ神遺跡第1次調査が行われている。その調査では、中世遺物の他に弥生土器や平安時代の土器類も出土したため、從来鎌倉時代以後の遺跡とされてきた当遺跡を、弥生時代の遺物散布地と平安時代の長法寺寺院遺跡の重なりとしても捉える必要が強調された。また今回の調査位置

が、長法寺本堂の既存位置であることから、祭ノ神遺跡第2次としての調査と併せて長法寺の寺院に関する調査とすることにした。これにより、遺跡名の記号も、平安時代の寺院の調査に重きを置き、7CTとした。この他の周辺地の調査では、古墳に関するもの(地理的環境の項参照)がある。しかし、調査地の現状からみて古墳の存在は考えられなかった。

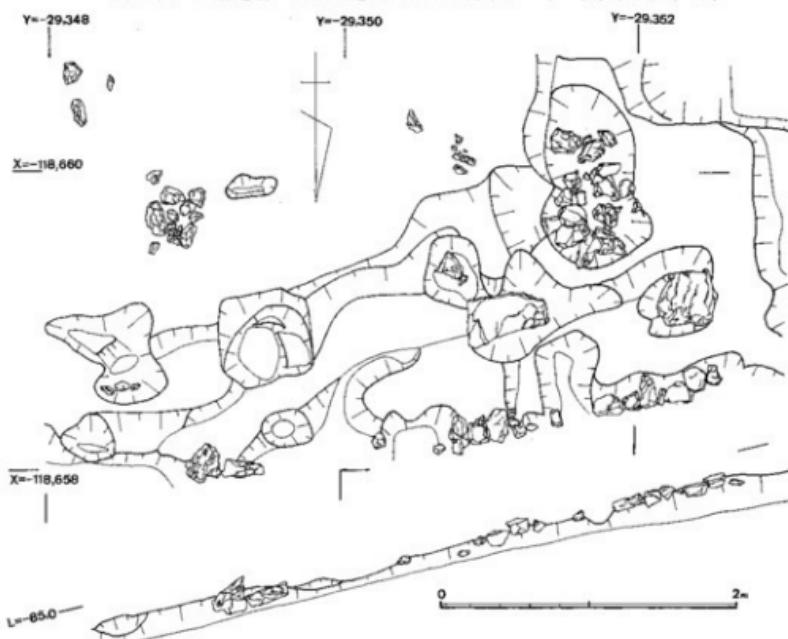
調査位置は、既存本堂撤去後、その床面の大部分を対象に設定した。既存本堂



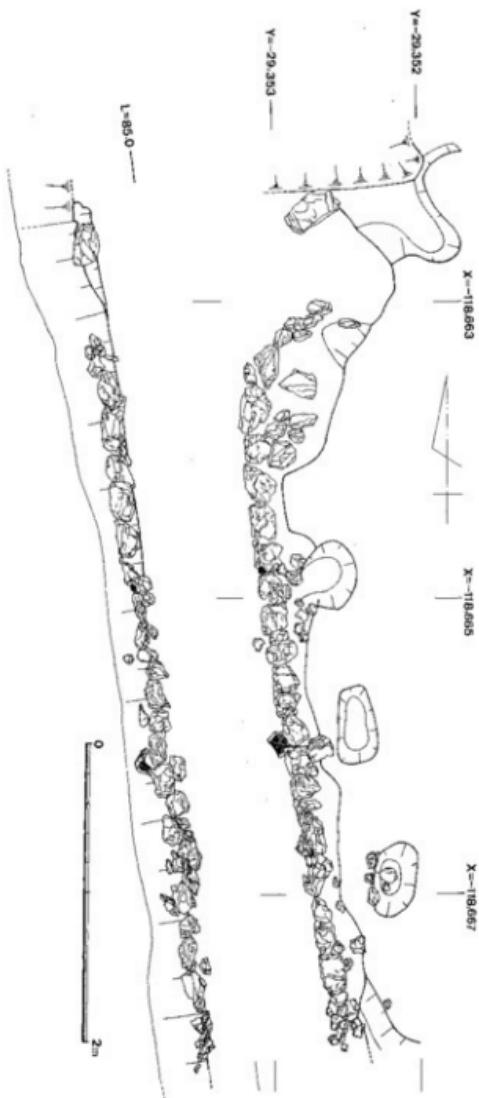
第38図 基壇上層検出遺構図 (1/200)



第39図 上層遺構 基壇西辺石列 S X01南半部 平・側面図 (1/40)



第40図 上層遺構 基壇北辺石列 S X02 平・側面図 (1/40)



第41図 上層遺構 基壇西辺石列 S X01北部
平・側面図 (1/40)

の床面は、周辺より約10cmほどの高まりが作られており、創建当時の基壇がいかされている可能性が考えられた。また、長岡市京史編さん係によって、既存本堂の調査がなされているため、重機によって解体され整地された対象地を、解体時の搅乱層を除去し、解体された建物の基礎構造を把握する作業から行うことになった。このため、表土から全て手作業による調査となった。（岩崎）

5 檢出遺構

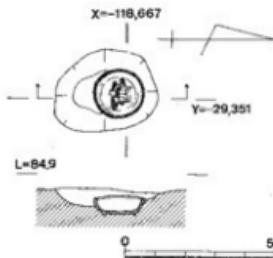
既存建物の基壇には造構面が三面あり、解体時の搅乱層除去段階を第1面（上層）、軟質の粘板岩の岩盤をベースとする地山層の削り出しにより築かれた最下層の基壇面を第3面（下層）、その間の版築層中位にある基壇面を第2面（中層）と呼ぶことにする。

上層遺構 搅乱層を除去した段階で、礎石建物跡と、基壇を囲む石列を検出した（第38図・図版16-（1））。

礎石建物 S B01 建物の礎石は、ほとんど重機により抜き取られていたが、凹凸のある石の面が地面に圧痕となって残り、その位置は容易に知ることが出来た。なかには礎石の残欠が残るものや、礎石が完全な形で残るものもあった。この建物は、南辺は確認できなかったものの、他の三辺は位置を押さえることが出来た。この成果は、解体家屋の観察と比較して、若干の違いがみられる。例えば、西辺部は西へ約1mの張り出しがみられ

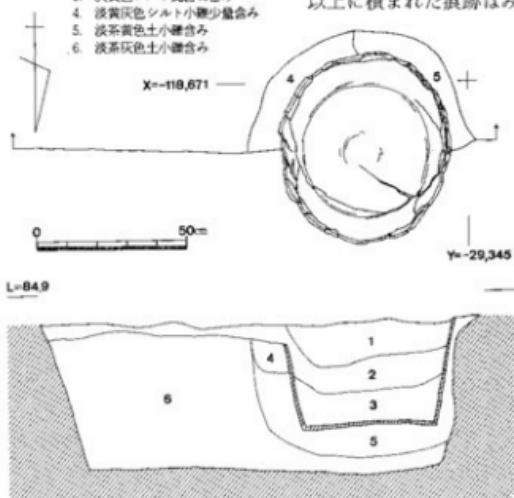
ることや、付属施設としての便所が、解体前に北西隅であったのに、南東部で便所と思われる瓦器の鉢を埋めた遺構S X10が検出されたことなどが指摘できる。また、解体家屋の柱位置に合わない礎石跡P-73からは19世紀前半の染付上絵鉢が出土する（第42図）など、19世紀前半以前の建物に関連する礎石跡もある。従って当建物は、19世紀前半以前に建てられたもので、その礎石の大部分を動かさずに利用して、ほぼ同規模の建物に建て替えられたとみられる。

基壇裾の石列 S X01・02



第42図 磚石建物 S B01 P-73染付上絵鉢出土状況
(1/20)

1. 茶黃灰色シルト小礫少量含み
2. 黒灰色シルト灰岩シルト一部含み
3. 黒灰色シルト瓦砾塊含み
4. 淡黄灰色シルト小礫少量含み
5. 淡茶黃色土小礫含み
6. 淡茶黃色土小礫含み



第43図 埋鉢 S X10出土状況 (1/20)

基壇北辺石列 S X02

基壇北辺石列 S X02は、解体家屋の基壇北辺石列としても利用されていたのもので、調査で検出できたのは、残存していたその一部である（第40図）。石列の破壊されている部分でも、周辺部と基壇の境に段差があり東西方向に直線的に置かれていたものと解される。西辺石列 S X01は、北部で便所坑により破壊されている部分があったが、他では北辺石列より残りが良かった。また、礎石建物 S B01の西張り出しに沿って当石列も折れを設けて、約50cmの西への張り出しを造り出している（第41図）。この張り出しにより南では一部に漆喰残片の混入した攪乱部があり、それより南には、石列は残存していない（第39図）。使用されていた石は、粘板岩と石灰岩が多く、チャートや砂岩も一部にあった。石の大きさは、30~50cm角のものが多く、二段以上に積まれた痕跡はみられなかった。石列の組み方は、基壇より外側に面を作るようにして、その面と同方向に石の長軸を置くものが多く、なかには基壇側に石の長軸を向かわせたものもあった。裏込めには砂質土を使い、礫は少なかった。裏込め土中には、17世紀の土師器や布目压痕・網目叩きの平・丸瓦などが混じり、19世紀にまで下る遺物はなかった。

埋鉢 S X10 埋鉢は、礎石建物 S B01の南東家屋内から検出された。鉢は瓦器で、口縁部を欠くが、埋没状況から深さ35

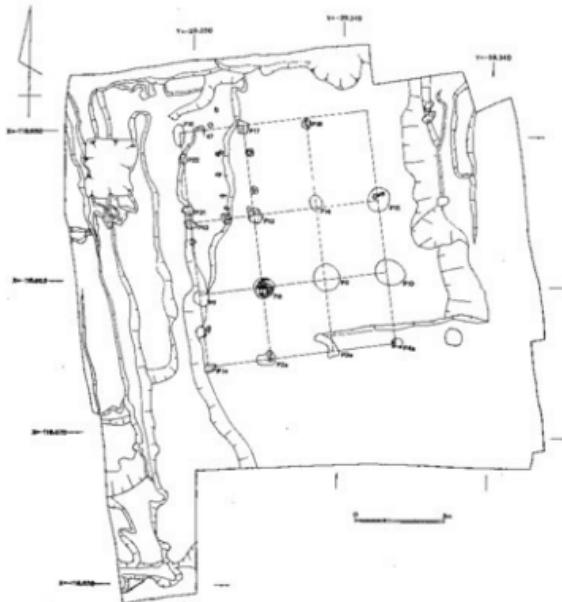
48 検出遺構

～45cm程度であろうと思われる。底径約42cm、器壁厚さ0.8～1cmの製品(図版19-127)で、内面に底から約20cmの高さの位置に黄茶色に変色した部分が巡る。埋設掘形は直径70cm、深さ48cmの円柱形に掘られ、そのほぼ中央に据え置いている(第43図)。埋設鉢内には3層の埋土がみられた。その内の最下層には鎌倉時代の瓦器焼の約四分の一の破片が出土したが、おそらく当遺構廃拙時の混入であろう。用途は便所と思われる。

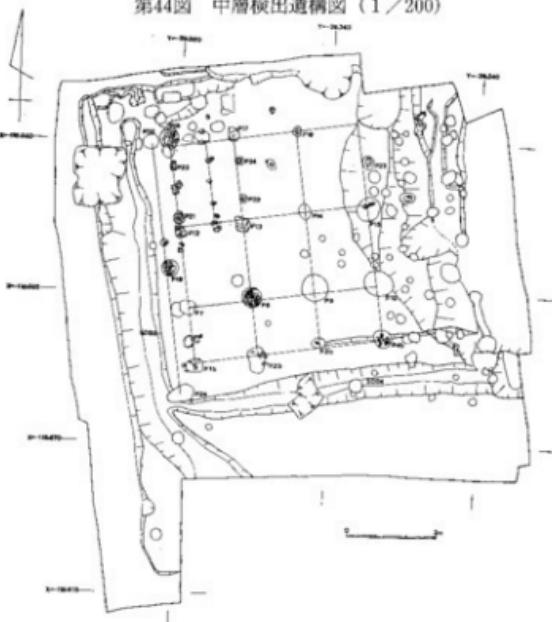
設置時期は明らかでないが、基礎建物S B 01の既存時期とみられる。

基壇東辺 東辺は、基壇中央が6m幅で0.5m幅に張り出している。張り出しは二段になっており、階段施設と思われる。張り出し部の二段の裾部には拳大の石が並び、階段に使われた石の栗石と思われる。

基壇外の施設 東辺基壇の張り出し北辺より北東方向にのびる集石溝が一条検出された。この方向には、明治28年の絵図(第36図)に嚴窟の滻から引かれた池



第44図 中層検出遺構図 (1/200)

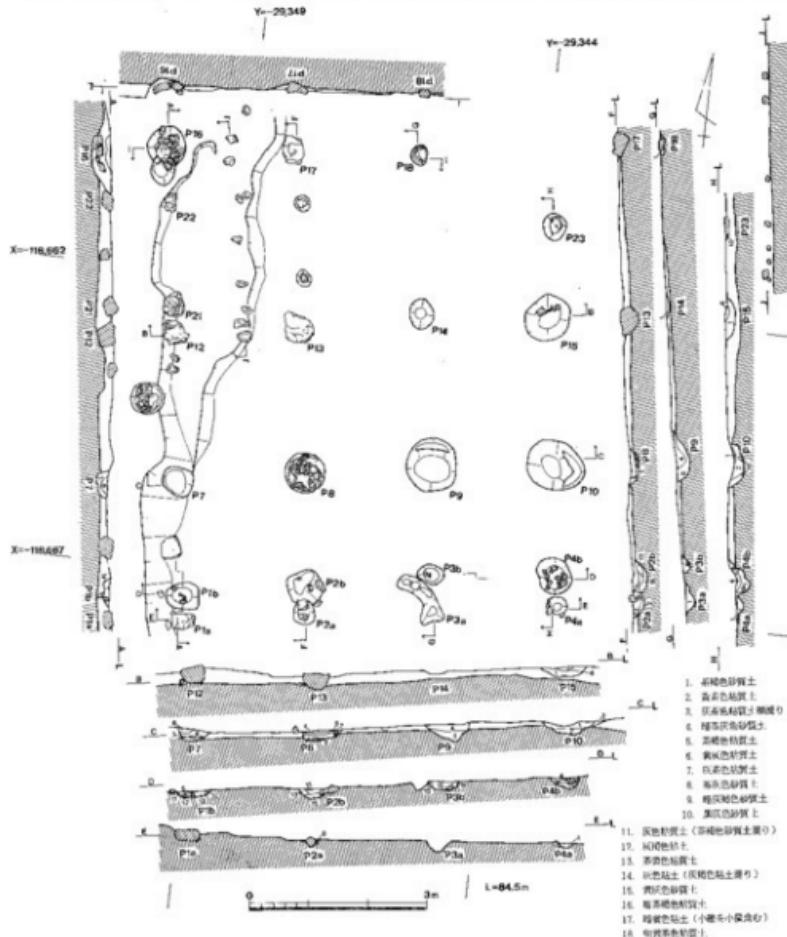


第45図 下層検出遺構図 (1/200)

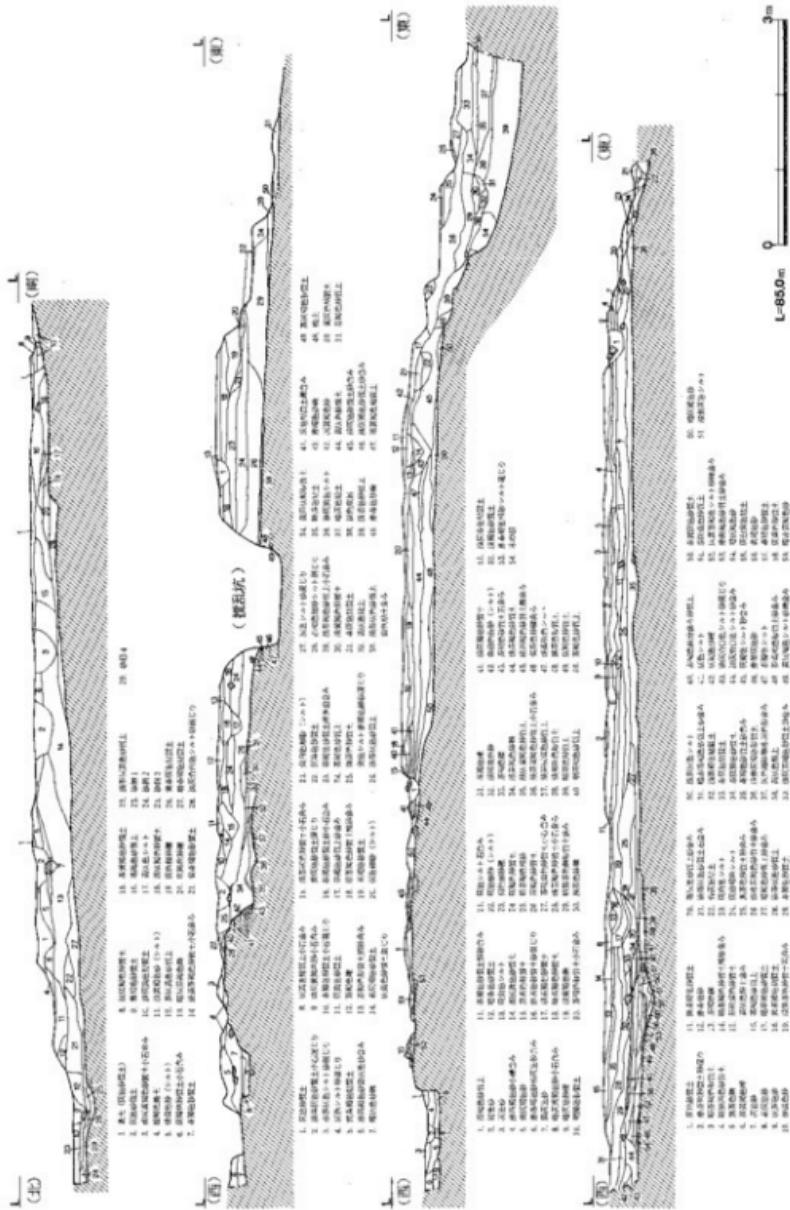
があり、この池に引いた排水暗渠ではないかと思われる。溝内からは、16世紀の土師器皿が出土し、安土桃山時代の施設と考えられる。この他、基壇裾の石列より外側の一段低まった周辺部からは、19世紀後半から20世紀前半の陶磁器類が出土している。出土層は、3～4層の薄い砂層からなる。解体家屋の建設時期を考えるのに重要な。

中層遺構 上層遺構から4層の版築層を除去した段階で検出した。遺構には、礎石建物とその基壇、基壇の西辺を巡る溝がある（第44図・図版16-（2））。

東西3間南北3間が確認されたが、基壇東辺の崩壊が激しいことから



第46図 中・下層検出礫石建物 S B02-A・B (1/100)



第47図 調査地断面図(1/80)

ら、東に延びる可能性がある。南北約7.5m東西6.5mの規模をもつ。柱間は、東西は等間隔であるが、南北は北1間が最も長く、南の2間分は短い。礎石は北部でよく残り、他の大部分は抜取り跡であったが、P-12・P-13・P-17などに原位置に残された礎石を確認した（第46図）。残存した礎石のうち、最も大きいものは50cm角、厚さ30cmの砂岩で、P-13に使われていた。

基壇 基壇の東辺には、上層遺構で検出された東への張り出しではなく、直線的に整形されている。また、基壇上の東辺に、溝状の浅い窪みがあった。その範囲は、礎石建物S B02-Aの東辺柱筋に並行して、北西隅礎石抜取り跡P-16から南西隅礎石P-1aの範囲におさまっている。また同基壇面には大量の土器や瓦器などが散乱し、焼けた面やその上にのった炭を大量に含む薄い層の堆積がみられた。その遺物の大多数は12世紀前半に押さえられ、一部に13世紀までの遺物の混入がみられた。このことから当基壇上の建物は12世紀以後で14世紀に入らない段階の建造と考えられる。

下層遺構 下層遺構とするのは、地山面上で検出された遺構群である（第45図・図版17-(1)）。検出遺構には、礎石建物S B02-Bとそれに伴う基壇、基壇を囲む溝S D03・04の他、性格不明の柱穴群等がある。

礎石建物S B02-B 東西3間南北3間が確認されたが、中層礎石建物S B02-Aと同様、東辺部の基壇の崩壊が著しく、東へさらに延びていた可能性がある。規模は、東西6.2mで中層建物と変わらないが、南北は約7mと、少し小規模である（第46図・図版17-(2)）。この規模の相異は、南辺柱列が北よりにずれていることによる。しかし他の礎石配置は中層と同箇所にあたらしく、抜取り跡や新たな礎石は検出できなかった。柱間は、東西が等間で、南北の南一間が約1.8mと最も短い柱間となっている。

溝S D03・04 基壇の北辺を画する施設として、溝S D03がある。この溝は、幅約1.2m、深さ0.1mで、北端は礎石建物の北辺位置から始まり、南辺位置まで直線的に南下し、南東へ折れて南進する。溝S D04は、溝S D03から分かれて礎石建物の南辺に沿って西へ延びる溝で、幅80cm深さ10cmを測る。両溝とも基壇の裾に掘られたもので、溝の基壇側の肩が、反対側の肩より4～5cm高くなっている。

基壇 基壇は溝により区画され、南北10m、東西10m以上の規模をもつ。ただし、東辺の崩壊が著しい。東辺は、参道からつながる正面に当たるが、基壇上面との比高差が1m前後もあり、谷地形になっている。基壇の崩壊状況は、この立地に起因していると考えられる。また、この斜面には、性格不明のピット群が検出されている。（岩崎）

6 出 土 遺 物

当調査では、基壇の版築層を中心に、基壇裾に設けられた石列裏込めや礎石抜取り跡、溝埋

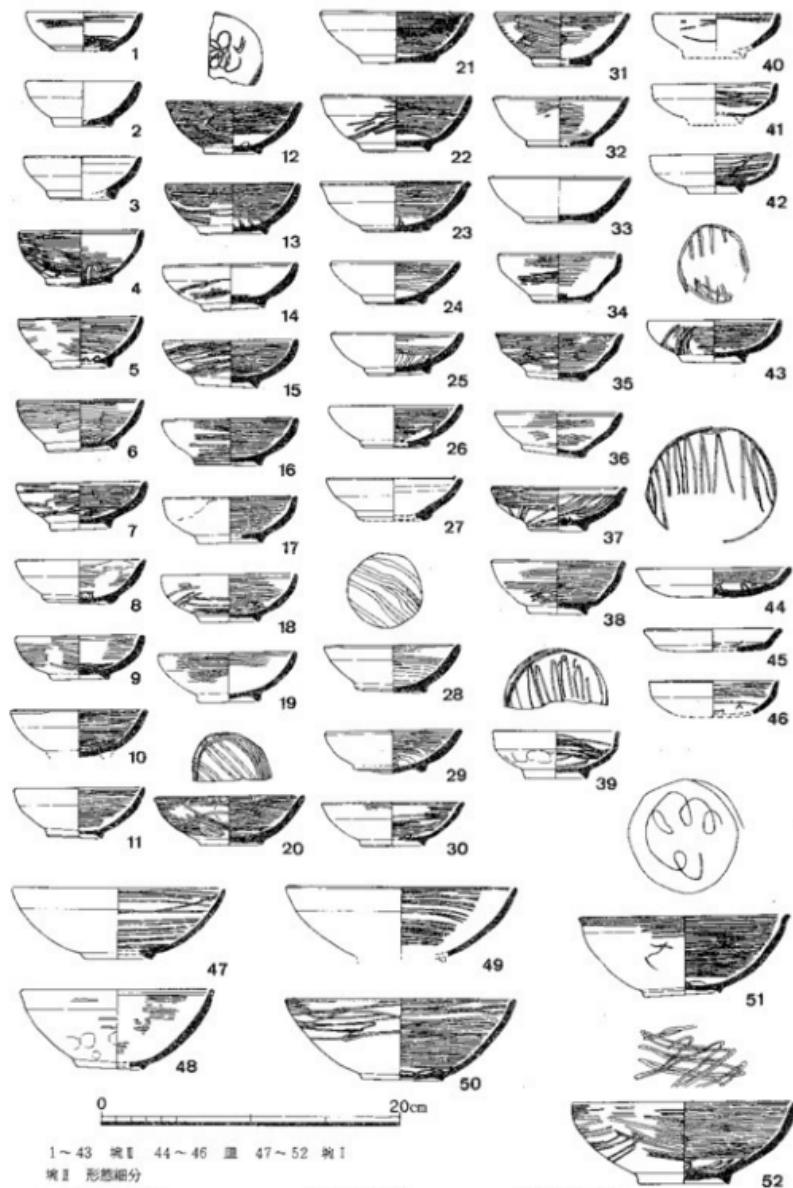
52 出土遺物

土などの他、基壇外辺などから、多くの遺物を得た。出土遺物には土師器・瓦器・白色土器・須恵器・灰釉陶器・国産陶磁器・輸入磁器・弥生土器・瓦・貨幣・石製品・獸骨・金属製品・墨・木製品・墨書き土器などがある（付表-5・6）。このうち最も多いのは土師器で、器形は皿（第49図）であった。次に多いのは瓦器（第48図・図版18・19）で、器形は塊である。ここでは、主に瓦器塊と土師器皿について観察し、その他は一括して概観する。

瓦器 瓦器には、塊・皿・鉢・羽釜・鍋がある。塊は、法量によって、大塊=塊Iと小塊=塊IIに分かれる。出土總破片数では、塊Iが323片で塊IIが288片という数値が得られ、ほぼ対等であるが、実測可能な数値は塊IIが圧倒的に多い。いずれにしても、塊IIの多さは一般集落の比ではない。すなわち、この数値は遺跡の特殊性を語り、長法寺境内という所在地から、まさに寺院に起因した特殊性ということが出来る。さて、この瓦器塊を観察するにあたり、調整手法では内面の暗文の太さ・密度・見込みの施文法、外面磨きの有無と粗密、形状では口縁部の形態、高台の有無と形態について注意した。その観察結果は付表-3・4にまとめた。観察点の表記は以下の通りである。暗文の太さを1mm以上と未溝に分け、前者を太い、後者を細いて表した。暗文密度は、単位間に隙間が多いものを粗、隙間が殆ど無いものを密とした。見込み暗文は、その形状で螺旋と鋸歯に分類した。外面磨きは、口縁部のみ粗く肩くものと全体にわたって粗く磨くもの、また口縁部のみ密に磨くものと全体に密に磨くもの、また全面にわたって磨かないものに分けた。口縁部の形態は、沈線があるもの（A）、厚手で端部を丸くおさめるもの（B）、薄手で外輪が強く端部を尖り気味におさめるもの（C）に分けた。底部は、高台の有無と高台の断面形態により5類に分けた。この成果からは法量分布図（第53図）と共に、大部分の瓦器塊が12世紀前半代に位置付けられる。橋本氏の編年では、II-1期前後に相当しよう。

土師器 土師器には、皿・壺・盤がある。なかでも皿が圧倒的に多い。その法量分布は第52図に示した。形態から、皿をA・D（第49図5）・E（同図6・7）・F（同図8～10）・G（同図14・34・35）・H（同図1・2）・J（同図3・4）・K（同図11～13）・Pと、糸切り底のロクロ成形土師器皿（図版20-4131～134）に分ける。さらに皿Aは、口縁端部を外反させたd（同図40～80）、口縁端部を幅狭く撫でて丸くおさめたf（同図36～39・82～84）、口縁ナデによる屈曲が少なく内湾し、端部を丸くおさめたg（同図15～33・第50図88～105）、口縁ナデが明瞭に2段に施されたように見えるh（第50図106～116）に細分できる。このうち皿H・J・Kは上層遺構から出土したもので、3・4・13は集積溝に、1・2・11・12は表層に包含されていた。前者は16世紀、後者は17世紀に比定出来よう。これらの形態を除いた法量にはまとまりが認められ、大部分は形態や調整の特徴から、瓦器塊同様12世紀前半代に捉えられる。

その他の遺物 特微的な遺物としては、軒瓦（第50図125・図版21-125・136～138）と鬼



1~43 残Ⅰ 44~46 残Ⅱ 47~52 残Ⅲ

残Ⅰ 形態細分

A形態 - 1~23

(径高指数 32.1~44.0 平均 36.4) (径高指数 30~40 平均 33) (径高指数 32.2~39.7 平均 36.5)

B形態 - 24~33

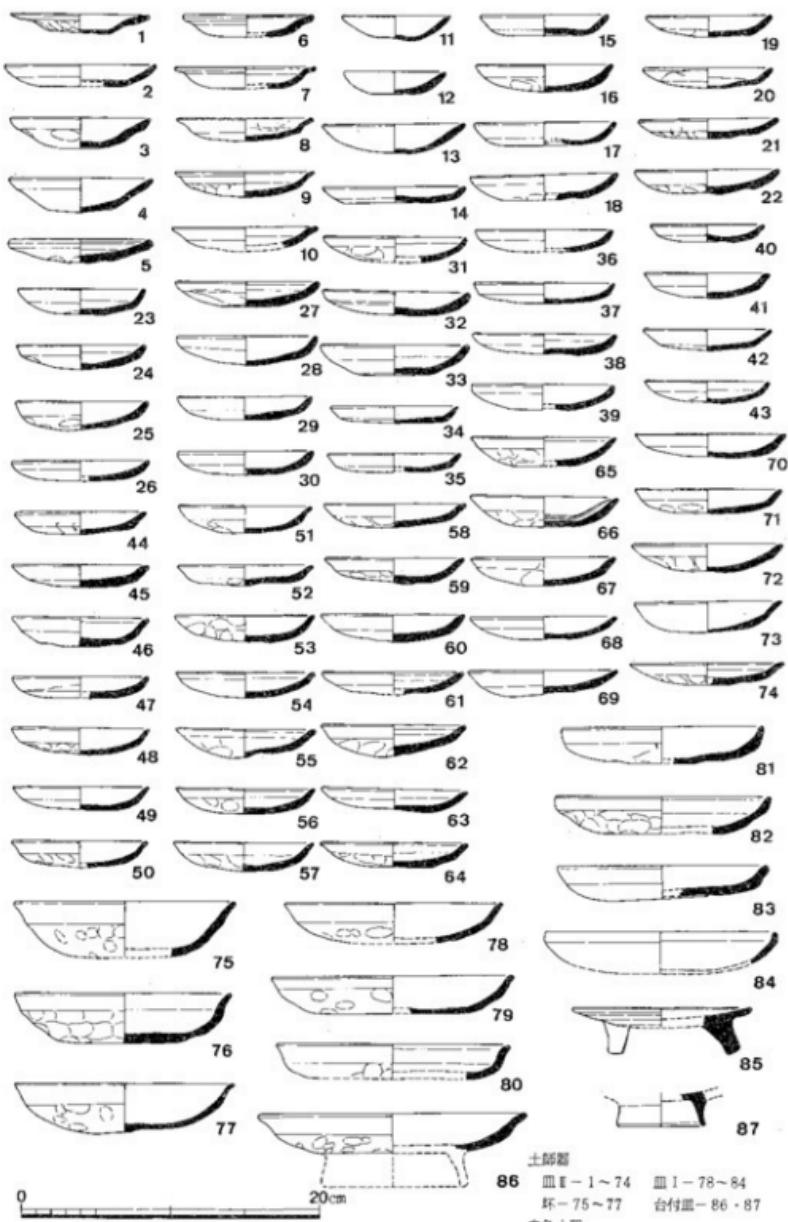
(径高指数 22.7~37.5 平均 31.3)

C形態 - 34~38

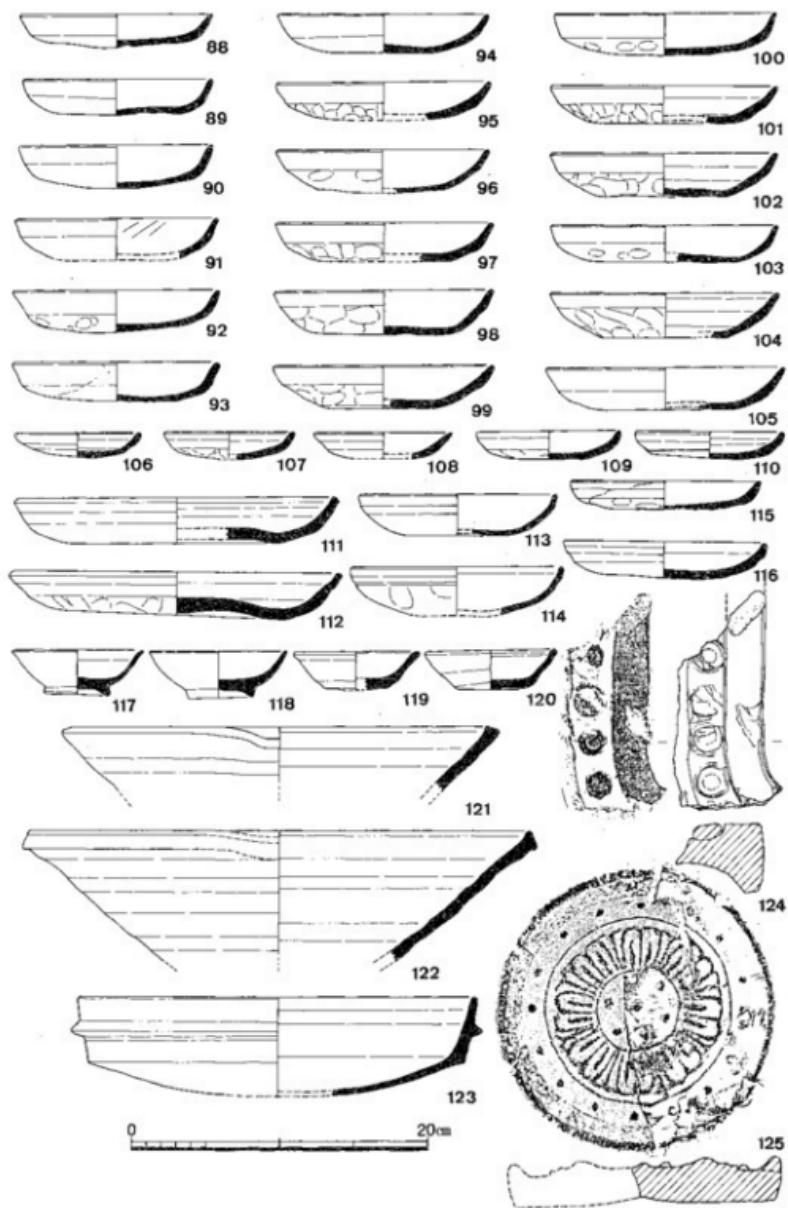
(径高指数 32.2~39.7 平均 36.5)

D形態 - 39~43

第48図 瓦器塊・皿実測図 (1/4)



第49図 土師器・白色土器実測図 (1 / 4)



土師器 盆—88~110. 115. 116 (I—88~105. 115. 116 II—106~110) 环—113. 114 盘—111. 112

須恵器・灰陶器—117~122 (环A—117~119. 120 环B—117. 118 片口盆—121. 122)

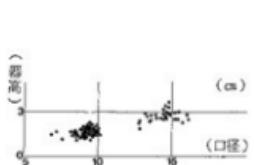
土師器 瓶—123 鬼瓦—124

軒丸瓦—125 (側面は大阪府枚方市牧野坂窯出土瓦より復原)

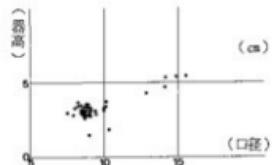
瓦（第50図124・図版21-124）がある。軒瓦のうち、特に平安時代の蓮華文軒丸瓦（第50図125・図版21-125）は、枚方牧野坂瓦窯や京都西寺・興隆寺等で出土したものと同範の可能性があり、興味深い。また出土量は少ないが、繩目叩きのある平瓦や丸瓦もある（図版23-(2)91~96）。特殊な遺物としては、金箔を巻いた製品の残片があるが、これは用途・器形とも不明である（図版20-(3)）。玩具その他の遺物には、碁石（図版22-(3)156~159）や球形の小石（図版22-(4)152~155）、磁石（同図版148・149他）等がある。石製品のうち、磨製品が1点ある（第51図・図版22-(3)160）が、弥生時代の石器なのか他の製品なのか明確でない。石製品には、他に、滑石製の羽釜か鍋の底部片がある（図版21-140）。墨は2片出土しており、両者とも両面に「イロハ」文字が漢字とカタカナを対比させて装飾されている（図版22-(1)）。弥生土器には、壺・壺・水差しなどがある（図版23-(3)）。文様は櫛描文を主としており、直線文、刺



第51図 磨製石器（1/2）



第52図 土師器皿法量分布図



第53図 瓦器壺・皿法量分布図

付表-3 瓦器小壺の形態・調整統計表

器種	出文大きさ	出文裏裏	見込み文	外観	くびき	寸法	口縁部形状	蓋	身	足	耳	柄	単位	平均		
壺	137	97	234	134	75	455	4	8	6	12	4	9	0	11	84	
皿	54.7	45.2	100	59.2	100	55.5	0.6	1.0	4.8	8.0	0	0	0	0	80.1	
蓋	6	6	5	4	2	6	1	3	0	0	2	6	4	2	10.0	
身	100	0	100	66.7	25.0	100	66.7	33.3	16.7	30.0	0	0	0	0	100.0	
足	120	97	230	118	77	180	0	0	15	5	72	0	0	0	0	100.0
耳	55.9	44.1	109	49.5	26.5	100	42.0	30.0	5.5	30.0	0	0	14.4	100	55.9	
柄	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

付表-4 瓦器大壺の形態・調整統計表

器種	出文大きさ	出文裏裏	見込み文	外観	くびき	寸法	口縁部形状	蓋	身	足	耳	柄	単位	平均	
壺	137	121	3	0	244	45	300	2	0	1	100	2	2	0	11
皿	45.6	54	9.4	0	100	18.5	30.7	6.8	0	0	100	28.6	28.6	0	30.0
蓋	323	266	3	1	653	多數	多數	2	12	2	100	2	10	6	35.3
身	52.5	46.8	9.5	0.2	100	—	—	—	—	—	100	8.0	40.0	30.0	32.5
足	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	100	12.0	12.0	12.0	12.0
耳	2	2	2	1	1	5	4	2	5	11	2	1	5	1	3
柄	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	100	12.0	12.0	12.0	12.0

付表-5 その他の遺物出土量統計表

器種	出文大きさ	出文裏裏	見込み文	外観	寸法	実	解	石	器種		
									大	中	小
壺	2	2	2	1	1	5	4	2	5	11	2
皿	1	1	1	1	1	4	2	5	11	2	1
蓋	3	2	2	1	1	—	—	—	—	—	1
身	1	1	1	1	1	0	4	2	5	11	2
足	1	1	1	1	1	—	—	—	—	—	1
耳	1	1	1	1	1	—	—	—	—	—	1
柄	1	1	1	1	1	—	—	—	—	—	1

付表-3・4は、観察可能な破片

全てを対象とした。

付表-5の丸器・十角器縁部は、

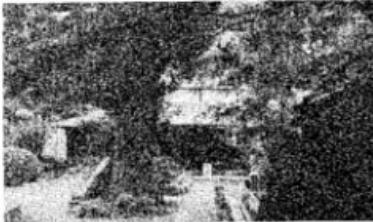
1/4以上を扱った。

突文等がある。形態から近江の影響がみられる（図版23-(3)50・54・55）。文様と形態から第IV様式を主とする時期であろうと思われる。輸入陶磁器には青磁と白磁がある（図版23-(1)41・42・44～47・49）。木製品には、横櫛がある（図版22-(5)146）。貨幣は、寛永通寶が主であり、素材には、銅銭（図版22-(6)98～117）と鉄銭（同図版118～120）がある。銅銭には古寛永と新寛永があり、裏面に「元」または波文があるものがある（図版22-(2)）。国産陶器には、信楽の壺鉢（図版23-(1)48）や瀬戸の皿（同図版43）などがある。白色土器には、三足盤（第49図85・図版20-(1)85）がある。墨書き土器には、瀬戸の碗底部高台内に「開」の墨書きのあるもの（図版21-139）や土師器皿外面の口縁部付近に墨痕のあるもの（同図版135）がある。また外面に蓮弁を線刻した土師器皿（図版20-(4)128）や、穿孔した土師器皿（同図版129）もある。皿Hには、内面に赤色顔料の付着がみられるものもある（同図版130）。鉄製品は、篠り金具と思われるもの等があるが、ほとんどが釘（図版22-(5)）で、それは長さにより14cm前後の大型（122～125・128・143）と6.5cm前後の小型（130・131・141・144・145）に分けられる。この他古墳時代の遺物もある。（岩崎）

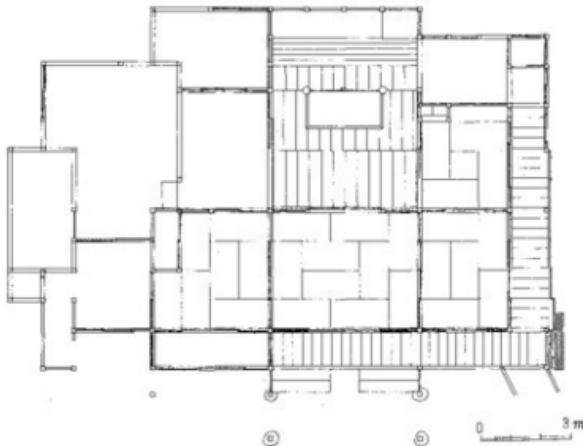
7 長法寺の建築と建築遺構

(1) 解体された本堂

1989年秋に解体された本堂は東面し、京間で正面（桁行）6間、側面（梁行）3間の寄棟造の身舎の四周にしころ庇をめぐらせたもので、



第54図 長法寺本堂前景（解体前、東から）



第55図 解体建物平面図（右が北、1/200）

西側に庫裏を付属させている。屋根は棟瓦葺きで、正面中央に深い向拝を設けていた（第54・55図）。ジェーン台風のときの倒木のために破損して大修理している。建立年代は明らかでないが、明治28(1895)年の「古社寺調査書」は現状のと同じ建物を描いている。また、明治元年の「社寺取調書」は「梁三間、桁六間、四方壇間庇」としており、これも現状にあう。したがって、明治元年をさかのぼることは確かである。さらに、前記の「寺社改」の建物の記事も若干不確かではあるが合致する。したがって文献的には天明ころまで遡らせることはできる。しかし、様式的には、その判断は難しいが、幕末ごろ、すなわち19世紀前半期のものとみられる。因みに、本堂前方にたつ地蔵堂は昭和41年に建てかえているが、その前の堂は棟札によると嘉永5(1852)年に建ったものであった。その時の大工棟梁は上植野の久左衛門で、本堂もおそらく同人の手になるものであろう。なお、内陣の宮殿（厨子）は軒唐破風に禅宗様の組物、本蓋殿、欄間彫刻などをもったもので、江戸中期はくだらない、およそ17世紀末頃の作である。

平面は基本的には六間取の方丈型で、正面である東と北に半間幅の切目縁がまわる。内部は正面表側中央を10畳とし、その奥を板敷の15畳大の内陣仏間としている。ただし仏間は後方部分を拡張しており、当初は奥行き3間の15畳大の広さであった。正面右方すなわち北縁に接しては前後に6畳間と4畳半の間があり、後者には西寄りすなわち後方に床の間と違い棚がついている。正面左方は前後に8畳間（現状は一部改造し7畳大間となっている）と6畳間がならび居室となっている。そしてその横に幅2間半の土間が付属し内玄関、厨房としている。各室の境には内法に差鶴居をとおし襖をたてる。ただし仏間は内法を一段他より高くし、中間を広くして三柱間に分け、両脇間は腰板壁の上に意様に紙障子を引違にたて、中間には換斗本を脇間に引込めるようにして建てている。内法上はオサ欄間である。また床の間のある4畳半の座敷と前室の境にも松の透し彫りの欄間がある。仏間では後寄りに来迎壁をつくりその前に簡素な須弥壇を構え、上に前記の宮殿を脇仏を安置している。天井はすべて棹緑天井で、軒は一重である。柱は角柱で、来迎壁の両脇柱だけ丸柱とする。

以上のように、この本堂は一つの棟の下に本堂、庫裏、客殿の三つの機能をまとめたもので、寺様のすくない末寺クラスの寺院が、棟数の節約を図るためによく採用した形式の建築である。

(2) 発掘された建築遺構

本堂下には上層、中層、下層の三層に建築遺構が検出されている。ここでは各層の遺構の建築に関する状況とそこから推定される建築の性格や構成についての検討考察をおこなう。

上層 現本堂にかかるものである。発掘調査以前に礎石が抜き取られていたが、その抜痕穴から柱位置を確定することはほぼ可能であった。それらは上部の軸部の構成と対応するものであったが、背面すなわち西側面においては仏間およびヘヤの側壁線より内側の床下位置において石敷の側溝や現状では使っていない礎石列が出ている。これらのこととは背面がある時期に半間拡張されたことを物語っている。また正面の縁柱の礎石には現状と若干食い違うものも

みられる。こうしたことから礎石をほとんど動かすことなく一度建替えが行われたらしいことを推測させる。上層の礎石群が最初に据えられた時期は判然としないが、間取りの形式や柱間寸法は近世的なものである。現宮殿が本堂と同時に作られたとすれば、最初の建立は17世紀後半期とかんがえられる。

中・下層 南北三柱間、東西三柱間の構成で16個の礎石あるいは礎石痕の穴が検出されている。南端列では礎石穴が二重にややすれながら切りあっている。このことからここにも二期の遺構があることがわかる。その中の後期にあたるものを中層遺構とする。中層遺構は柱間は東西方向は三柱間とも7.0尺、南北方向は南から8.0尺、8.0尺、10.0尺をはかる。すなわち東西21.0尺、南北26.0尺の規模をもつ建物となる。下層遺構は南端柱列が中層遺構のものより1.5尺北に位置している。すなわち、その東西長さは変わらないが南北方向は南から6.5尺、8.0尺、10.0尺、総計24.5尺となる。下層遺構は南と西において側柱列から約5.0尺外側に並行して走る溝を伴出させている。また、北辺においても北柱列から約7.0尺はなれて並行して走る溝様の遺構または段差がでている。したがって中下層を形成する建物の南、西、北の三辺の外郭線は確定できる。しかし、東辺には多くのピットが検出されており、その中には礎石痕と解せるくぼみもあることから、東方にさらに一柱間分が設定できる可能性も残っている。ただ、この部分は地面が削り取られ、またいくぶん上層が東側に崩れているようで、明確に他と対応するような柱は、東南隅のものを除いてさだめがたい。

床面は固められておらず、東受けあるいは根太受けと考えられる石が一部に残っているので、床を前面に張っていたものと推定できる。またやや不確かではあるが、周囲には縁束石と考えられる石列があり、建物の周囲を縁が回っていたようである。

(3) 中下層遺構の建築

さて、つぎに中下層遺構を構成する建築の性格を考えなければならない。そこで問題になるのが上記の柱間寸法である。すなわち、東西方向は7尺等間だが、南北方向は北端間が最も広く、下層建物においては三柱間とも寸法が異なることである。本堂下層の遺構なので、常識的にはこれらも仏堂遺構と見なしたいところである。そして東西、南北の両辺とも三柱間であるので、三間仏堂と解釈できればまさに具合がよい。しかし、この柱間寸法構成は、この遺構を単純に仏堂跡と理解することを許さないのである。この建物は、地形や敷地の造成状況などからみて、現本堂と同様

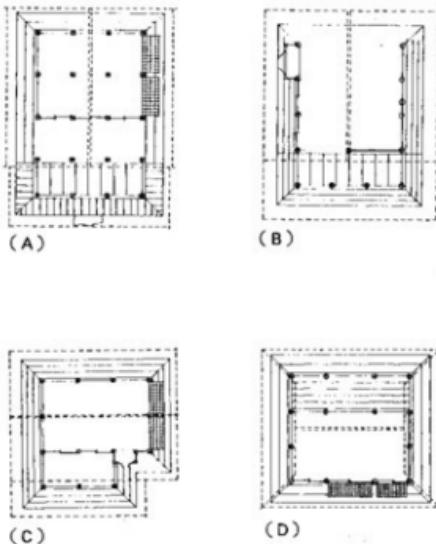


第56図 想定復原外観図

に東を正面としたものと考えるのが妥当である。けれども東正面とすると、正面からみて三柱間のうち、いちばん大きな柱間寸法をもつのは、中央間ではなく北端間であるという、通常の三間仏堂では例のない構成になってしまう。通例は三間仏堂の場合、中央間は両脇間より広いか、すくなくとも同寸法をとる。下層遺構のように三柱間とも長さが異なるような仏堂はまず考えられないものである。では南を正面にすればどうか。この場合は正面の三柱間は等間であるから、柱間寸法の構成からする限りはありえないことではない。しかし、南辺縁を走る溝はまっすぐにつき、階段がつくられていたような形跡も検出されていない。遺構の状況は、南を正面とする考え方を支えないものである。

以上のことから、中下層遺構を純粹の仏堂址とみる考えは捨てなければならない。それでは、どのような建物であったのだろうか。柱配置をみてまず考えられるのは、三間社流れ造りの建物である。すなわち神社本殿ということになる。この場合、北が正面になる。表21尺、奥行26尺というのは、三間社本殿としてはきわめて大きく、この規模に匹敵するのは愛媛県大三島の大山祇神社本殿くらいのものである。そのような大社がまったく忘れられてしまうとは考えられない。従って、神社本殿説はおのずから否定されねばならない。やはり、寺院関係の建築とみなすのが妥当であろう。ともかく遺構に即して可能な建築形態を引き出してみよう。

まず、10尺幅をもつ北面の通りであるが、これは広縁庇と考えたい。この部分を庇縁と推定する根拠は、①柱間が他の二間の8尺より広いこと、②北端の通りの柱礎あるいは礎石痕が他に較べていくぶん小振りのようだからで、それはあまり大きな荷重を受けない庇柱の礎石だからではないかと考えられることである。さて、北辺を庇部分と仮定すると、おのずと屋根の棟方向は東西行と想定できる。なぜなら、10尺通の北辺を庇として屋根の主体に無関係の部分として除いてしまうと、棟を南北にしたのでは棟の長さより梁幅の方が



第57図 絵巻物に描かれた庵室の
想定される平面図

長くなってしまうからである。このような形の屋根形もありえないわけではないが、かなり不自然である。ところで先述したように、この建物の正面は東側と考えられるのであるが、そうとするとこれは妻入の形式をとることになる。

以上の推測をもとに試みにこの建物の形態を想定してみよう。屋根は葺瓦がほとんど出土していないことから、板葺きであったろう。桧皮葺ということも考えられるが、桧皮葺の場合は棟に小振りの瓦を積むが、そうした瓦が出土していないから、その可能性はすくない(第56図)。

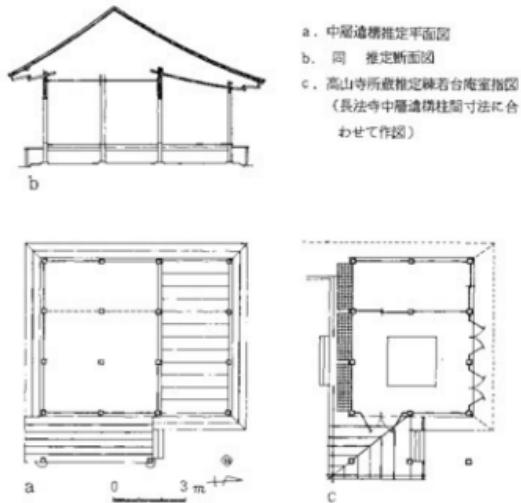
ここに推定したような建物は、現存する中世建築遺構には見ることができない。しかし、中世の僧伝系統の絵巻物には、しばしばこれとよく似た建物が画かれている(第57図)。それは当時の遁世僧たちが住んだ庵室である。例えは『融通念佛縁起』にみえる(A)大原の良忍の庵室は三間に三間の大きさで板葺きの切妻屋根をもち、妻前面に庇屋根を流して一段低くつくられた吹き放ちの前縁をおおい、外回りには半蔀を装置し四方に濡れ縁を回らせている。『法然上人絵伝』における(B)黒谷の法然の庵室も殆ど同じ構造になるが、ここでは外回りの建具は舞良戸であり、奥には付書院が造られている。同じ絵巻の(C)黒谷慈嚴房の庵室は二間に三間の大きさで、切妻板屋根の一方を延ばして平側に広縁らしいものをつくっている。ここでは外回り建具には紙障子が用いられている。また同じ絵巻の(D)二尊院の描写の中には網代の垣根でかこんだ一画のなかに入母屋造りの屋根をもった三間に三間の庵室風建物がみえる。

これも一面を吹き放ちの広
縁とし、舞良戸と半蔀を装
置している。

こうした庵室の構成を当
遺構の推定復元建物の構成
とひきくらべてみると、双方にはかなりの類似点をみ
いだすことができ、これを
庵室遺構とみることがある
がち不当ではないことが了
解されるであろう。

(4) 石水院と高山寺縁起

中世の庵室建築の実際お
よびその内容については、
石水院と高山寺縁起が参考
になろう。石水院は京都市
右京区梅ヶ畠尾の高山寺



第58図 中層遺構の復原図・練若台庵室指図(約1/250)

内にあって、鎌倉時代の建築として重要文化財の指定を受けている。その建立年代、建築の性格については諸説がある。以前は、貞応2(1223)年に明惠上人が後鳥羽院の加茂別院を賜り、当寺に移建したものとされていた。しかし、近年では『高山寺縁起』により、承久の乱(1221)の時、高山寺から乱をのがれて移ってきた明恵のために加茂神主能久が加茂北方の地に仏光山と称する小寺院を造造し、乱後、明恵が高山寺に帰山するにあたってその一部を移建したものと考えている。高山寺縁起によると、仏光山より移建した建物は禅定院であって、安貞2(1228)年の洪水で、石水院が破損したので仏光山より移して石水院跡に建てたという。明恵はこの禅定院で生涯を終えている。この禅定院を高山寺縁起は三間四面桧皮葺とし、持仏堂、二問所、学問所などの室名を記し、全体をさして庵室とも称している。ただ、現在の石水院はこの記載と合致させにくいところがある。そこで杉山信三氏は、現在の石水院は高山寺縁起にみえる東経藏であるとする説を提出している^⑨。しかし、禅定院が経藏を兼ねるようになったかもしれないのであり、禅定院である可能性も残されているのである。

もしそうであるとするならば、同時代資料が庵室といっているのだから、石水院はまちがいなく鎌倉初期の庵室遺構の姿を見せてくれるわけである。もっとも、石水院は明治22年に移動しており、昭和5年の解体修理でも変更があったというから、当初の姿がどれだけ伝えられているのか判然としない。藤原義一氏によると、現状のこけら葺は後の改造によるもので、以前は板葺であったかもしれないという。高山寺縁起は禅定院について、明恵の簡素を重んじたいくつかの庵室の中にあっては「出室之構」のものであったと記しているから、並みの庵室よりは立派なものであったようである。そこで、石水院をすこし小さくし、屋根を切妻造りの板葺に変えれば、普通の庵室の姿が具体的に浮かんでこようというものである。

高山寺縁起はまた、明恵の他の高山寺の庵室のことを述べている。すなわち、練若台、禅河院、峰庵室などである。練若台は三間一面の草庵、禅河院は四方を築地で囲み、峰庵室は懸造りの二間草堂と記されている。このうち練若台については、その指図と考えられるものが、杉山信三氏によって紹介されている^⑩。この建物は東西4間、南北2間で、東1間を北半分を土間、南半分を板間にした庇としているから、縁起に云うように三間一面である。身舎の3間は東西に区切り、東の内部に方形の禅床をおいた2間四方の室と西端の1間に2間の室とにわけている。縁の有無は明確でないが、南と東には高欄が画かれていてあったことが知られる。南面は各柱間とともに蔀をつり、北面は格子造戸と開戸とし、東西面は東面南間に広庇に通じる開戸で開放する以外は板壁で閉ざしている。この図の北面に広庇を付けると、その平面構成は当遺構の推定平面とほとんど同一になる(第58図)。

(5) 結び

以上に考察したように本堂地下から検出された前身建物は、庵室建築であった可能性が高い。そのことをどう理解するかは、前提としてこれが寺の中心となる建築であったのか、そうでな

いかで進ってくる。もし前者であったとすれば、長法寺は中世を通じて庵室を中心としたささやかな寺院であったということになる。そうとすれば庵から寺へという中世寺院成立の一形態を窺わせる遺構といえる。しかし集落の名前にまでなるような寺が、このように小さかったのだろうかという疑問ものである。かつて、十二院があり、それがのちの十二人衆という奉仕集団の起源であるという伝承があるのもあながち無視できない。ただ、近世の寺地はいかにも狭いので、ここだけでは本格的な寺院は営めなかつたであろう。もし、そうした寺地があったとすれば、それはおそらく長法寺の集落辺にであろう。この場合、当遺構はその奥院的なものか、あるいは房または子院のひとつに当たるものと解釈もできる。今後の文献上の追跡と周辺の考古学的調査の進展がまたれるところである。(永井)

8 ま　と　め

当調査では、現長法寺本堂の地下遺構が3時期にわたって検出され、大量の遺物が出土した。検出した建物跡は、遺構の層位と出土遺物から、上層を江戸時代の17世紀代に、中層を平安時代後期の12世紀前半以前に、下層を11世紀以前9～10世紀以後に建てられたといえる。寺伝と地元の伝承から、延喜年間(901～922)千觀内供創建の寺で応仁の乱で焼失、のち再建といわれている。創建時期は、調査成果とほぼ合致する。しかし、応仁の乱前後にあたる15世紀の遺物はごく少量出土したが、焼失を立証するものはなかった。基壇北半部を中心に検出した焼土や炭層は、12世紀代の時期にあたる。また、検出した建物の性格や構造については、現地へも幾度となく足を運ばれた永井氏の精密な考察により、具体的に、しかも立体的に知ることができた。この成果は、当報告書の何にも優る成果報告と確信している。ただ、遺物については、充分な整理ができなかつたのが残念である。別の機会に成果を述べたい。(岩崎)

注1 本書凡例に掲載した方々の他、清水明日香、新庄尚子、久米佐知子、高原英子、竜道子ら各氏、並びに同時期に並行して行われた南原古墳発掘調査の参加者各氏、市史編さん室の百瀬ちどり氏、財団法人長岡市埋蔵文化財センターの白川成明氏など、多くの方々の協力があった。さらに、何よりも長法寺住職川西寂紹氏及び檀家總代はじめ、檀家の方々には多大なご迷惑をおかけし、ご理解・ご協力を賜った。ここに特に記して感謝の意を表す。

2 梅原末治「乙訓村長法寺南原古墳の調査」京都府教育委員会『京都府史跡名勝天然記念物調査報告書』第17冊 1937年

都出比呂志・橋本清一「長法寺南原古墳第3次発掘調査概要」長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第11冊 1983年

都出比呂志・福永伸哉「長法寺南原古墳第4次発掘調査概要」長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第13冊 1984年

都出比呂志「長法寺南原古墳第5次調査概要」長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告

64 まとめ

書』第15冊 1985年

- 3 原秀樹「分布調査」財団法人長岡市埋蔵文化財センター『長岡市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度 1988年

　　京都大学文学部「京都大学文学部考古学資料目録」第2部 1968年

- 4 小田桐淳「祭ノ神遺跡第1次（8 LSJTD-1地区）調査概要」長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第22冊 1989年

- 5 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会『高槻市文化財調査報告書』第13冊 1980年

- 6 土師器皿の形態分類は、岩崎誠「長岡京跡右京第163次（7 ANMK I地区）調査概要—右京六条一坊四町・勝竜寺城・神足遺跡・神足古墳—」長岡市教育委員会『長岡市文化財調査報告書』第17冊 1986年 による分類を継承した。

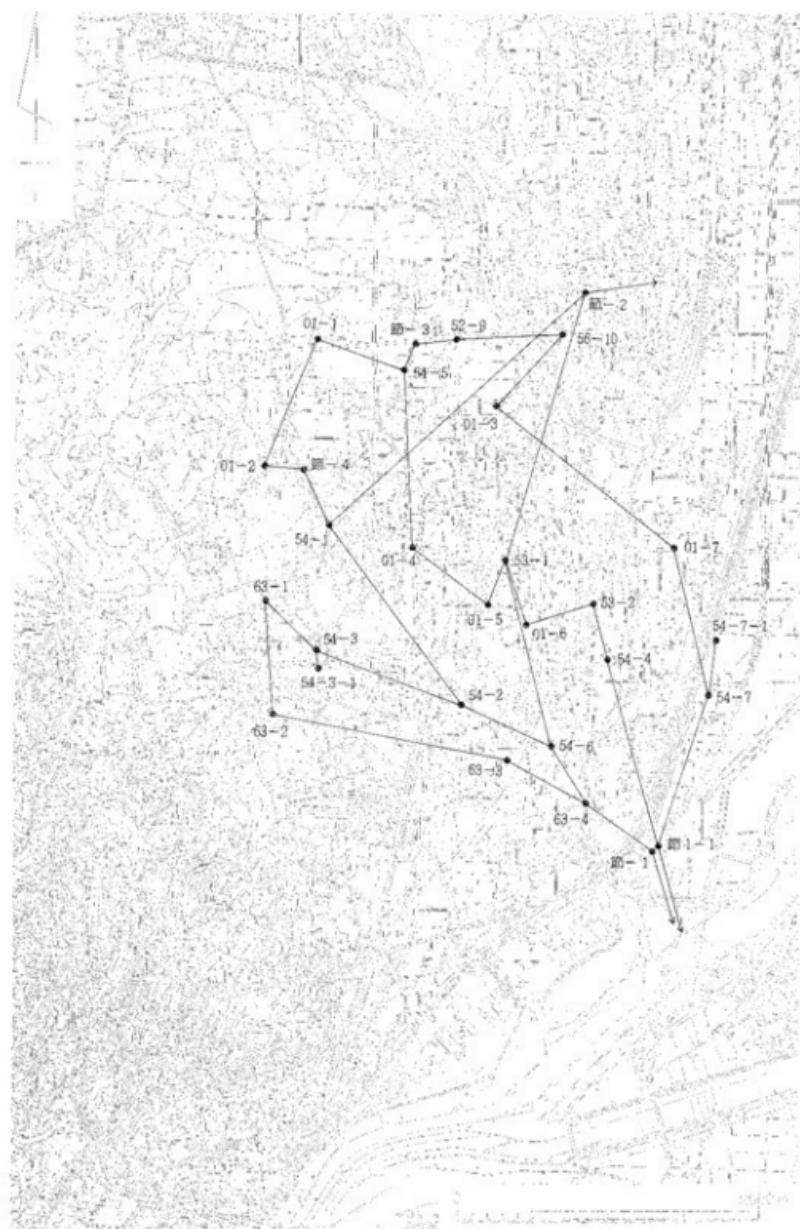
- 7 杉山信三「明惠上人の高山寺庵室について」奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報』 1959年

- 8 藤原義一「高山寺」「京都古建築」桑名文星堂 1944年 115~116頁、石水院の項

付 載 長岡京市埋蔵文化財発掘調査に伴う基準点測量

例 言

1. 本資料は、長岡京市埋蔵文化財発掘調査を実施するために設置した基準点の測量成果に関するものである。なお、長岡京市域では昭和52年度から昭和58年度まで京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの三機関によって設置されてきた。ところが、設置後長時間を経たため、基準点の精度低下や基準点の欠損が生じるとともに開発区域の変動に伴い基準点の不足が生じた。このため、長岡京市教育委員会は二ヶ年で既設点の再測と新点の設置を計画した。本年度はその2年目として市域の北部を行った。
2. 基準点測量作業は、多角基準点測量により国家三角点(III. 西河原、III. 生津、IV. 美豆町)を用い、建設省公共測量作業規定の三級基準点測量を適用し、実施した。測量成果は初年度のものと合せて付表-7に掲げた。
なお、作業は写潤エンジニアリング株式会社が行った。
3. この基準点の座標は、国土調査法施行令(昭和27年)で定められた17番標系によるもので、座標系番号はVI系である。
4. 測点名は、設置年度とその年度の通し番号によって表現したものである。54-3とは、昭和54年度の第3番目に設置した基準点ということである。また、54-3-1とは、54-3から分れた基準点ということである。また、測点のXは南北軸、Yは東西軸、Hは水準高を示す。
5. この基準点の使用にあたっては、長岡京市教育委員会に対して事前に承認を得ること。

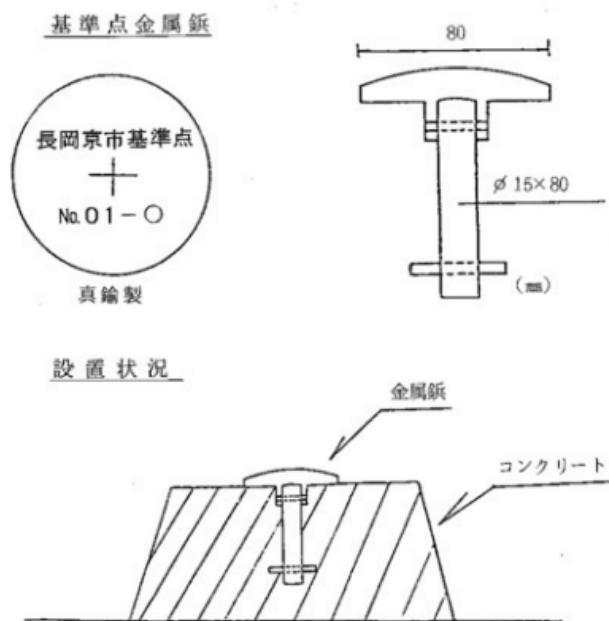


第59図 基準点網図（約1/40000）

付表-7 基準点成果表

点名	X	Y	H	備考
No52-9	- 117,923.844	- 27,926.036	32.842	※
53-1	- 119,373.880	- 27,557.426	42.103	長岡市役所
53-2	- 119,662.689	- 26,988.385	39.673	保栄薬工㈱
54-1	- 119,155.236	- 28,733.575	60.914	長法寺小学校
54-2	- 120,336.804	- 27,873.293	40.906	長岡第四小学校
54-3	- 119,984.164	- 28,820.400	55.358	長岡第五小学校
54-3-1	- 120,102.718	- 28,808.121	40.898	
54-4	- 120,024.624	- 26,890.353	31.489	長岡第九小学校
54-5	- 118,133.110	- 28,236.068	52.983	長岡第二中学校
54-6	- 120,617.349	- 27,277.506	32.538	長岡第三中学校
54-7	- 120,262.645	- 26,250.312	23.973	椿本チーン(㈱)
54-7-1	- 119,882.679	- 26,184.396	12.683	※
63-1	- 119,645.886	- 29,165.932	64.219	長岡市埋文センター
63-2	- 120,404.093	- 29,111.865	64.322	長岡第四中学校
63-3	- 120,712.022	- 27,577.829	38.763	成安女子短期大学
63-4	- 121,010.696	- 27,036.081	18.994	
01-1	- 117,929.387	- 28,829.319	57.226	旭ヶ丘ホーム
01-2	- 118,728.722	- 29,150.508	83.432	西山公園体育館
01-3	- 118,365.082	- 27,615.637	37.153	長岡第七小学校
01-4	- 119,321.077	- 28,181.529	48.854	中央公民館
01-5	- 119,681.111	- 27,697.925	35.582	産業文化会館
01-6	- 119,801.263	- 27,431.787	30.362	神足小学校
01-7	- 119,286.603	- 26,460.254	36.071	三菱電機㈱

※は平成元年度実施分

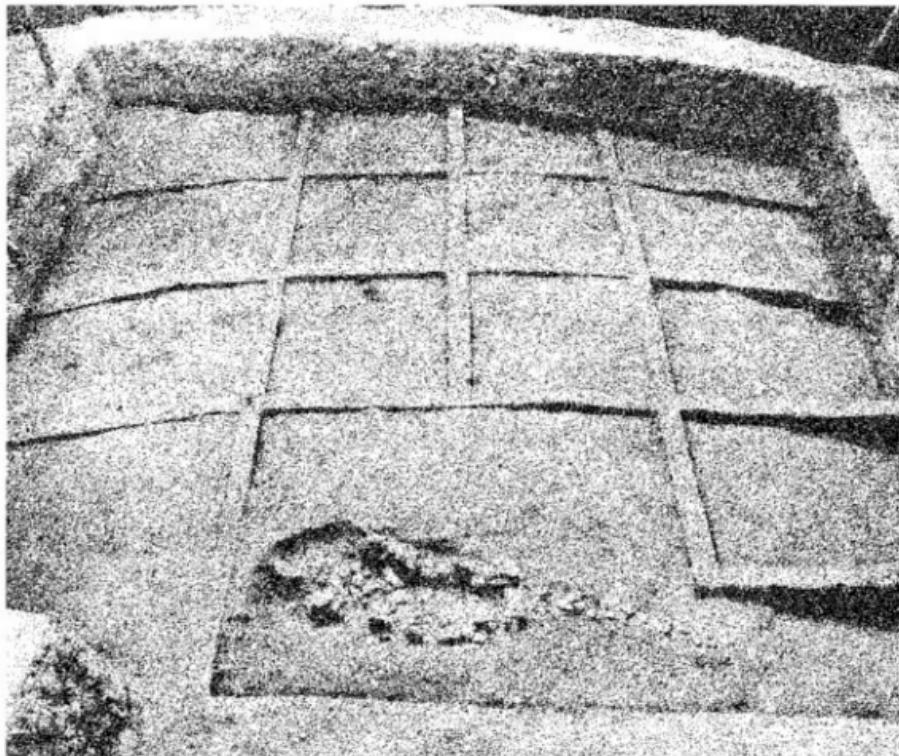


第60図 設置基準点仕様図

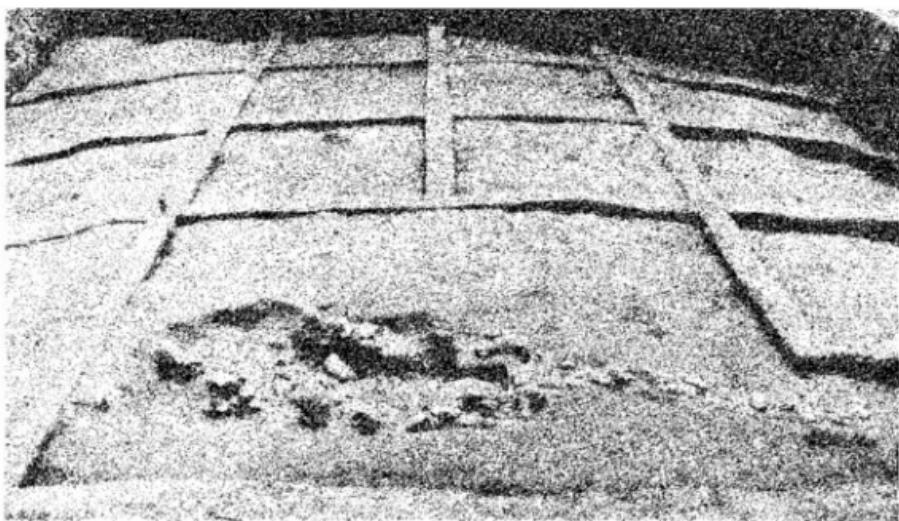


第61図 基準点設置状況（市埋蔵文化財調査センター）

図 版



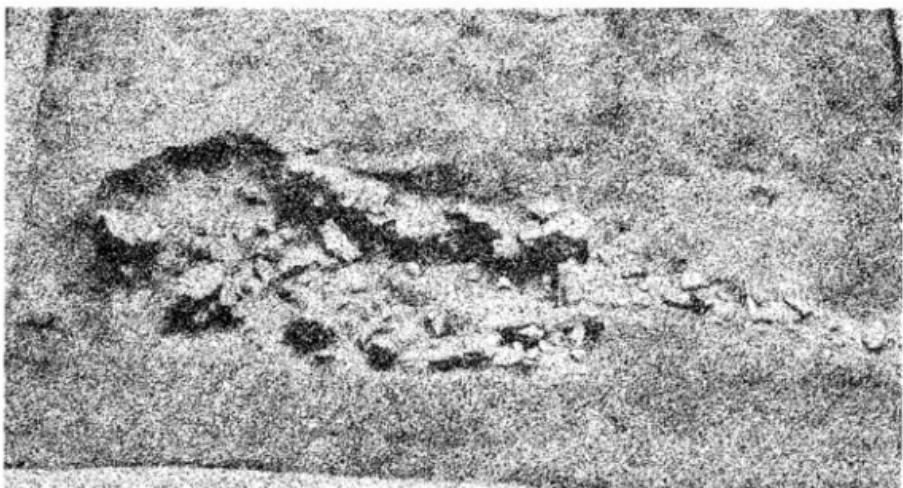
1 調査区全景（北から）



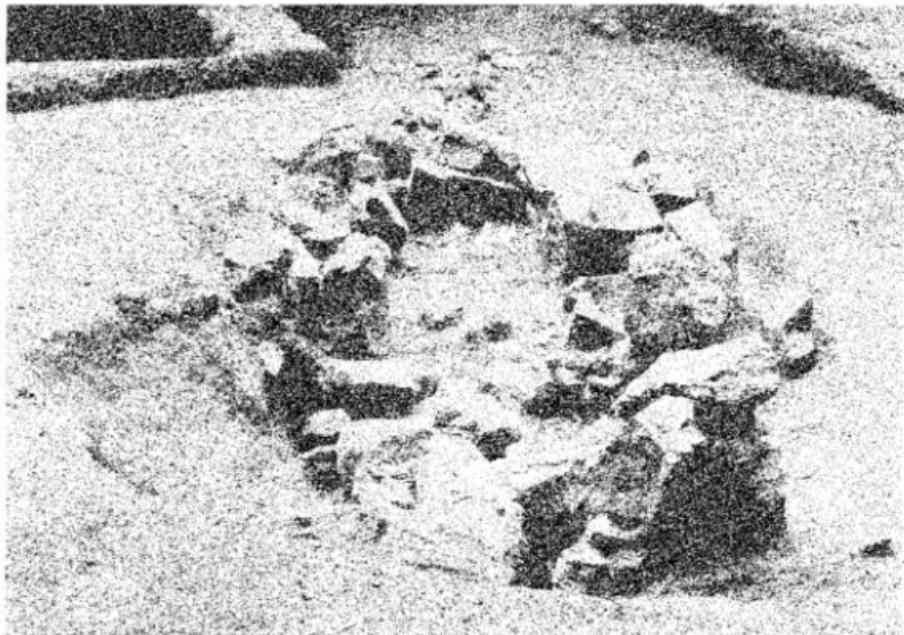
2 調査区全景（北から）



1 小堅穴式石室全景（西から）



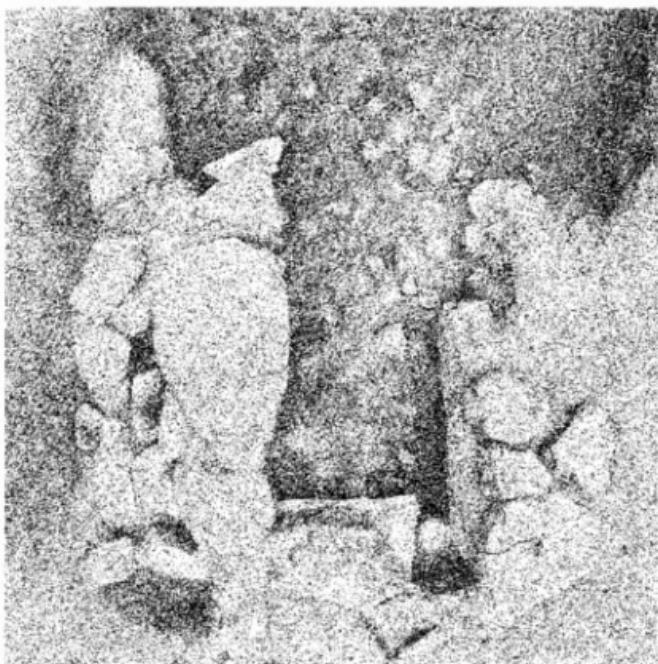
2 小堅穴式石室全景（北から）



1 小竪穴式石室全景（東から）



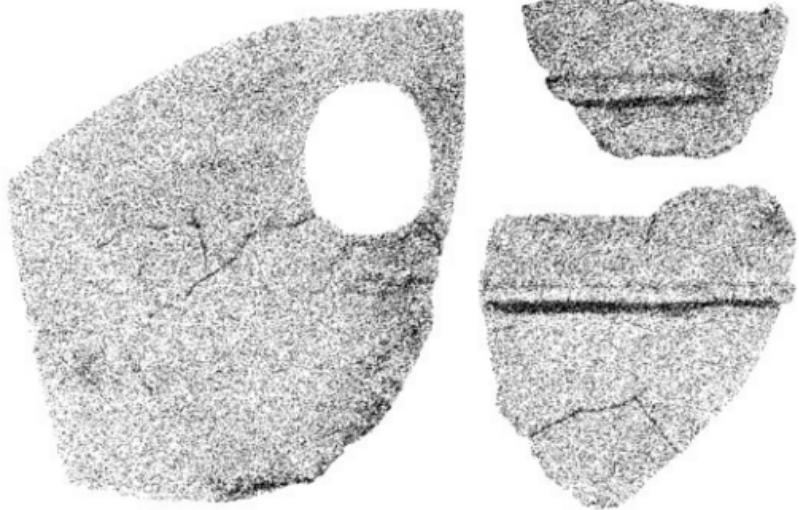
2 小竪穴式石室擾乱上除去後の状況（東から）



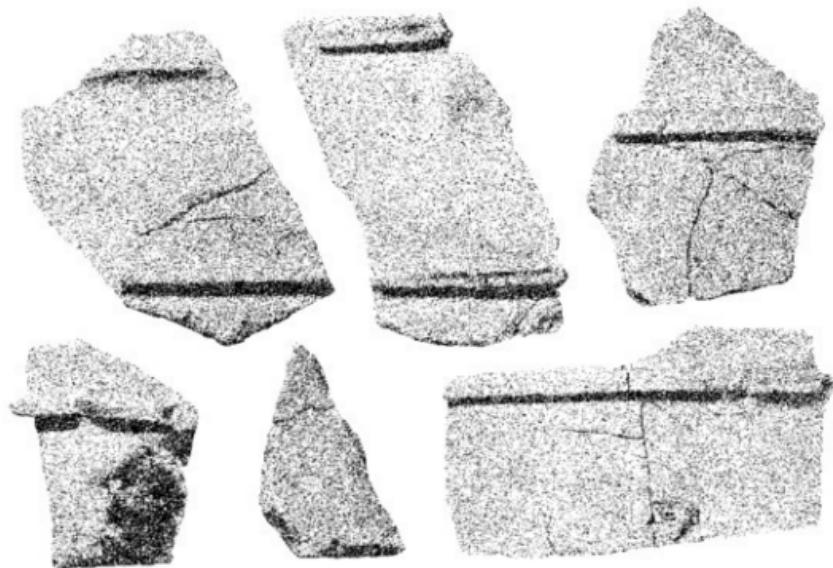
1 小豎穴式石室西側小口部



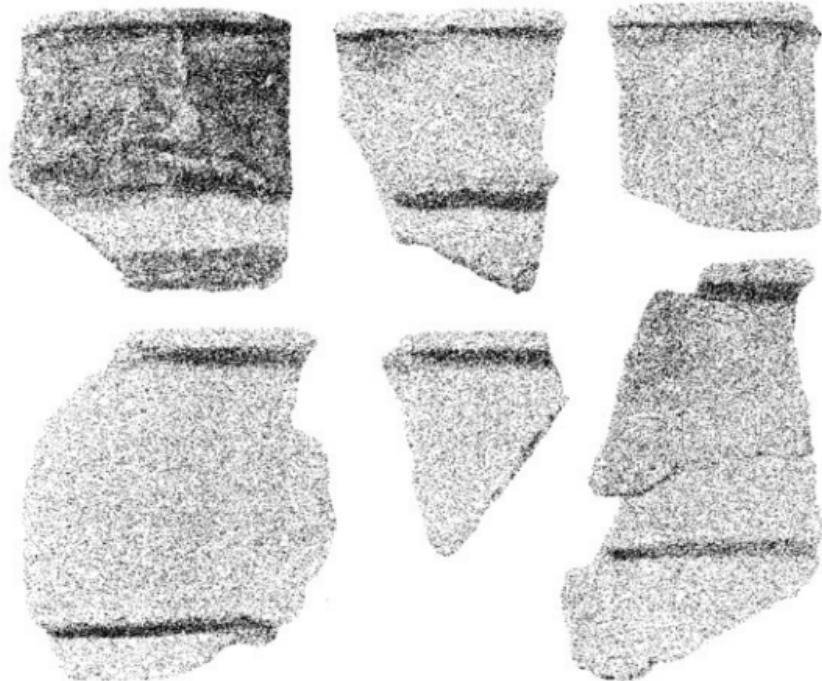
2 小豎穴式石室西側小口部（床面の状況）



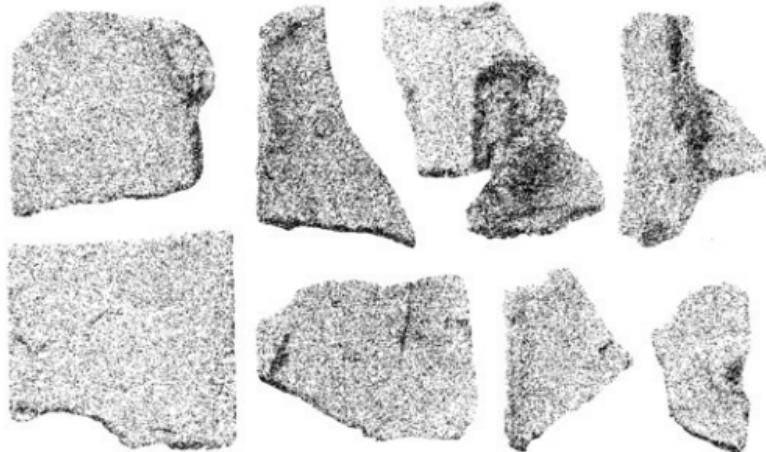
1 円筒埴輪(1)



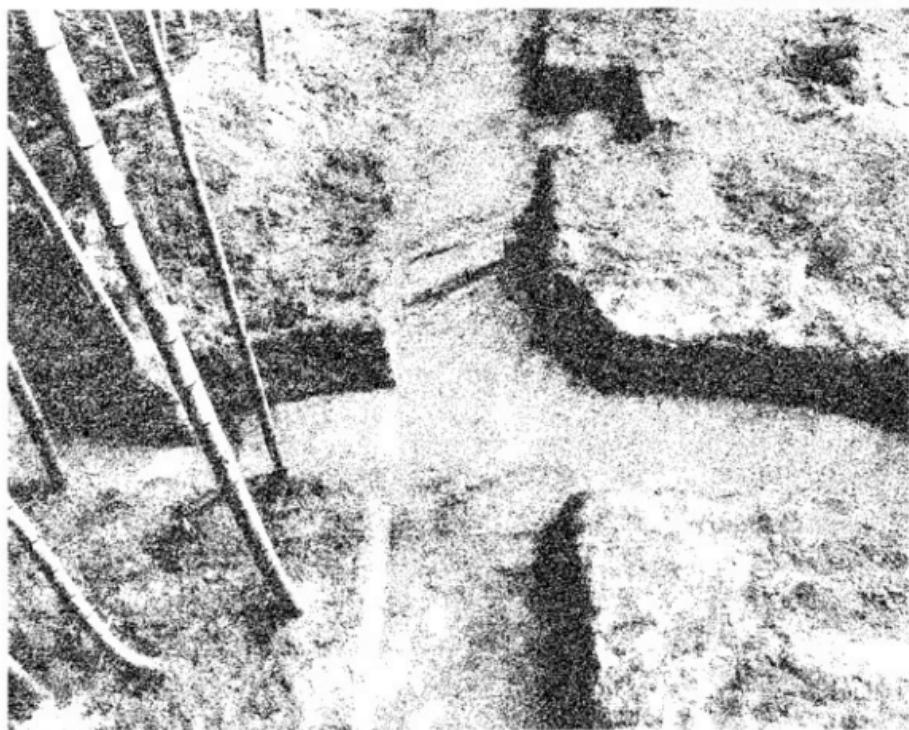
2 円筒埴輪(2)



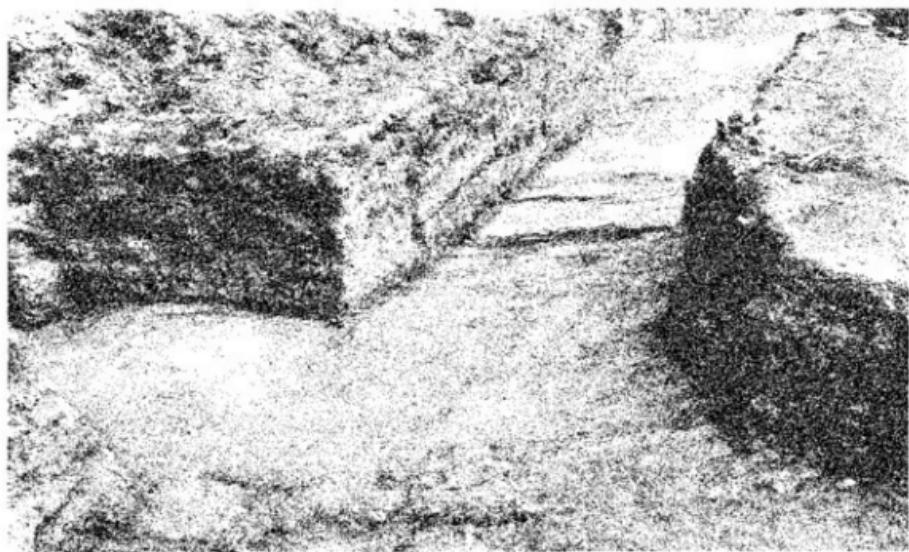
1 円筒埴輪(3)



2 円筒埴輪ヒレ部



1 調査区中央部の状況（西から）



2 調査区中央部の堆積状況

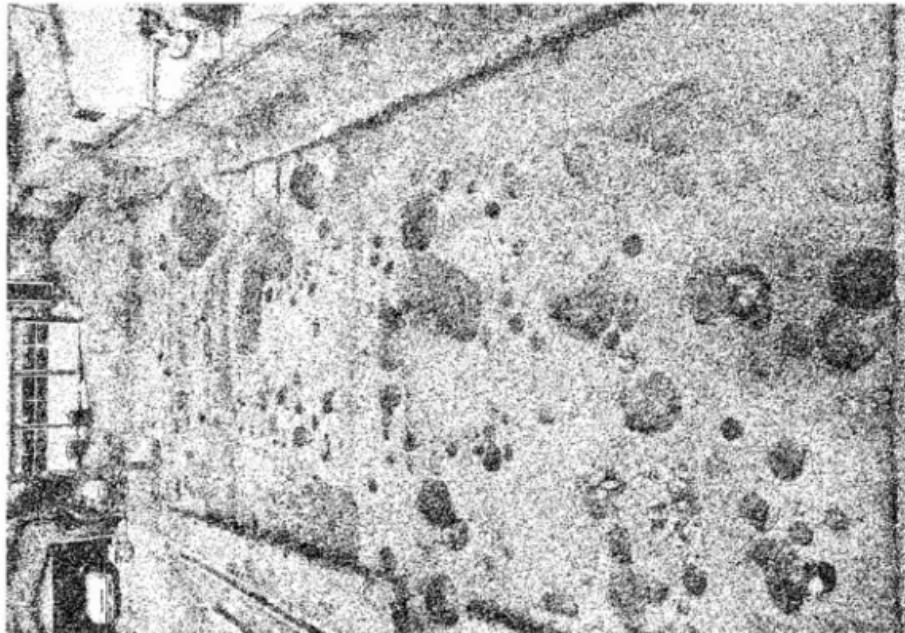


1 丘陵南側崖面の落ち込み

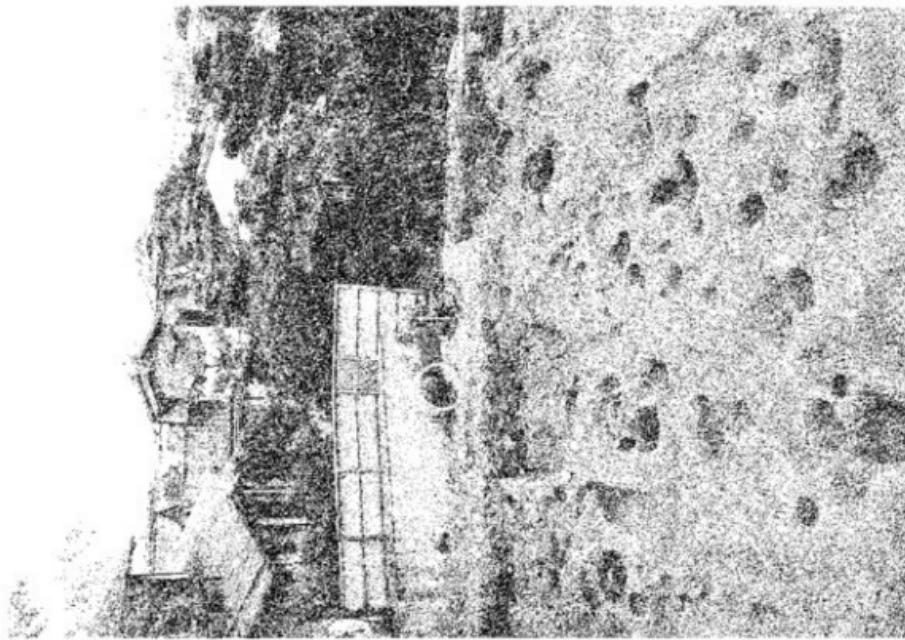


2 落ち込みの断ち割り

2. 調査地全景（拡張後 西から）

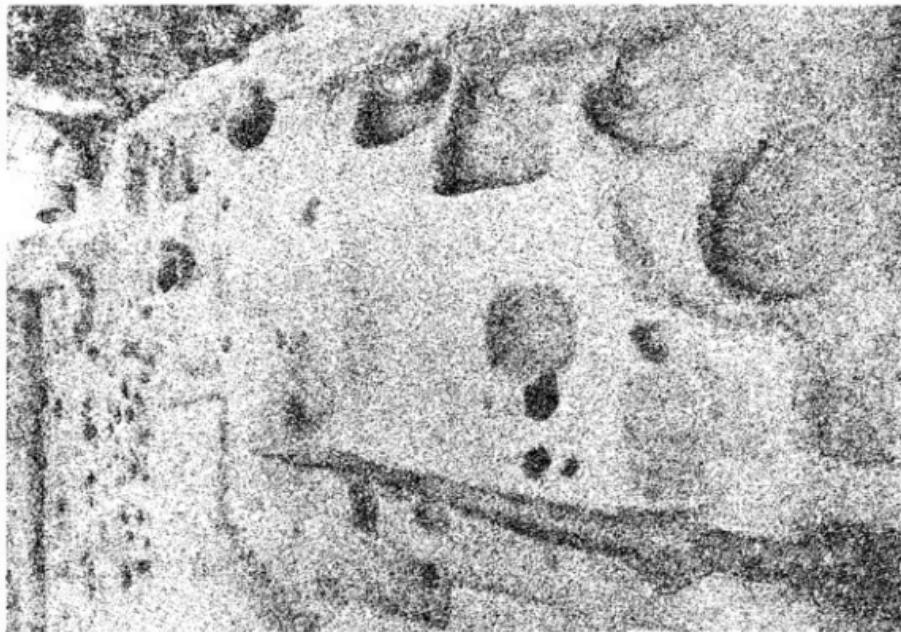
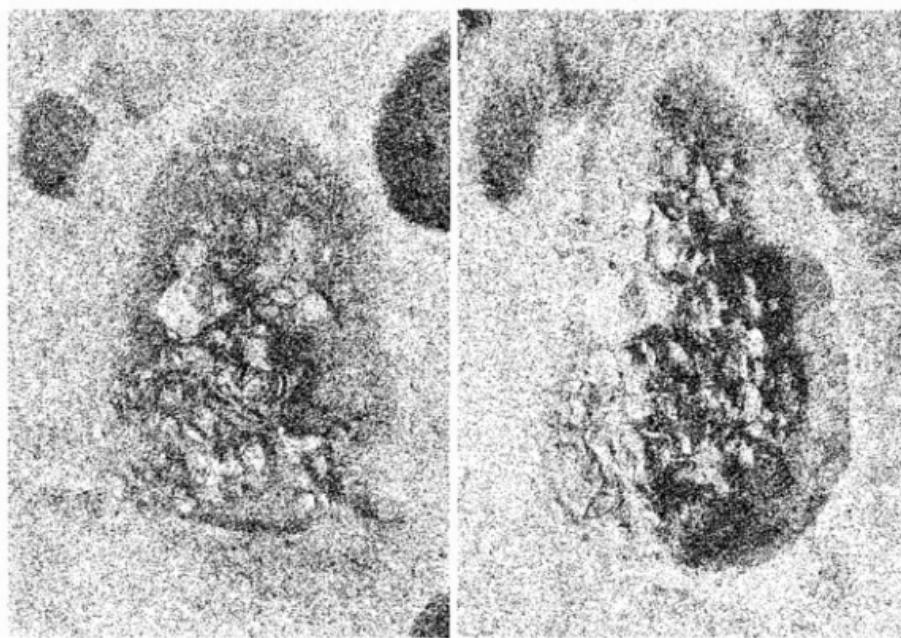


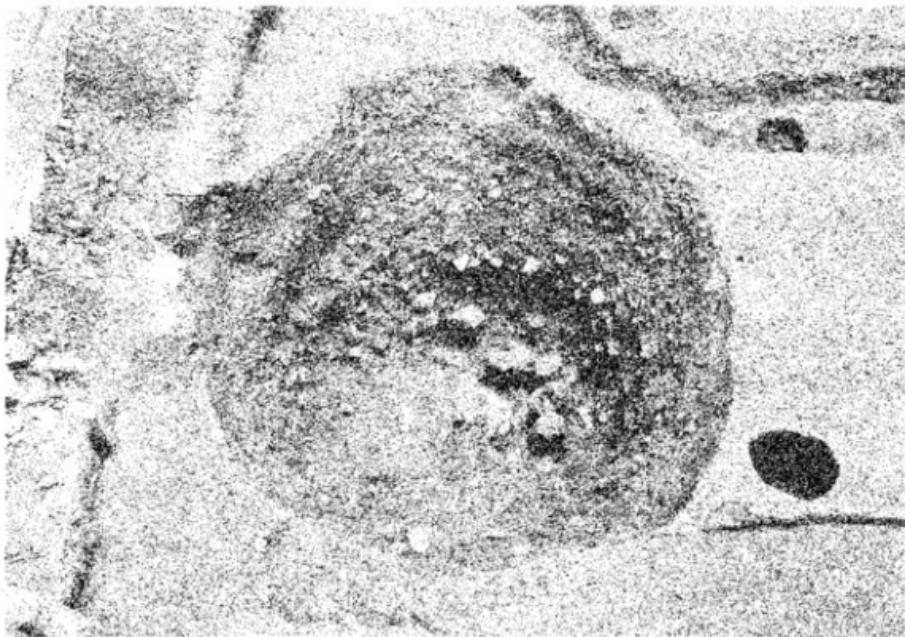
1. 調査地全景（東から）



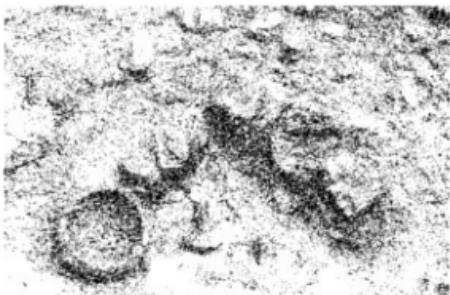
2 土器溜まり S K 33004 (南から)

1 調査地全景 (北東側 南から)

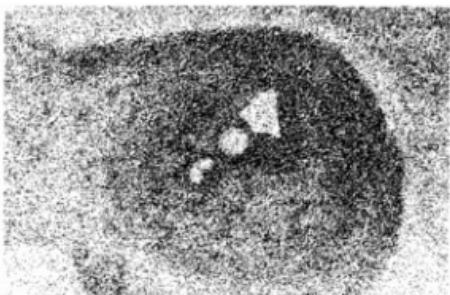




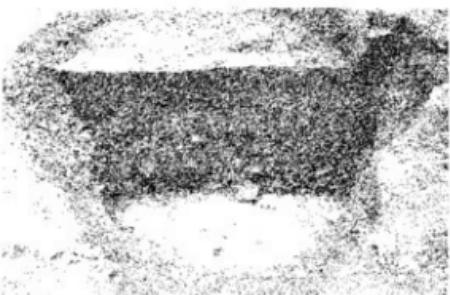
1 井戸 S E 33008 (西から)



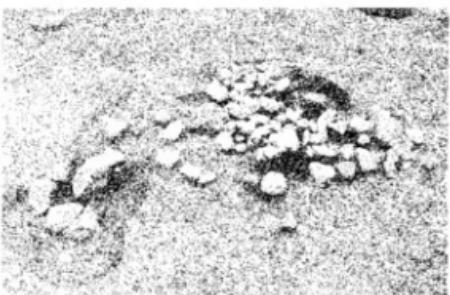
2 S E 33008遺物出土状況



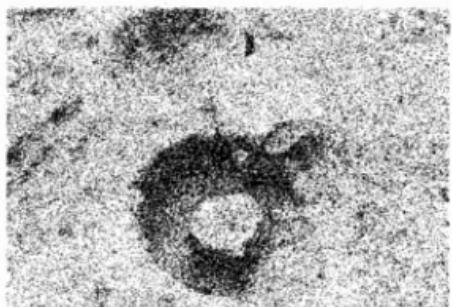
4 P 49遺物出土状況



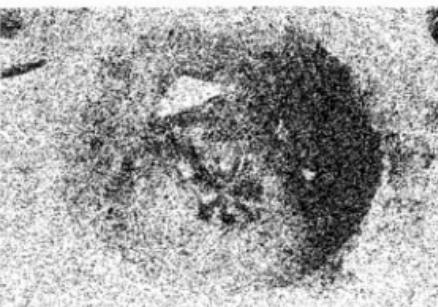
3 S E 33008断面 (東から)



5 S X 33009検出状況



1 P97・P88



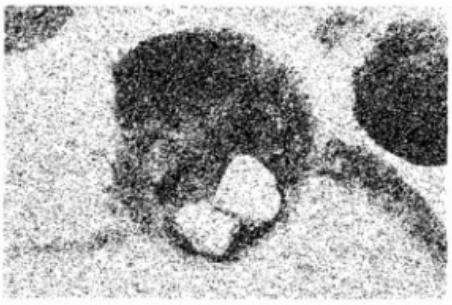
5 P110



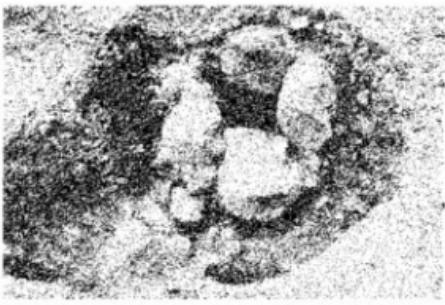
2 P94



6 P118・P119



3 P93



7 P117



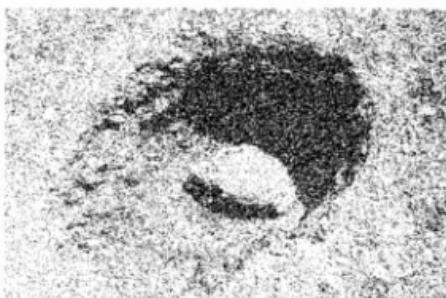
4 P101



8 P108・P121



1 P37・P39



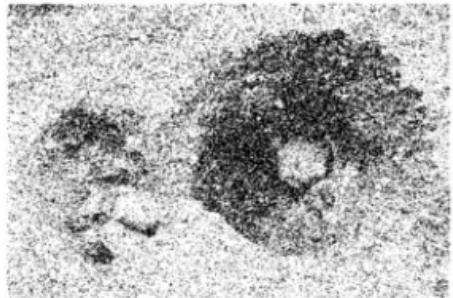
5 P83



2 P98



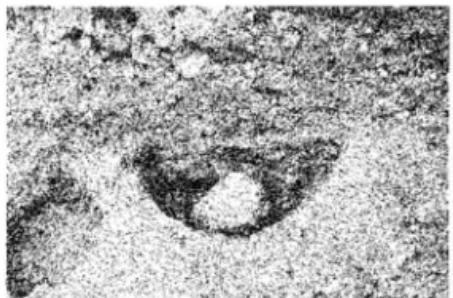
6 P19A・P19B



3 P77・P64



7 S E33011とP92



4 P68



8 S E33015



12



13



22



15



25



19



27



26

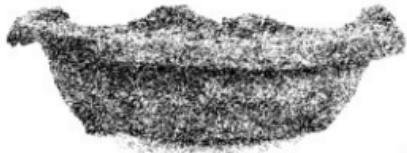


28



29

1 土器溜まり S K33004出土遺物



11



62



9

2 井戸 S E33008出土遺物

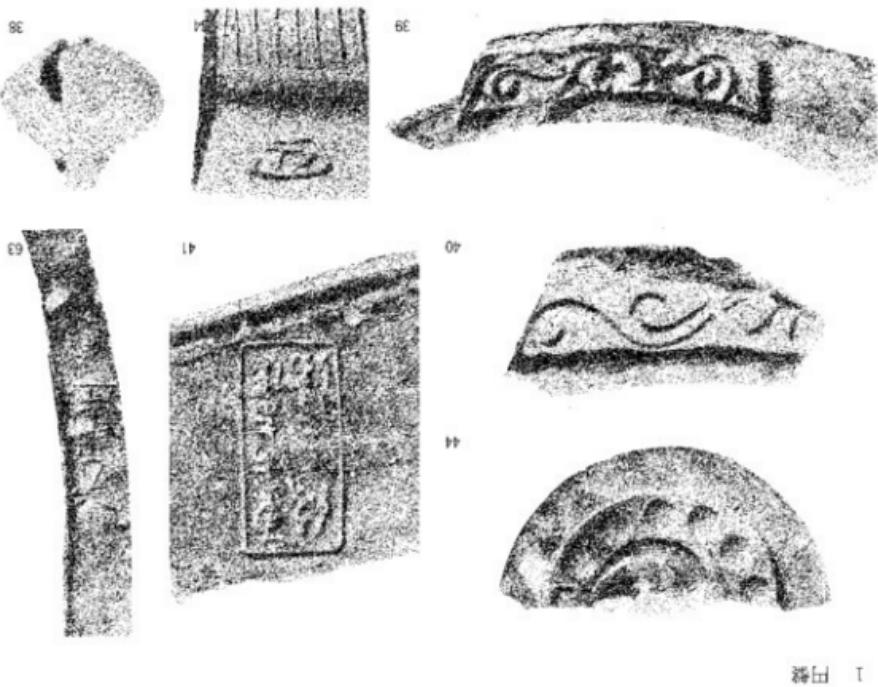


图2

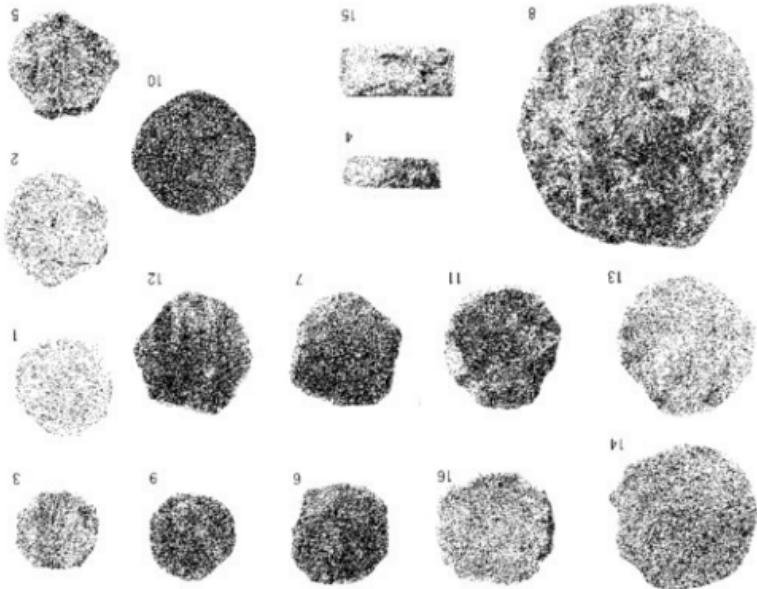
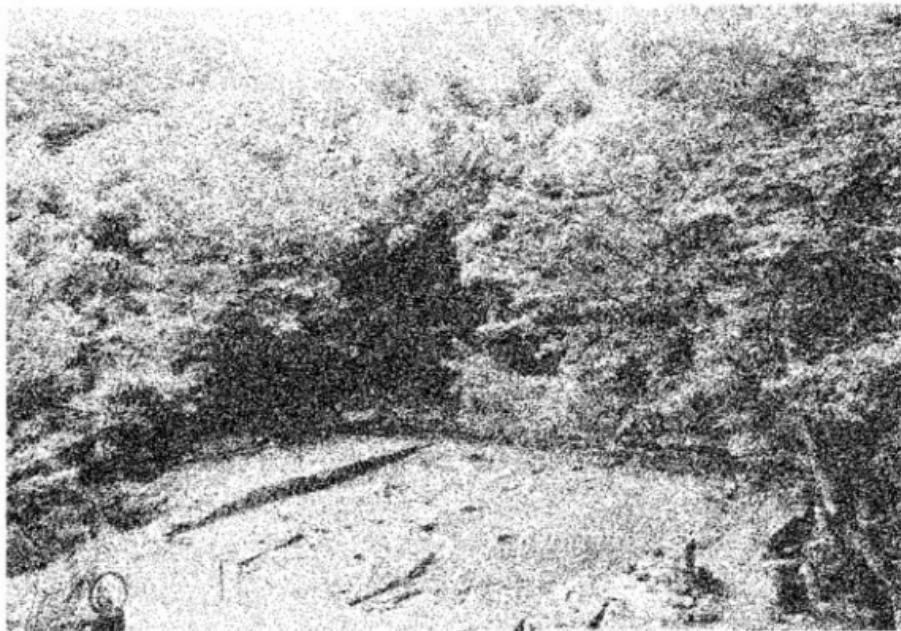


图3 西汉330次圆形封泥



1 調査地全景（上層遺構面一北東から）



2 調査地全景（中層遺構面一北東から）



1 調査地全景（下層遺構面—北東から）



2 磐石建物 S B02-A・B と基壇（南から）



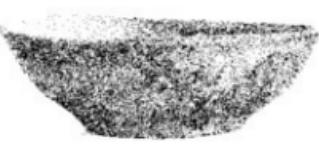
31



12



36



21



5



43



15



7



16



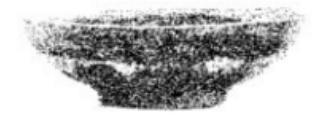
25



29



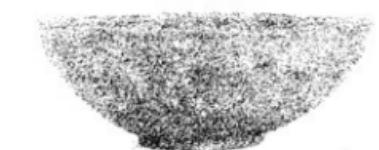
13



37



44



51



119



120



52



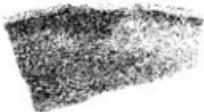
118



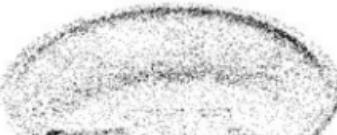
50



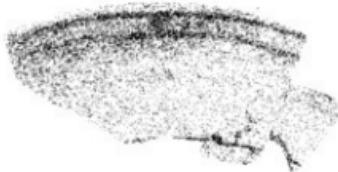
117



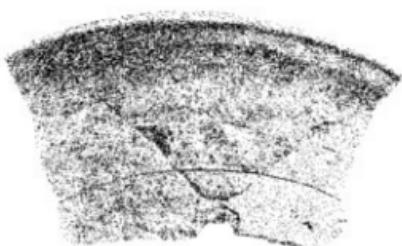
121



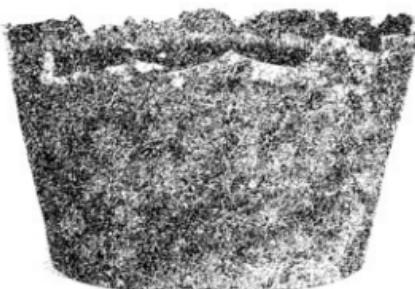
126



122

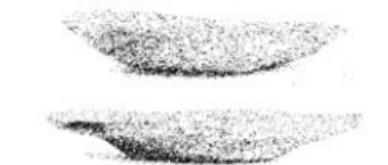


122



127

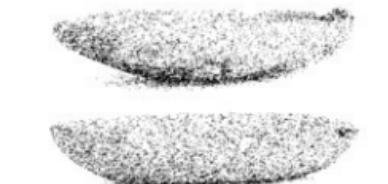
瓦器塊 I、須恵器坏、鉢、染付鉢、瓦器鉢



1

8

28



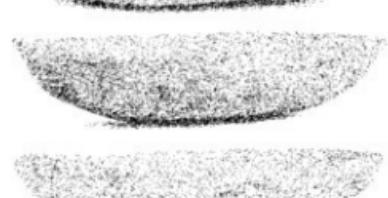
108

114



116

77



83

85

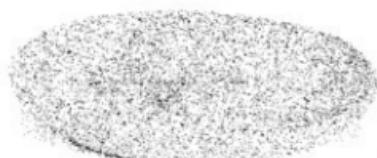


4

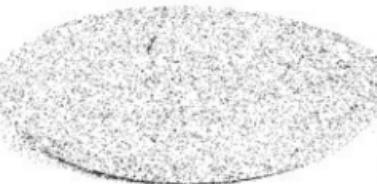
11



12

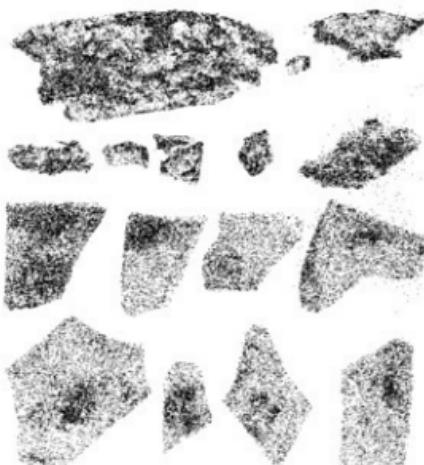


112

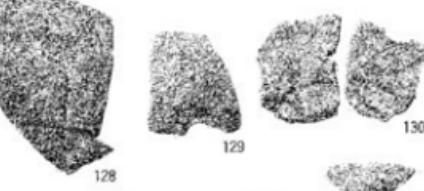


111

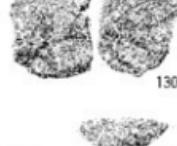
2 土師器皿



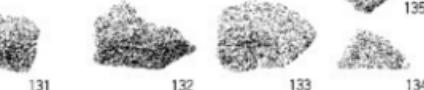
3 金箔製品断片と土師器皿に付着した金箔



129



130



131

132

133

134

1 土師器皿、白色土器三足盤

4 線刻・有孔土器、赤色顔料付着土器、墨書き土器、
ロクロ成形土器



125



124



136



139



137



135



138

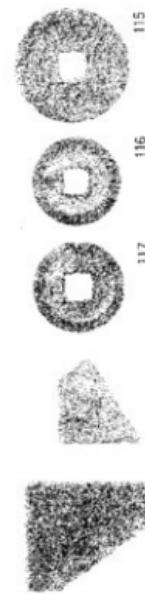


140

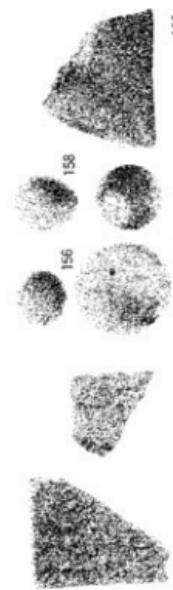
基壇：石列裏込め出土　軒瓦、墨吉土器、石鍋

6 基壇出土 貨幣

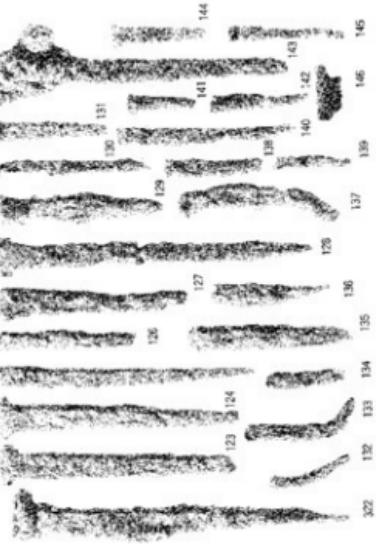
石製品



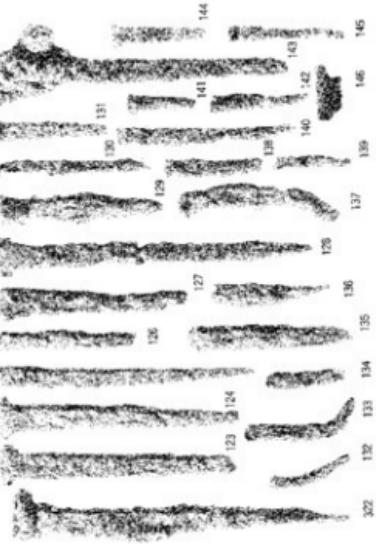
1 基壇・基礎部出土 石



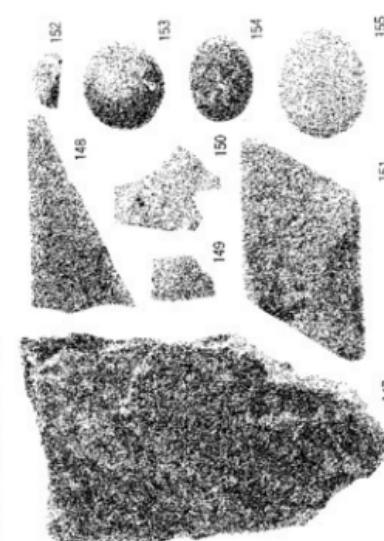
1 基壇・基礎部出土 石



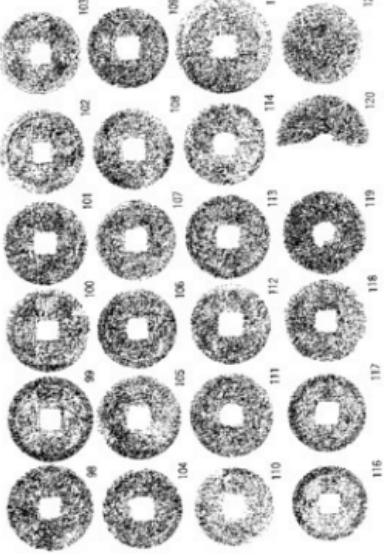
1 基壇・基礎部出土 石



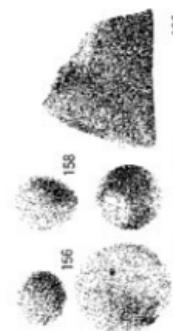
5 基壇出土 鉄釘・横棒



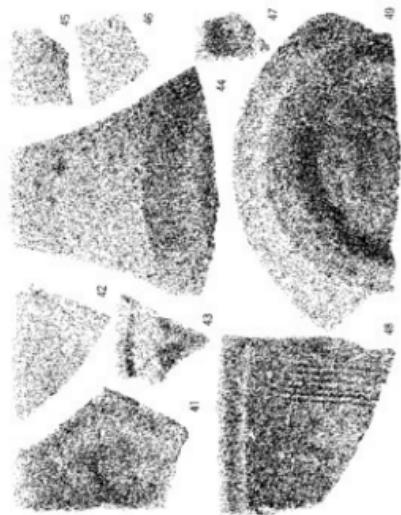
1 基壇・基礎部出土 鉄



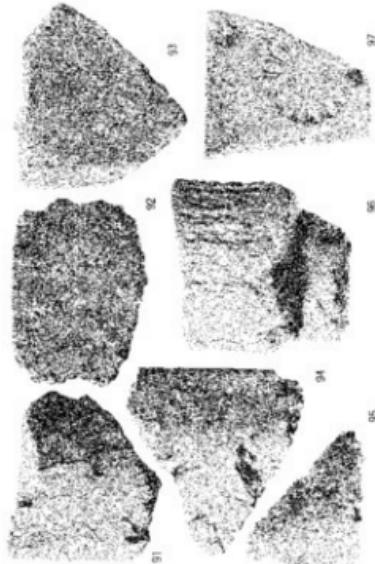
2 貨幣裏面



2 貨幣裏面

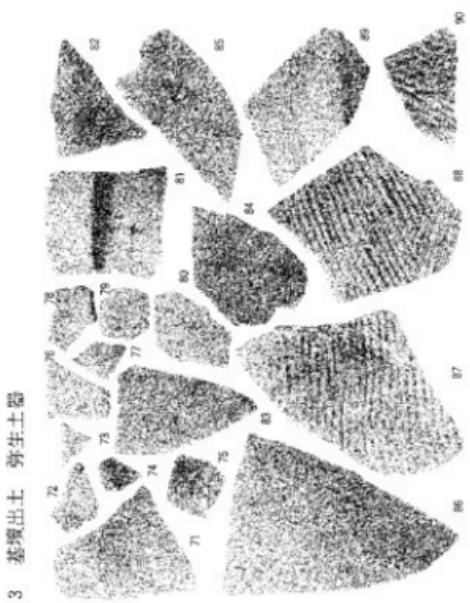
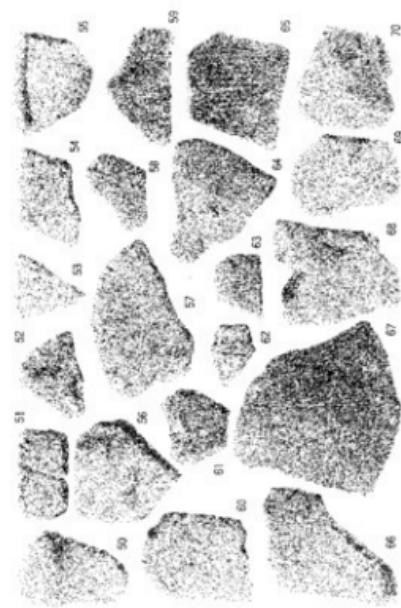


1 基壇・基壇掘出土
瓦磁器



2 基壇・基壇掘出土
平安時代瓦・近世瓦質鉢

3 基壇出土
勞生土器



4 基壇出土
灰陶器

長岡京市文化財調査報告書 第24冊

発行日 平成2年3月31日

編集・発行 長岡京市教育委員会

〒617 京都府長岡京市開田一丁目1番1号

電話 075-951-2121

印刷 **きょうせい**

〒530 大阪市北区天満2丁目7番17号

電話 06-352-2271